

# 中国内陸部における貧困対策に関する研究

—「移民新村」政策を中心にして—

(2)

研究代表	東洋大学経済学部教授	阿部 照 男
研究分担者	東洋大学経済学部教授	横 川 伸
研究分担者	東洋大学経済学部教授	郝 仁 平
研究分担者	東洋大学経済学部教授	今 東 博文
研究分担者	東洋大学アジア文化研究所 客員研究員	針 生 清 人
研究分担者	東洋大学アジア文化研究所 客員研究員	飯 塚 勝 重
研究分担者	東京経済大学経済学部准教授	羅 歆 鎮
研究協力者	中国西北大学陝西発展センター 教授・研究員	葉 道 猛
研究協力者	中国甘肅省社会科学院 社会学所所長・研究員	包 曉 霞

本研究は平成19年度文部科学省科学研究費補助金  
基盤研究（B）による助成を受けたものである。

# 中国内陸部における貧困対策に関する研究

—「移民新村」政策を中心にして—  
(2)

平成19年度

東洋大学中国扶貧「移民新村」政策研究班

代 表 阿 部 照 男

# 平成19年度研究調査報告

## 目次

- (1) 中国内陸部貧困対策の研究について  
今年度研究調査の概要 研究代表 阿部照男
- (2) 平成19年度調査報告
- 第一部 調査記録(平成19年度調査)
- 第二部 調査総括
- 1 「移民新村」政策の多様性と変容 阿部照男  
—2007年現地調査を終えて—
- 2 「移民新村」政策の諸問題—予備調査と視察の概要 針生清人
- 3 移民新村政策の効果：調査データによる初歩的分析 郝仁平
- 4 変容する退耕還林・還草政策—「新農村」運動を巡って 飯塚勝重
- 5 “七笔勾”与新农村——延安调查散记 葉道猛  
(訳 高木晶子)
- 第三部 西北大学委託調査
- 第四部 調査日程表
- 第五部 「扶貧移民」政策研究(論文) 包曉霞  
瓜州の移民進捗状況に関する考察と思考 (訳 高木晶子)  
(原題 “落地开花”与“落地生根”  
—关于瓜州移民发展状况的考察及思考)
- 第六部 収集資料
- 第七部 平成19年度研究活動

# (1) 中国内陸部貧困対策の研究について

## 今年度研究調査の概要

研究代表 阿 部 照 男

### 1 これまでの経緯

20世紀の第4四半期、社会主義陣営の世界的行き詰まりを背景として、中国は、毛沢東没後、1978年、鄧小平の唱導のもと、「改革開放」へ向けて走り出した。爾来30年、中国は、日本のかつての高度経済成長期を遙かに上回るような驚異的な高度経済成長を続けてきた。しかし90年代に入ると、急激な経済成長による綻びが見え始めた。特に、開発の進んだ沿海部と遅れた内陸部との地域格差が目立ち始め、経済発展の恩恵から取り残された地域や人々、殊に農民の不満が増大するにいたり、社会不安へと繋がる様相を帯び始めた。この事態を受けて、1999年、江沢民主席は中国西部・内陸部の経済開発を柱とする「西部大開発」政策を導入した。

われわれ東洋大学アジア文化研究所のメンバーは、この壮大な国家プロジェクトの帰趨が中国の将来、ひいては日本に与える重要性に鑑み、2003年度に、「中国『西部大開発』と地域社会の変容」という研究プロジェクト<sup>(1)</sup>をスタートさせた。このプロジェクトは、2005年度に完了したが、そこで明らかになった問題の核心は、「貧困問題をどのように解決するのか」ということであった。われわれは、引き続きこの問題に取り組むため、2006年度から、「中国内陸部における貧困対策に関する研究」というプロジェクトを立ち上げた。<sup>(2)</sup> 新プロジェクト初年度である昨年度は、陝西省北部の延安市延川県および子長県を中心にして、「移民新村」の現状を現地調査した。この調査と併せて、西北大学への委託業務として、調査票による聞き取り調査のための予備調査がおこなわれた。

### 2 今年度研究調査の概略と位置づけ

今年度の調査研究は、この新プロジェクトの2年目である。昨年度のわれわれ自身による現地調査および委託予備調査を踏まえて、今年度は、委託調査を本調査に発展させるとともに、われわれ自身による現地調査も対象地域を陝西省だけでなく、甘肅省を含むものへと発展させた。

まず、陝西省については、2004年度の現地調査での調査対象移民新村の1つであった延安市宜川県高柏郷の諸村を訪ね、その後の状況を調査した。また、新たに陝西省銅川市宜君県において移民

#### <註>

- (1)これについては、以下の資料を参照されたい。①<2004年度東洋大学特別研究助成プロジェクト>「中国『西部大開発』と地域社会の変容 2004年度研究調査報告」(『東洋大学アジア文化研究所 研究年報』第39号(2005年2月)所収)。②<2005年度東洋大学特別研究助成プロジェクト>「中国『西部大開発』と地域社会の変容 2005年度研究調査報告」(『東洋大学アジア文化研究所 研究年報』第40号(2006年2月)所収)。
- (2)<2006年度科研費プロジェクト>「中国内陸部における貧困対策に関する研究—『移民新村』政策を中心にして— 2006年度中国『移民新村』研究班プロジェクト研究調査報告」(『東洋大学アジア文化研究所 研究年報』第41号(2007年2月))。

新村を調査した。

甘肅省では、まず、敦煌市を基地として、酒泉市瓜州県で建設中の移民新村と定住後かなり年月の経過した移民新村のいくつかを調査した。この地域は砂漠地帯であり、陝西省中部と較べると、自然条件がまったく異なっているので、移民新村の別の姿を見ることができた。また、甘肅省では省都蘭州市の永靖県では、扶貧政策の現状を調査した。

今年度の現地調査によって、われわれは、自然条件の異なる移民新村の多様な現状を把握することができた。次年度以降も、できるだけ幅広く、さまざまな地域、条件の移民新村を調査し、貧困対策を規定する諸条件を分析していきたい。

### 3 中国側の調査協力体制について

今年度調査に当たっても、昨年度同様、西北大学陝西経済発展研究センター教授・葉道猛氏、陝西省政府政策研究室主任・鄭夢熊氏、延安市政府政策研究室主任・鄧世宏氏に大変お世話になった。また、今回の甘肅省調査に当たっては、甘肅省社会科学院社会学研究所所長・包曉霞氏に大変お世話になった。そして、調査各地域の地方政府幹部の方々にも大変お世話になった。記して深く感謝する次第である。

また、葉氏の指導の下で、実際に聞き取り調査を担当された西北大学大学院生の諸氏に謝意を表する次第である。

### 4 本報告書の作成経過について

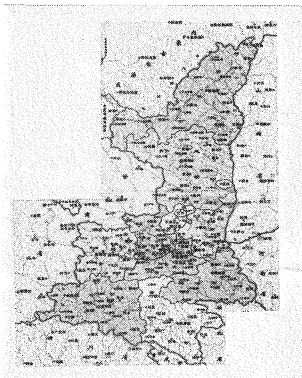
本報告書の作成については、調査メンバー各人によるメモ書き、記録、写真、録音、収集資料、コメントなどを持ち寄り、協議の上、全体の構成を決め、それに基づいて、実際の編集作業は、飯塚研究員が阿部と協議しながら担当した。飯塚研究員がこの作業に掛けられた労力と時間と情熱に対して深く感謝したい。しかし、文章全体の最終責任は、研究代表者が負うものである。

## (2) 平成19年度調査報告

# 第一部 調査記録（平成19年度調査）

平成一九年度「中国内陸部における貧困対策に関する研究」

### 陝西省延安市宜川県調査（9月2日～3日）



2007年度陝西省調査地  
延安市宜川県  
銅川市宜君県



西安の宿舎を早朝出発、9号西包高速道を北上する。洛川のSEでは付近の農民が、銘産のリンゴを売る露店を出している。一袋購入、試食のつもりで一口かじると意外に甘く、色艶も良い。粒も揃っている。数年前とは格段の違いである。沿道のリンゴ畑にも袋掛けの畑が多く見られるようになった。しかし、かなり高く枝の先々までかけられ、まだまだ個数にこだわっている様子が見て取れた。

富県で延安市農村政策研究室主任・鄧世宏氏の出迎えを受ける。車は左折し、309号線を黄河に向かって一直線に進む。沿道には煙草畑が連なる。所々、農家院の看板が見える。民宿兼レストランであるが、先発の農家楽とどう違うのか。午後1時半宜川県着。任喜全副県長に迎えられる。リンゴの生産は洛川県が50万ムー（1ムーは6.667アール）で第1位であるが、宜川県は23万ムーで一人当たり2.5ムーであるという。午餐休憩の後、県政府幹部と座談会開催。

#### (一) 宜川県における沿黄扶貧開発状況についての座談会

宜川賓館会議室で宜川県政府幹部と15時半から18時に渡り座談会を開催。

宜川県側出席者（以下本記録中人名は敬称略）

県政府副県長	任 喜全
財政局副局長	陳 鎮山
農業局副局長	范 忠科
畜牧局局長	張 文軍
政策研究室主任	蘭 学泳
老区弁主任	蔡 引林
水利局副局長	馮 旭楊



## 座談会内容

- 1 司会 延安市村政策研究室主任・鄧世宏氏
- 2 挨拶 東洋大学調査団を代表して阿部照男研究代表が挨拶。今回の調査は昨年実施した延安市延川県・子長県などに引き続くものであり、中国農村・農民の扶貧問題に関する具体的な解決策が如何にあるかを見極めようとするものであり、この研究を通じて、日中友好を増進し、日本における中国社会の根本的理解に寄与したいと述べた。
- 3 挨拶 宜川県の党及び人民政府を代表して任 喜全が歓迎の挨拶を行う。

## 4 座談会

開始にあたり、阿部研究代表から、今回の研究・調査の視点について大凡次の通りのべた。

10数年来、中国経済研究に携わってきたが、最近の中国経済発展は信じられないほどの速さである。その中で、最近日本のNHKが中国社会を報道する中で、「月光族」という言葉を紹介し、月々の給料収入を貯蓄することなく使い切ってしまう若者たちを言うことになった。その実態は、急速な経済成長で月給が上がっていき、毎年収入が増えていくので蓄えを考えなくとも良く、又、若者の親の世代が裕福になり、一人っ子政策の中で家庭が豊かになってきたからであるという。

私たちにとっては先を越された感があるが、この言葉に象徴されるように中国は急速に発展してきたのである。しかも、中国の経済発展は日本の経済関係にも大きな影響を与え、今や中国が変われば日本も変わる、日本が変われば中国も変わる、不即不離の関係に変化している。

中国の経済発展が日本にどのような変化を与えているか。例えば西部大開発もその一つである。2003年から、アジア文化研究所で、西部大開発研究を開始した。このプロジェクトは3年間で一応の区切りを付けた。この結果私たちには様々な問題が見えてきた。その一つで、最も重要な問題は貧困問題である。2006年から4年間のプロジェクトを立ち上げ、この貧困問題の中で、中国政府が力を入れている「移民新村」政策を取り上げた。

2004年、私たちは宜川県の移民新村を視察した。その頃はまだ一部分が開村したばかりで、方向性がはっきり見えてこなかった。3年後の今日ではどの様になっているのか。その現状を伺いたく訪問した。

### (1) 宜川県扶貧開発工作状況紹介

県政府任喜全副県長から詳細な報告がなされた。要約は次の通り。

#### 一. 宜川県概況

宜川県は黄河沿岸にあり、延安市の東南部に位置している。全县は5鎮7郷と一つの城区街道弁事所、202の村委員会からなり、総人口11.6万人である。国土の総面積は2,938.5平方キロメートル、人口密度は1平方キロメートルあたり39人である。陝北黄土高原丘陵・溝壑区に属し、地形は複雑であり、海拔は最高1,710.5メートル、最低は388.8メートルである。県域内の森林覆蓋率（緑化率）は59.9%である。宜川は国家扶貧開発工作の重点県である。全县一人当たり平均GDPは3,746元であり、全国水準の17.36%に過ぎない。財政収入は2,010万元である。農民一人当たり平均純収入は2,001元、絶対貧困人口は4,776人である。

#### 二. 近年の黄河沿い扶貧プロジェクトの成果

新段階の扶貧開発以来、われわれは「集中移住、総合配置、整村推進、貧困より小康に至る歴史性を超える」を柱として黄河沿い扶貧開発の戦略を堅持してきた。その目標として、「扶貧の道筋を大事にし、一本の移民村を建設し、一本の産業帯を發展させ、貧困戸を富戸にする」考えで、「五個統一」による建設を堅持し、「四制管理」による質量を把握し、「三つのプロジェクト」をもって損失を防ぐ措置をし、移民新村建設をテコに、重点を掴み、難点を攻め、明瞭さを持ち、主導産

業をもって支えとし、基地を壮大にし、特色を作り、効益を増し、貧困人口を解決するに足る温飽をなし、貧困人口の収入を増加させ、貧困地区の生産条件を改善し、①産業開発、②インフラ建設、③智力で扶貧、④旧村農地回復、⑤生態建設、⑥労務輸出の六大工程を突出して実施することであり、扶貧開発工作を着実に推進し、段階的成果を取得した。三年来、投入資金累計は1,380.2万元であり、新たに建設した移民新村は14、建設した家屋（ヤオトン）は1,600戸5,146部屋（ヤオトンの部屋）を建て、81の村組、1,600戸・7,692人を移住安定させた。人の飲み水用工事38箇所、水窖（干ばつに備える井戸）658箇所、新設公衆道路681キロメートルを建設、教学棟（実験棟）7棟を建設、改修・拡張衛生院（病院）9箇所を建設。農業用電気、放送用電線の戸口別引き込み率は100%と100%に達した。2006年、全県梨の総生産額10.9万トン、生産高1.85億元、黄河沿い7郷鎮の新植栽梨園10,280ムー、サンショウ2,700ムー、クルミ920ムー。畜舎飼養羊6,028頭、新建設農家楽（民宿）13軒。新規基本農田8,419ムー。農村労働力輸出1.1万人、労務収入8,000万元余。

2006年、全県農民一人当たり平均純収入1,282元で、2001年に比較して447元増加し、35%増長した。

### 三. われわれの具体的方法

(一) 土地事情に適した方法で、科学的に企劃し、貧困群衆に富をもたらす青写真を描く。

数年来、われわれは常に「専門家が論証し、政府が主導し、群衆が参与し、科学が決定する」の原則を堅持し、「一筋の扶貧道路を作り、移民村を建設し、一本の産業地域建設を發展させ、貧困戸の所得を向上させる」の基本思考に照らし、その土地事情に適した方法で、扶貧と持続發展できる長期の規劃と当年実施の計画を結合させ制定した。これは一に「土地事情に適した方法、合理的配置、科学的規劃、分類指導」の原則に照らして農業、林業、水利、畜牧、交通等の専門技術員を選び派遣し、深く実地に入り調査研究し、村級規画を制定し貧困脱出の拠り所を提供した。二に組織が群衆を引導して、貧困となる原因を分析し、今後の發展構想を探索し、扶貧開発のモデルを参照して、組織は村民大会を招集し、村の実情に基づき、群衆の増収により、生産・生活条件の改善、産業機構の調整、科学技術教育、医療・衛生、社会公益事業發展等の方面の討論を進行させ、広大な群衆が自らプロジェクト選びに参加し、規画を定めた。三に組織関係部門と技術人員は、村民が選んだところのプロジェクト進行に対し、評価・論証し、扶貧項目を確定し、科学・系統的扶貧開発企画を制定し、当地に適合する實際的科学發展と富に至る道を選び許可した。四に「政府組織・群衆参与・一年で規画・年を分けて実施」の原則に照らして、遠隔山地に分散している貧困群衆が自ら移住地を選択し、生存環境の劣悪なところより広い村の境界の五キロ以内で、出入に便利で、郷鎮をもって中心とし、国・省・県・郷道をもって起点とし、産業帯をもって郷鎮政府所在地或いは自動車道路沿線に委託し、生存環境条件の比較的良く、産業を發展させるに優勢な土地を有して、移転群衆の積極性や主体性を十分に結集させられる土地に移転させた。

(二) 厳格な管理、質量向上により、貧困戸に發展資本を蓄積させる。

質量効益は黄河沿岸扶貧開発プロジェクトの命脈であり、扶貧攻略の勝敗を直接に決定付けるものである。工程実施中であって、われわれは始終党政一緒にプロジェクト法人が総責任を負い、主要指導者の全般的把握・分担指導者重点把握・扶貧財政監督把握・関連部門調整把握・上下一心協力把握の作業システムを立ち上げ、拳を掲げ、共同作業を合成した。一に、このことは制度の保証を強化した。移民新村建設中において、われわれは広範囲な調査研究を通じて、『宜川県黄河沿岸扶貧開発項目資金管理弁法』『宜川県黄河沿岸扶貧開発項目实施方案』『宜川県黄河沿岸扶貧開発工作責任追究考核（審査）弁法』等1系列の制度措置を発令し、扶貧開発の順調な進行を保証した。二に、プロジェクトの質を厳しくチェックした。具体的な作業中、「五つの統一」を堅持して建設し、「四つの機能管理」で質量に力を入れ、「三つの措置」で負担軽減を保証した。「五つの統一」



とは乃ち、統一規画、統一入札募集、統一標準、統一建設、統一検収である。都市建設部門は「経済は実用、美観は専門家、総合組み合わせ、一步所定の位置に」の思考で、堅固な実用性を求め、周囲の環境と統一性を調節し、又、20年経っても立ち後れせず、同時に群衆の願望と経済引き受け能力を考慮し、新村に対し、水、電気、道路等基礎施設を配置し、教育・衛生・科学技術など社会公益事業を同様設計し、一括して、一つの標準、一つの物差し、移民新村に対する統一規格を進行させ、努めて高い標準、機能が完全、効果が上がることを求める。三に、資金のタイアップを行い、投資効果をを引き上げた。資金を得るのは容易ではなく、扶貧資金の使用において、われわれは終始「ルートを乱さず、用途は変えず、タイアップし、それぞれの効能を記録する」を原則に、部門・案件・人材の有利な点を整理統合し、できるだけ水、電気、道路、ラジオ・テレビ、学校、衛生等の各種資金をすべて全体の計画に組み入れ、全面的に考え、村のプロジェクトをいくつかに分けてまとめ、実施に当っては順次照合して、集中的に投資し、最大の効果が得られるようにした

(三) 総合的配置を行ない、村の整備を推進、貧困人口の自己発展能力と持続可能な発展力を高める。

集中移転の目的は貧困人口が安定して脱貧問題を解決することにある。移民新村経済と社会各プロジェクト事業の発展を早め、「移民が出来、スムーズに住まいを得て、所得を向上させる」の目標に基づき、われわれは移民新村建設と農村基礎施設建設・産業開発・農村文化・教育・衛生等の社会事業発展を取って、統一的に計画的に案配し、総合的組み合わせ、セットで推進し、優れて産業開発・インフラ建設・扶貧智力・旧村耕地復活・生態（環境）工事・労務輸出の6大プロジェクト建設を実施し、治愚・治窮・治病を総合的に結合して実現し、群衆の通行難・用水難・就学難・医療難の問題解決に取りかかる。移転戸がその所において耕すに田畑があり、所得向上出来るように解決する。

1. 産業開発を強化し、貧困村群衆が着実に貧困から脱却するために有効なコンテンツを築く。

壮大・特色ある主導産業を発展させることは貧困戸を永久に貧困から脱して、富みに至る根本を打ち建てる重要な支柱である。黄河沿岸扶貧開発中われわれは大いに当地の資源と主導産業を優勢に発揮して、「規模化発展、標準化発展、産業化経営」の思考に照らし、産業システムを積極的に調整し、貧困農民の土地事情に適した方法で特色と養加等の増収プロジェクトを導き、リング生産を盛んにし、草畜業を発展させ、2、3の産業を発展させ、大幅に貧困群衆の収入増加を図り、貧困戸の造血機能増強に努力し、「移民でき、所得を向上させ、再び貧困に戻らない」ことを確保する。ここ二年来、黄河沿岸7郷鎮移民地に新たに梨10,280ムーを栽培し、合計99,114ムーに達し、新栽培の花椒（トウサンショウ）2,700ムー、新栽培クルミ920ムー、分類合計は97,290ムーと2,681ムーとなる。小屋に飼う羊は6,028匹、新たに建てた農家楽は13軒、貧困群衆のため安定した増収体制が立ち上がってきている。

2. インフラ設備建設に力を入れ、貧困村群衆が着実に貧困から脱却する飛躍の場をつくる。

農民の安定した増収システムを目標として、強力に道路、水、電気、基本農田等、農業インフラ施設建設を推進し、貧困郷村生産条件を根本より改善し、黄河沿岸群衆の安定した脱貧の仕組みをさらに高めていく。われわれは公共道路建設の重点を移転先と移転を企劃する道路を接続させていき、ここ二年来、全県通郷アスファルト道路を5本、117キロメートル、等外砂利道を4本23キロメートル建設し、4級砂利道12本323キロメートルを建設した。その中孟依路は3郷鎮35村23,000の貧困人口に受益する放射路であり、人的交流・物流・情報伝達を促進し、直接に沿線の主導産業発展を盛んにしている。500万元余の投資で閣楼鎮殿頭に供水プロジェクトを集中し、閣楼鎮16个村8,530人の飲水困難および8,530ムーのリングによる主導産業生産用水を解決した。周りに一人平均2.5ムーの基本農田目標を実現し、河の台地をならして、水平な棚田と淤地

ダムを修復利用を主として、新たに基本農田8,419ムーを造成した。

### 3. 教育による扶貧を強化し、貧困層の自信と能力を増強する。

貧困解決には先ず無知を解消することであり、扶貧は先ず志を助けることである。われわれは「普九」運動と農村中・小学校配置調整を結合させ、着実に地方政府の負担を認識し、分級管理をし、県を主とする農村義務教育管理体制をもって、農村教育に力を入れ、次第に安定的な経済投入の保証システムを投入し、農村勉学条件を改善した。移民新村サービスの閣樓・高柏・集儀・秋林等中心の小学校に304万元を投入し、規模を拡大し、様相を改め、同時に確実に「2免除一補助」の政策措置を認め、教育資源と教師資源を配備し、学生の全面的発展に保証を提供した。普段に黄河沿岸医療衛生条件を改善し、64万元を投資し、相継いで高柏・閣樓等4箇所衛生院を建て、現在全て利用が始まっている。同時に貧困地区群衆の科学技術水準差と、生産技術の低い状況に向かつて、われわれは「実際・高効・実用」の原則に基づいて科学技術訓練度を加え、主導産業を取り囲み、果実業・畜牧業等専門家を組織し、末端に深く進入して現場指導を展開し、移民新村のために各種訓練班を20余期実施、特に、リングの4大技術訓練は、貧困戸40,000余人が直接受講し、科学技術資料5,000余部を配布し、一人の農民が一つの貧困戸を導くという目標を達成した。

### 4. 旧村の復耕を強化し、貧困群衆の産業を発展させるための基盤を定める。

2年来集中移転した51個の旧村において耕地を戻し調整し、新たに土地面積1,162.8ムーを増加し、8個の移民新村占地472.5ムーと比較して、耕地面積は690.3ムーを増加させ、移民新村建設で、耕地を減少させず、更に耕地面積を新たに増加させたのである。

### 5. 生態系整備に力を入れ、貧困区域の持続可能な発展継続力を増強する

人と自然の調和発展を統一して計画的に案配し、人と環境の共存共生の生態思想を樹立し、循環経済と持続発展できる新理念をもって黄河沿岸扶貧開発を指導し、秋林・高樹移転地に2,360ムーの生態良好な退耕還林地に託して、「林中村」を建設し、積極的に「村は林中に建てられ、人は林中に住む」という生態（自然）郷里を建設した。旧村はもとは25度以上の耕地が有り、全部が退耕還林（草）で、このようにすでに退耕還林の実施過程を早め、又農民増収の新たな明瞭点を創造した。移民区においては統一規画を実施し、農村資源をもって利用と果樹園建設、種草養畜とエネルギー建設とを結合させ、政策支持および銀行貸し付け補助力を増加させ、農業内部の仕組みを調整し、「果・畜・沼・窖・草」の五位一体の生態建設路を行き、逐次貧困地区の生態植生を回復し、貧困地区の持続する発展後に起こる力を増加させ、「綠色郷里」を創建した。

### 6. 労務輸出に力を入れ、貧困群衆の増収の道を開く。

貧困戸の労働力を訓練して、貧困村の労働力を積極的に組織し徐々に転移し、貧困農民の収入を増加する最も現実で、最も有効な道であり、又、脱貧致富の根本的大道である。われわれは市場需要に基づき、職中の訓練基地に立脚して、主要な飲食・保安・家政の仕事等の市場需要量の高い位置を捉え、技能訓練し、同時に積極的に雇用職場・大都市労務仲介組織と関係を保ち、雇用合意を契約し、注文書・予約・指向（方向）を決める等の訓練方式をとり、農村労働力の転移を早め、「行けば出るを得、留まれば住むを得る」をして、「一たびの訓練で、終身の益を受け、一人の出稼ぎで、一家が皆脱貧する」の目標に到達し、訓練を経た貧困戸の労働力が十分就業出来る保証をする。近年来、黄河沿岸郷鎮は併せて輸出労働力1.1万余人で、労務収入8,000万元以上を実現した。

## 四. プロジェクトにおける経験

### われわれの経験：

第一、集中移転と小都市建設を結合し、農民を豊かにする城郷一体化建設過程を促進した。

高柏・集儀移民新村は観光ルートおよび郷政府所在地を選び、先住者は数百人の小郷鎮が突然別々に1,400人と3,300人に増加して、各々総人口の五分の一と五分の二以上を占めるに至った。両所の移民新村はインフラが完全で、サービス機能が整然とし、集儀西坡新村内に2,640平方メートルの農貿市場1個所が新たに建設され、現代的富裕な雰囲気の農村小市街の基本が形成された。新市河・集儀・閣樓北庄移民新村は孟衣路沿線（今年アスファルトで舗装された）上に建設され、秋林鎮大子・高樹・壺口椿曲の三個の移民新村は鐘壺の路傍に建設され、二筋の道に新たに人口25,000余人を増加させた。

第二、集中移転と産業システムを結合させ、農民収入の安定的増長を有利にした。

集中移転して、土地資源を増加させ、主導産業規模を拡大し、農業生産条件の改変と交通条件の改善、農産品の質量と効益を高めた。集中居住もまた取り引き市場の形成をもたらし、継いで部分的に農民が投入して果実を販売するに至っており、旅行（観光）業務は主たる第三産業となり、貧困人口の収入を増加させた。高柏新村は土地が旅行幹線にある実際と結び合わせ、農家にサービス業に転ずるよう指導し、新たに営業用間口152間を建設し、新たに「農家楽」レストラン8軒を開き、すでに当地に経済発展をもたらし、産業開発を促進し、また農民の新規増収の道を開いたのである。

第三、集中移転とインフラ建設とを結びつけ、貧困戸に有利な資本を累積し、自信強化を有利にした。

移民新村の建設には貧困人口が使用していた元々の土のヤオトンから平屋住宅に移すことで、元来価値は千元にも至らない固定資産が現在は3万余元に増え、30倍近くに増加し、貧困戸脱貧の基礎を確定した。元来300-500元の少額貸出が5戸の連帯保証が求められていた。現在は信用が担保となり、5,000-10,000元が貸し出され、貧困戸の借金難の問題が解決し、回転資金があり、貧困戸が発展産業を確信・決心して、資本累積を有してきた。社会公益事業の発展を通して貧困人口の生産生活環境が改善され、貧困人口が都会人の生活となり、素質に非常に大きな変化が生じ、貧困人口の小康状態への道が早まっている。

第四、集中移住と文教・衛生・科学技術・社会保障事業発展を結びつけ、農村文化の建設推進を有利にした。

集中移住・整村推進に重要なことは貧困農家の素質と能力を向上させることである。資源蓄積を整理統合し・集中移住と集中投資をタイアップし、貧困地区の社会公益事業の歩調を早め、農村文化・教育・衛生・科学技術の全体レベルを引き上げた。扶貧プロジェクト実施の根本は大衆であり、農村の最低生活保障制度と有機的に結合させ、各種矛盾と不安定要素を有効的に取り除いた。

第五、集中移転と農村基層組織建設を結合し、党の執政能力建設を強めることを有利にした。

移転と共産党員の先進性教育活動展開保持を結合し、新村に党支部・村委員会活動室建設を配置し、農村基層組織の陣地を立ち上げた。新しく党組織を設置した後、人員も相当して集中し、党员教育管理訓練に便となり、同時にまた、農村基層幹部の資源を揃え、優れたものを選び、基層グループの戦闘力を高め、新村建設中に率先して模範作用をもたらした。移転を通して、党と政策が人民にあるという印象を形作ることを高め、基層組織の凝集力と求心力を高めた。

## 五、主要課題と意見

1. 扶貧補助標準が極めて低い。わが県は国家扶貧開発プロジェクトの重点県であるが、7個の郷鎮は黄河沿いにあり、2個の郷鎮は西部低木林区で、年間財政収入は僅か2,000万元、農民の一人当たり純収入は2,001元、貧困人口収入に至っては1,000元に満たず、現在建設されている移民移住住宅（4間）には、少なくとも4万元以上必要で、貧困戸は根本的に3万余元の自己負担部分を全く調達できず、また、移動・電気・道路等のインフラ施設建設配当資金は含まれていないので、

勢い、移住するのは金持ちで、貧乏人は移住できないという現象が起こり、甚だしきは、移住して貧困に逆戻りすると言うことになりかねない。

2. インフラ施設設備関連の資金が足りない。扶貧開発は一定の系統的総合工程であるが、わが省の現行扶貧政策では家屋建設に5+1（筆者注、一戸5,000元、家族一人当たり1,000元補助）の1つだけの補助が有る（筆者注、延安市では一戸1万元、家族一人当たり2,000元補助）のみで、移民新村建設中の土地入手・地面付帯物の補償・地面整地・路地整地・緑化・美化・給排水・農業用電気戸内配線・護岸・土留め・文化教育・医療衛生など必要なインフラ建設に対応する配当資金がなく、移住を多くしようとするれば、安穩に住まいを得ることが難しく、さらに富を得るとは語れなく、新農村建設と調和社会建設目標とは甚だしい距離がある。

3. 産業発展支持の強度不足。産業開発は貧困群衆が安定して脱貧する唯一の支柱であり、ここ数年を通して余力を残さない開発であり、わが県の発展した果物は合計32万ムーであり、その内、梨は23.4万ムーで、農民一人当り平均2.5ムー、規模の拡張を基本的に完成した。去年以来、新第一回の県委員会・政府は適時に「家畜沼草網」五位一体の家畜複合型生態循環農業を建設する構想を提出し、合わせて全力を傾注して推進するとし、但し、県は痩せ、民は貧しく、力は心に及ばず、各プロジェクトの投入は困難が多く手が回らず、希望した主導産業支持政策を選び登場させ、特別に青果業務体系建設、果実貯蔵加工、先導企業育成、果実袋がけ補助、青果農業技術訓練、養豚、メタンガス建設、果実園芸内種草、防電網架設などの方面に補助金給与して扶助し、主導産業を壮大に発展させ、着実な脱貧の確保を促している。

4. 扶貧プロジェクト・資金に対する傾斜政策を拡充し、強化する。

わが県は黄河沿岸に位置しており、10年に9早ありで、凍霜害・電害等自然災害が頻発し、脆弱・低水準のインフラ設備により、自然災害を制御する能力が極めて低く、省市は水利・交通・防電等インフラ建設のプロジェクトに対して強力な支持と傾斜政策を与え、農業経済発展の「ボトルネック」の制約難題を解消することを希望する。

5. 貧困農家に対する銀行貸付けの基準ハードルを引き下げる。

金融機関による扶貧に関する貸付業務は要求が多く、標準も高く、金額も少なく、貧困戸一般は全て旧来の負債があり、仮に貸付のノルマがあっても、融資が受けられず、資金を望んでもため息ばかりで、常に投資の始動資金が欠如し、天にもたれて飯を喰うの如くである（商業銀行での貸し付けは負債を返却していないと不可であり、担保、農民の貯蓄口座がないと貸し付けられない）。

6. 発達地域が後進地域とペアを組んで支援するような扶貧システムを新設することを提案する。わが県の財政収入は2,000万元であるが、年平均支出は2億元以上に達し、収支の矛盾が突出しており、省市は進んでさらに移転支援力を強化することを希望する。同時に、北部と南部の県がペアを組む扶貧システムを設け、友好都市を創建し、調和的発展（延安市北部が南部を支援すること）を推進することを希望する。

## （二）質疑応答（要旨）

問 移民新村の政策について、移民の範囲が県外の遠い地域にも移民させるケースがあるが宜川県ではどうか。

答 宜川県では郷を超えることはあるが県外はない。

問 労務輸出によって労働力が減少し、県の計画が縮小するというようなことはないか。

答 一定の影響はある。但し、労務輸出は脱貧の1つの手段である。現実的に外部に出て行く方が果実業収入より高く、人により5万元、10万元もある。今後、一家が出て行くと言うこともあり得ることである。

答 外部輸出は黄河沿岸では増加している。自然流出や集団的流出もあるが、生存条件の悪い方が輸出は多い。但し、外部に出た労働力で、一人で生活できる率は15-20%に留まっている。それ以外は基本的に自分の村に留まるようになり、季節労働者が多い。

問 外部とはどこか。

答 沿海部か山西省炭坑などが多い。

問 移民移住に必要な戸数は

答 07年は1,569戸である。

問 順番はどのように決めるのか。対象は。

答 「宜川県移民新村規画（2006-2010）」に基づき実施する。具体的には、先ず農民の申請に基づき、農民の大会、郷の審査、県の決定となる。対象は1つの村で30戸、収入が貧困戸であること。

問 山奥や極貧戸は。

答 黄河沿岸が原則である。移転は村全体が原則であるが、移転には資金が必要である。県としても資金を用意しなければならない。五保戸、老人戸が残らないよう努力している。

問 世界的にバイオエネルギー開発が始められ、日本でも穀物需要が増え、価格が上昇している。その中で、例えば養鶏業者はすでに安定した穀物供給を求めている。宜川県の場合もこうした世界の動きを考慮して良いのではないか。例えばリング生産にしても、果汁にする以外、家畜飼料に役立つような別の利用法も考えて良いのではないか。

答 宜川県の現状では先ず果実生産段階であり、更に各種の条件を検討しなければならない。

問 退耕還林政策が移民移転を促進していると思うが、現状はどうか。また沿黄地域の還林は国家的貢献となっていると思うが。

答 現実的には退耕還林補助は移民移転資金にはならない。黄河沿岸では生態保障のための補償もある。退耕還林を始めた原因の1つに黄河の断流があった。現在ではかなり生態の改善があり、土砂の黄河への流入が大幅に減っている。ただ、緑化したことにより、却って水が黄河に入らないという新たな問題も起こっている。長期に亘る問題である。

問 中国は農業地域から始まっている。経済学的に言えば、農業と工業の所得格差は世界中何処にでもあり、農業より工業の方が有利である。宜川県が所得を上げるには、沿海部のマネをして工業化しようとしても効果は上がらないであろう。工業化には地の利が必要であり、宜川県は必ずしも優れているとはいえない。よって、宜川県は農業を如何に活かすべきか考えるべきである。

農業を活かす場合、中国の食糧生産が世界中を怖れさせている。現在、中国の食品、歯磨きなどで有毒物質があると世界を騒がせている。その影響で日本の店先からも中国産品がかなり姿を消している。ある主婦によると、中国産食品を買わないという理由に体内への不安があるという。それはどのくらいの不安かと言えば、日本・青森産のニンニク1個分の値段は、ネットにはいった中国産の値段と相当し、量で10倍買える。この10倍の付加価値と同じ位の恐れがあるという事である。今、宜川県が信頼できる農産品を生産すれば、10倍の付加価値を得られる事になる。リングでも梨でも、食の安全、品質を高めれば、必ず付加価値が生じてくる。

このリングを日本にまで輸出しようとするには、あまりに遠く、今すぐどうこうは出来ない。従って、むしろ中国内大都市の住民に、ブランド化した品種を売ることが一番の早道である。沿海地区の若者は海外や日本からの高価なブランド品（例えば化粧品や高級リングなど）を平気で買う。産地名や安全性は今やブランドの要素であり、そのマネをすることは十分可能であり、宜川のリング——というブランド化も可能な時代である。無理に工場を誘致しても水を汚

し、公害を出すことは決して得策ではない。西安から宜川に向かう途中でリングを買った。味も良い。しかし、形が不揃いで、傷も多い。中国農業は間違いなく高級指向にあると思う。安全にしてブランド力有る農産品を出すことが宜川県の当面取るべき道ではないか。高級品は一朝一夕に出来るものではないが、宜川県がそういう政策をとれば必ず成功すると思う。

答 今、宜川県としては観光資源開発中であり、経済林を効果的に活かしていく。洛川リングは1ムー5,000元の収入があるという。宜川県も今後3年計画で拡大していく。また県の森林覆蓋率は56%であり、封山育林により伐採が禁じられているが、灌木林を含め、将来は合板加工が有力である。また石炭の埋蔵量が2.3億トン有り、今後の経済効果が期待されている。このように宜川県は経済力の大きい県であるが、現在はまだインフラが整っていない。

### 移民新村実地調査

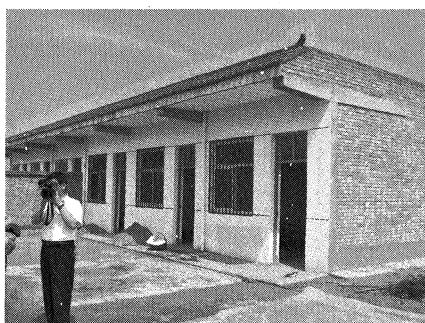
#### 1 宜川県高柏郷曹家庄村・史家庄村移民新村調査



(1)



(2)



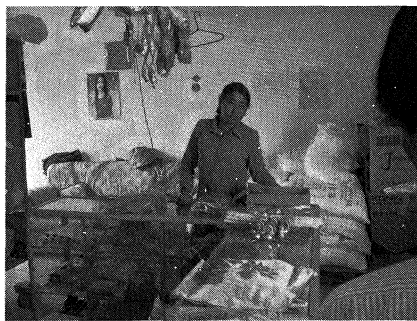
(3)



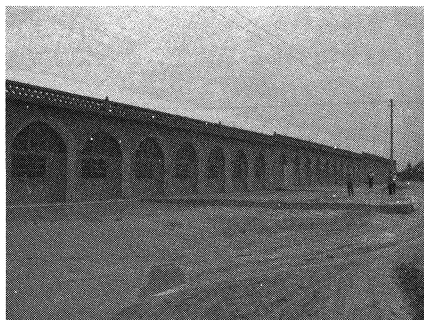
(4)



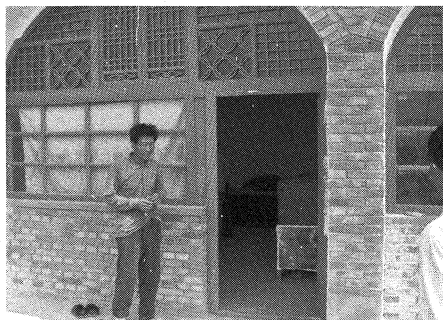
(5)



(6)



(7)



(8)

高柏郷は宜川県城から東へ壺口瀑布に突き当たった所で北上する。年間降雨量が極端に少ないにも関わらず、当日は朝からかなりの雨が降り、黄土の山道は泥濘どころではなかった。忽ち立ち往生するバスに前途がふさがれる。やがて完成する予定の宜川—延安道路が観光用ルート開発を兼ねて造成中であり、一日も早い完成が待たれるのである。

高柏郷には、すでに2003年8月、飯塚を除く阿部、横川、郝、針生4研究者が訪れ、移民新村のテストケースとも言うべき、農家楽を目指す移住者を訪問している。新築であるが、ヤオトン風平屋建てであったり、大通りに現在居住している2階建て商店街はまだ計画中だった。(詳しくは東洋大学アジア文化研究所年報2004年を参照されたい。)

本年度、高柏郷における最初の実地調査は曹家庄村から始まった。村には延安に通じる広いコンクリート道路が一条突き抜け、その両サイドには、すでに04年から入居している商店向き二階建て(写真5)のアパート街が立ち並ぶ。その続きは今まさに建物周囲の土盛り・舗装が行われている史家庄村の窑洞風造り平屋建ての長棟(写真7)が続く。

この広い観光用道路の南側には、希望により経営する農家楽用住宅がたちならび、更に一般農家用住宅がつらなり、周囲は舗装道路整備等の工事が行われている。

曹家庄村委員の説明によれば、この村の工事は2005年から計画を立て、同06年、延安市が正式に認可し、同年8月から着手したと言う。

全体で102世帯、451人。投資額は392万元である。(1世帯平均38,431.4元。) 市政府が1+2の方式で192万元補助し、残額207万元は各農家が自己負担した。現在、建物は完成し、07年インフラ整備として水道、道路、電力などの工事が他の予算から市政府が資金を出し進めている。このプロジェクトは9月末までに電力を通じて終了する。

これにより村の経済発展の条件も整えられるという。延安—壺口瀑布間の旅行専用道路沿いに並ぶ建物は民宿である農家楽用に作られている。今後期待される移民農家の収入源は、主としてリンゴ園と観光収入および養豚業である。また移民各戸の基本口糧田(2ムー)は確保されているという。

因みに「人民日報網2005年9月23日」には「高柏新村の幸福生活」と題して、この高柏郷を取り上げ、9月22日全国政治協商委員が陝西省を訪れた際、ここにも立ち寄り、233戸、1007人のこの村を視察したことを伝えている。なお、延安市の移転新村建設は183個で、移転村・組は248個、貧困人口は7,365戸、3.1万人であると伝えている。

ここでは史家庄村を含め4件のケースを視察し、住民の意見を聞いた。

(ケース1) 農家楽用住宅(写真1~4)。入り口を入ると丁度、食堂兼炊事場棟建設のため三和土(たたき)のコンクリート舗装を行っている最中であった。1軒の土地の広さは約300平方メー

トルくらいか。奥に3間の仕切られた部屋が有り、その続きは更に2間増築が可能な空間がある。その前面に農家楽を営業する場合は食堂棟を造るという。ほかに少々の菜園を作る余地があり、一方の奥に豚舎とトイレがある。燃料はメタンガス使用であり、この施設は欠かせない。電話・有線テレビは引き込み済である。この村の住民は0.5キロほど離れた同じ村の山間のヤオトンから移転した。もともと持っていた退耕還林地は保留し、また栽培していたリンゴ園は土地開発に徴用され、その代替地は別の所で確保（現在植えたばかりでまだ果実にはならない）されている。

なお、農家楽を目指さない一人の農民に意見を聞いたが、この村は元、3分の1が極貧層で、移転に当り不足する自己資金は、村工事に従事し、1日35元、一家に2人いれば70元はいることになり、借金に充てているという。またある一家は、4人家族の内3人（内2人は25～20歳）は打工となり、それぞれ子長県（延安市）、無錫、西安市で働いているという。村としての観光産業が果たしてどの様に発展するか、未知数であるが、まず、壺口瀑布見学前・後の旅行客が、確実にこの村に止まり、飲食や宿泊をどれだけ利用するか、モータープールなど確保しているか、またリンゴ生産がどの程度の規模になり、或いは果汁などの製品・生産化などにより、地元で自活していけるのか、退耕還林政策の継続は多少の猶予を与えるであろうが、ここ数年で正念場を迎えるであろう。

（ケース2） 街道から少し入った所に、門構えと、広くはないが中庭のある家で、老夫婦と長男が在宅であった。75歳と72歳の老夫婦一家は3世代同居で、長男とその夫人およびその子供2人で、長男の姉は15分ほど離れた所へ嫁いでいるという。長男夫婦の子供2人は中学・高校生で、何れも宜川市内の寮に入っているという。リンゴ園2ムーの年収は5,000元、退耕還林・草地は所有しているが、すでに補助期間を過ぎている（補助継続については未知）。現在は村の道路工事の打工をし、また工事中の飲み物である水を、トラクターで運ぶ仕事を有料で請負っている。

（ケース3） 総合（雑貨）商店（写真5～6）。すでに整備の終わった商店街風街並みで、開いている店は僅か数軒である。その1軒、食料品から雑貨まで置く、今風に言えば小スーパーであるが、間口3間ほどの商店に立ち寄り現状を尋ねた。

この商店の家族構成は、父親、夫45歳と40歳台の主婦および子供2人の5人であり、主婦が一人で店を守り、他は打工として勤務に出ている。夫は三輪車を持ち、県域で仕事をしており、月2,000元ほどの収入を上げている。21歳の長男と19歳の二男は家を離れて出稼ぎに出ている。

04年移転し、間もなく開店したが、店の売り上げは、客が少なく、日に30元ほどである。商品の殆どは1ヶ月に1度宜川から送ってくる。客が少ないのは、すでに移転してきた住民殆どが出稼ぎに出掛け、空き家になっている家が多いからであるという。確かに殆どの家がシャッターを下ろしている。

打工と店のほか、退耕還林地を有し、6ムー程で刺槐（さしぐみ）を植えており、時々見回りに行く。リンゴ園は11ムーであるが果実はまだである。畑で収穫する豆などの雑穀は小麦粉に代え、1年間分を保存している。

移民前に比べ生活は楽になり、作業も楽になったと主婦は明るく言った。

（ケース4） 農家楽（写真7～8）。上記商店街に続くが、史家庄村に属し、新築ヤオトン風の建物は、農家楽用（希望者）に建てられたものである。前庭を広めにとって、駐車用、テラス用に利用できるようになっている。この前庭を含め周囲は未だ整備中で、単に土盛りをしたばかりの状態である。

各戸は続き部屋を各々5間（房）所有し、1つは2間続きである。生活用以外を農家楽＝民宿に当てる。上記の商店街にしても、またこの農家楽街も殆ど人を見ない。日本の俗にいうシャッター街であるが、ドアの閉まっている、或いはまだ入居していないように見える家は、殆ど労務輸出で他出しているという。たまたまドアを開けた青年にあい、話を聞くことが出来た。



新居は、一棟15間を同じ家族の3世帯で住んでいる。本人は家族4人で夫婦に2人の小さな子供がいる。隣5間は長男が両親と住み、更にその隣5間は3男夫婦だという。1キロメートルほど離れた所からの移転で、退耕還林でリンゴ、杏などを作っていたが、移転用土地のため8ムーが徴収、伐採された。基本口糧田はなく、16ムーのリンゴ園はまだ果実の収穫はない。

移転に当っては6万円の費用を要し、政府の援助1+2補助で2万円と自己資金4万円を用意した。内1万円は借金で、市の統一計画によるインフラ建設に打工として臨時的に働き、返済している。その仕事も今は無くなり、現在仕事を探しているという。農家楽を開くようであるが、これからどの様に展開するのか、大変気がかりな状況である。

高柏郷新村調査の最後は、03年訪問時立ち寄った農家楽のレストランを再訪し、無事な発展を確かめる事であった。新村の入り口近くに建てられた高柏郷中心小学は立派な3階建てコンクリート造り2棟から成り立っていた。レストランは、当時はヤオトン2房であったが、現在は5~6房にも増設され、客の出入りもあり、駐車も便で、まざまずの様であった。

### 洞川市宜君県調査（9月4日）

宜君県には9月3日夕刻到着し、県政府幹部の案内で宿舎に案内されると共に、近くの生態公園「亀山生態園」に案内された。宜君県は銅川市にあるが、県城の人口は僅か1万、街中は賑やかであるが、大都市の雰囲気は見られない。三輪タクシーが多く、高級車も混じる。海拔1,200メートル。年間平均気温8℃、夏も冷涼であり、冬は-20°積雪40センチメートルにもなる。最近、江西の資本家が1億6千万元を出資し、西側山麓を買い取り、避暑地として大規模な開発を始めた。本日の宿泊所鑫忻酒店もその一つであるが、開店したばかりと言うのに、正面の瀟洒な見せかけに比べ、基本的なインフラが整っていない、どの部屋も中国特有の地方ホテルを脱していない。それに加え、これはホテルのせいではないが、当地の水事情と電力不足でやむを得ないが、シャワーは10時から11時半に限られ、洗面の水の出も極端に悪い。夜中に階上のカラオケルームからの騒音が鳴り響いていたのには驚いた。

生態公園は県のこうした開発の一環で、8月25日に開園したばかりである。近くに黄帝陵があり、観光地として有名であるが、その黄帝の妃が累祖であり、庶民文化（農事、蚕糸、家事）の創始者として崇められている伝統を石のレリーフにして参観者への教育物語に設（しつら）えている。小さな公園にしては本格的なガイドを付けており、黄帝陵に対抗する気構えありありで興味深い。

### （一）宜君県の移民開発工作状況についての座談会



早朝より急な雨があり、予定した調査地は山中にあり、道路事情ではとても入村できないという情報がよせられた。やむを得ず、早朝にもかかわらず、県幹部を招集して貰い、ホテル会議室にお

いて、8時30分から9時30分まで、座談会を開催し、雨上がりを待って別の村の調査にはいることとした。

宜君県側出席者（以下本記録中人名は敬称略）

県委副書記	鄭 振峰
県委弁公室副主任	張 鋒
扶貧弁主任	楊 小平
新農村弁公室主任	和 承泉
農業局副局長	王 小強
發展計画局副局長	張 紅鎖
扶貧弁副主任	郭 延紅

### (1) 宜君県移民移転開発の工作状況紹介

1 挨拶と紹介 宜君県委副書記から、調査団の来訪を歓迎し、朝方の降雨により調査地を変更、先に座談会を開催する旨挨拶があり、ここ数年来の移民扶貧異地開発プロジェクトを実施することにより、県の貧困問題に根本的な変化を生じさせ、生活に大きな変化を見せたのである、とし、各所管から県の現状を報告させると各担当者を紹介した。

### 2 宜君県の現状

#### 1 基本状況（県政府扶貧弁公室）

宜君県は5鎮5郷、178個の行政村を管轄し、641個の村民小組、1,229個の自然村、9.3万人、農業人口8.2万人からなり、貧困人口4.8万人、総土地面積1,531平方キロメートル、一人平均耕地は7.6ムーであり、2000年に省政府によって国定貧困県に指定された。

1998年移民移転開発事業開始以来、建設家屋は5,881間、1,602戸、7,237人の貧困人口の移転を実施して来た。移転村組の主要分布は城関・大安・雲夢・棋盤・哭泉・彭鎮・五鎮・西村・堯生・雷塬等10個の郷鎮に分布されている。数年来、各クラス党政府の正しい指導のもと、全県貧困戸の一人平均純収入は770元、一人平均の食糧は490kg、一人当たり平均基本農田面積は1.63ムー、行政村電気通電率100%に達し、移民移転開発と社会的援助を通して、貧困戸に1個以上の安定的収入をもたらす脱貧困プロジェクトがあり、貧困型変じて温飽型に変わりつつあり、暫時脱貧致富の目標に向かって邁進している。

#### 2007年移民移転任務完成状況

2007年わが県の哭泉・棋盤・雷塬・雲夢等4個の郷鎮9個の村組において、組織・計画・一定規模を有する226戸970人の貧困人口（その内地方病の移転者76戸304人）を移転させ、完全に上級下達の年度移民移転任務を完成した。投入資金合計760万元、その内財政扶貧資金210万元、群衆の自己資金が550万元、建物609間、建築面積13,000平方メートル（1戸当たり平均約58平方メートル、一人当たり平均13.4平方メートル）であり、主体工程の任務の95%を完成し、計画投資532万元を完成、総投資の約70%を占め、10月終わりまでには予定する226の移転戸全部の上塗り塗装が終了し、年末までの新居への引っ越しが可能である。

#### 2 これまでの生態移民の状況（發展計画局）

2004年から実施して2年間を経過した。04年には7個の村、雲夢郷南斗村、彭鎮秋溝村、城関鎮、哭泉郷 雷塬郷 雲夢郷西良村、太安東豊村の全部で258戸、1,163人。新築家屋23,200平方メートル（1戸平均約90平方メートル、一人当たり平均20平方メートル）。新修の村の主な道路3,670メートル。排水溝7,340メートル。民用电線5,750メートル。人と家畜用飲料水プロジェクト3個所。村

の小学校新設3箇所。砂利道3.3キロメートル。以上2004年プロジェクトは順調に完了し、すでに各種の審査も終了している。

05年のプロジェクトは、14箇所、7箇の村に233戸。新築家屋面積20,224平方メートル（1戸当たり平均87平方メートル）。新修村道3.2キロメートル。排水溝6.4キロメートル。家屋建設用整地面積23,600平方メートル。人と家畜用飲料水プロジェクト7箇所。砂利道3本、6キロメートル。小学校3箇所。新修基本農田600ムー。これらの計画は本年10月末に審査を終了する。

### 3 新農村建設について（新農村弁公室）

06年から始め、5つの確度から実行している。

#### 1. 産業発展により農民の増収を図る。

06年から今年（07）上半期までに、果樹、菌類、生薬（漢方）業を中心に農民の安定した収入源を確保した。新しくリンゴを植えた面積は10,319ムー。この結果リンゴ総面積は15.2万ムーに達した。リンゴの総収量は7千3万トンである。クルミ（核桃）を中心とした経済林は25.9万ムーである。食用肉牛は5.6万頭、キノコ類327.9万袋（包）、漢方生薬材3,760ムーである。

産業開発により、2006年農民の平均収入は1,883元。新農村建設の中の20のモデル県一人当たり平均収入は2,300元に達した。

#### 2. インフラ建設により、農民の様相を変える。

セメント道路290.25キロメートル。県と郷を繋ぐ道路24.5キロメートル。一般の砂利道120キロメートル。20のモデル村は全て新しい道路が出来上がっている。飲料水プロジェクトは7箇所。これにより13,260人の飲水問題が解決した。電気利用は100%。メタンガス施設2,190個。メタンガス使用4,500戸。

#### 3. 教育訓練を通して農民の質を高める。

06年、農民に対する各種の訓練を230回実施した。参加人員は18,400人。

平均1戸当たり1～2名の人たちが新しい具体的な技術を習得した。

#### 4. 資金の投下を支援して農民を豊かにする。

06年から毎年100万元の新農村建設資金として投入。これにより農民の「美しい農村」建設に積極的に寄与している。

#### 5. 各クラスにおける組織の責任制をはっきりさせるためチェック・審査を行う。

具体的には20名の指導者からなる指導グループを組織。市・郷を含む各県の組織は20のモデル村に人材派遣している。そのモデル村における指標を検査・チェックしている。

### 3 宜君県概況総括（県委副書記 鄭振峰）

宜君県は陝西省扶貧弁発〔2002〕31号《移民扶貧異地の開発工作強化に関する通知》に基づき、辺遠の山区に居住し、交通不便、情報閉塞、生産・生活条件に差違の出ている貧困人口に対し移住移転を実施し、当該地に導く事は、根本的にわが県の貧困人口の温飽問題を解決し、脱貧致富を実現する有効な道であり、数年来の移民扶貧移転地開発プロジェクト実施により、県の扶貧問題は大きな変化を見せてきたのである。

宜君県は関中盆地から陝北地方に向かう黄土高原の境にあり、統計108° 55′ 10″ — 109° 29′ 24″、北緯35° 07′ 04″ — 35° 35′ 02″ に位置する。東は洛川県と川を隔てて相望み、東南は雁門山をもって境とし、白水県と隣り合わせ、西南部は洞川市印台区と接続していて、西北部は黄陵県と接し、東西は52キロメートル、南北は51.5キロメートル、総土地面積は1,531平方キロメートル。県城は宜君梁中の亀山の下、西安市より127キロメートルの所にある。

宜君の地形は山梁を主とし、山・梁・峁・塬・川・溝谷が併存している。廟山は県内群山の最高

で、海拔1,734メートル、吉子堡は最低で622,6メートル、全県の平均海拔は1,395メートル、東北が低く、西南が高く、半陰半陽の地形の特色をなしている。

宜君は温帯大陸性季節風気候に属し、冬寒く夏涼しく、冬春乾燥し、夏秋多雨、四季ははっきりし、盛夏にはよい避暑地となる。年間平均日照時数は2,412.4時間、降水量709.3ミリメートル、無霜期間200日ほどである。県内の地勢は東低西高で、等温線は経度分布を示し、東部は西部に比べ平均気温2.8℃高く、1月が最低で-4.3℃、7月最も暑く20.8℃である。

宜君は土地が広く、人が少なく、人口密度は1平方キロメートル当り61人である。一人平均土地は25ムーで、その内耕地は7ムーである。土地の構成中、農耕地が28%、林地が34%を占め、草地26%、水域が2%、建設用地が10%を占める。

宜君は地下資源が比較的豊富で、石炭・鉄鋼・石油・天然ガス・油頁岩（オイルシェール）・石灰石等6種、その内石炭貯蔵量は最高で年産100万トンである。

## (二) 質疑応答

問 県の退耕還林面積はどのくらいの割合か。

答 約5分の1である。

問 産業にはどの様に貢献しているか。

答 主にクルミと草である。クルミは全県30万ムー、一人平均3ムーである。07年の青果（青い皮のまま）1キログラム12元である。県としては長い間森林を乱伐するという様なことが無く、緑地を保ってきたので、大規模に還林するという必要がない。森林覆蓋率は46%であり、当県の緑化率は96%で、全国の緑化模範県である。

問 陝北では新村移転は退耕還林を利用した場合が多いが、宜君県ではどうか。

答 宜君県は土地広く人口が少ない。農村の居住条件は分散しており、1つの村に自然村8～9箇所あるが、1つの自然村は2～3戸に過ぎない。交通不便、生活不便な分散戸を1箇所集中させることに移民移転新村の意義がある。移民の種類は扶貧・生態移民である。

問 小学校新修という事であるが、それは学校数が増加していると言うことか、それとも建て替えたと言うことか。また教員は増えているのか。

答 義務教育改革が始まってから、新しい学校には色々な基準があり、施設や教員の数が決められている。県が建てた学校は全部新しい学校で、1つは郷鎮に中心小学が建てられ、4～6年生が教育を受けている。1～3年は各村で学ぶが、最近の人口減少で、学校数も減っている。

教員については新任の教員は師範大学を卒業しているが、古くから教育に携わってきて資格のない者は、通信教育かもろもろの研修を受け資格を修得するようになっている。教員採用は毎年1～20名、公募制度によっている。（ここ数年の改革で、資格は小学校教員は短大卒以上、中学校は学部卒以上となっている）

問 産業発展のために、教育と技術訓練をどの様に結びつけているか。

答 1農家当り1～2名を技術訓練に結びつけている。18,000人が訓練を受け、2,500人に緑色証書（中等農業専門学校卒の資格に相当）を出している。

問 産業開発のため、菌類（キノコ）や家畜など、栽培・飼育業の重視が見られるが、どの様に物産として取り扱っているか。例えばリンゴの消費市場はどこか。

答 主に県外で、遠くは東南アジアなどに輸出している。（因みにリンゴの種類は富士・紅星・秦冠・喬納金・嘎拉など11種ある）

問 宜君県の移民移転プロジェクトの具体的な方針・方法は。

答 扶貧移民移転の基本は貧困農家が原則である。しかし、これには農民自身の申請が第1である。

それによって県は移転資金を融資して、ともかくも移転させる。自己申請せず留まっている貧困農家もある。移転先での建物については企画段階では同じような作りを示しているが、それぞれの家の作りかたなどに基準はない。資金の使いようで、色々な建て方が可能で、自己の望むもので決めている。庭の大小も異なる。

問 扶貧移民の実施に当っては、最近の新農村運動を重視しているのではないか。

答 扶貧第一であり、生態移民を優先している。

### (三) 移民新村実地調査

#### 1 宜君県丁家溝村訪問



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)

県幹部との座談会の後直ちに移動して、亀山山麓を更に中腹に上ると、丁家溝村の10数軒の移民新村が現れた。途中の道路は未だ舗装されず、可成りの傾斜もあり、朝方からの雨がまだふりやまず、悪路になっていた。しかし、雨中に現れた新村は、瓦屋根・レンガ作りで、しっかりとした主屋、附属建屋を備えた建物群であり、庭付き瀟洒な概観を備え、とても貧困農家の移転とは思えぬ体裁であった。一定の規画はあるが、建て方は自由という、座談会の席上聞いた通りである（写真1～3）。

この移民新村は、写真1の前方、谷を越え、現在より麓に近い山の斜面からの移転である。理由は山崩れの恐れがあり、集団で移転したとのことである。相当の自己資金が必要であったと思われ、それが準備できたと言うことであろうか。われわれは数軒のお宅を訪問し、家人から移転の様子などを聞き取りしたが、村全体がひっそりとしていたのは、多くの人が出稼ぎに行っているからであろう。

入村して直ちに農家訪問、最後に村の小学校（写真4～5）に立ち寄った後、村長から説明を聞いた。

（ケース1） 4人家族。夫婦・子供2人（男20歳中卒、延安へ出稼ぎ。女18歳、北京へ出稼ぎ中）2年前に移転、1戸建て5間（台所含む）、120平方メートル。以前住んでいた建物は60年代の建物、土の屋根で雨漏りがひどく、山崩れで潰れる危険があった。移転する費用は40,000元（5間×8,000元）であり、政府の補助1万元、自己調達3万元、子供の学費負担などでローン1万元の借金がある。退耕還林地4～5ムー。（主婦のため正確に把握していない。）残り土地は15ムーあり、クルミ畑4ムー、玉米（トウモロコシ）畑11ムー。ほかに基本農田1.6ムーある。家畜は養殖用牛2頭（若い時は役牛、後肉用に養う）、ほかに鶏。台所にはトウモロコシ・シジャガイモ、その他野菜類があり、戸棚に自家製のトマトジュースを保存、カマドの燃料は主として玉米柄、メタンガス併用。寝室には床下に暖房用設備が有る。移住前に比べ、教育、交通、飲料水などの生活面で便利、向上した。

（ケース2） 3人家族。渭南市からの移民。夫婦、子供1人（男、技術学校で塗装・装飾を勉強中）。農業と出稼ぎによる収入。家屋は5間の主棟と台所。移民以前は種植（トウモロコシなど）中心、移転後は養植・養畜中心。土地17ムー。内訳 退耕還林地4～5ムーはクルミ養殖、クルミ3～4ムー、桃7ムー 基本口糧田2ムー。台所には、水道、プロパンガス、メタンガス共用。可成り豊かに変化した様子が見える。

（小学校）（写真4～5） 2階建てであるが、教室には2人の生徒（その内1人は学童前）しか居らず、雨で欠席の学童がいたのか聞き漏らしたが、2人の先生が丁寧にもアルファベットを教えていた。出稼ぎで出ている家族もあると思われた。

## 2 丁家溝村現状（村長■文宏書記）（写真6）

この村は4つの自然村から成り立っており、面積18.2平方キロメートル。64戸261名からなる。2002年から移民が始まり、始めに9戸38名であった。現在は37戸163人が移民した。新築は182間。敷地面積は1,984平方メートル（1人平均12.2平方メートル＝省の扶貧基準1人10平方メートルを超えている）。

移民新村投入予算43万元。2005年の投入資金25万元で、道路造成1キロメートル、排水溝1,004メートル、庭を囲む屏230メートル。43世帯がメタンガス利用。トイレ、台所、豚小屋等の修築を行った。現在、水道利用23世帯。小学校270平方メートル、188,000元。セメント道路6キロメートル、127万元。2千冊の科学技術関係図書購入。電熱改修36万元。

テレビ普及率85%、電話普及率90%である。産業はクルミ980ムー、村全体の牛86頭、羊260頭、

鶏1,200羽である。(宜君県の開発商品として核桃乳〈クルミジュース〉の売り出しを図っており、この村の特産品の1つに考えられている。)

### 3 質疑応答

問 この村の移民の進展は

答 3年に分け移民した。現在出稼ぎ60~70名、ほかに学生(小学4年以上)7~80名が村を出ている。

問 人々の平均収入は

答 1人平均年収は1,200円である。いわゆる村の貧困農家は存在しなくなった。

問 出稼ぎなどで外出している村民もいるが、農村労働力は足りているのか。

答 若い者は兎も角、老年・壮年は村近くで仕事をしており、農繁期には戻ってくるので足りている。

問 移民移転によって生活は好転したか。

答 かつては80%が貧困であったが、今は水道・道路も通り、水が使える養殖業が出来、農業産品も売れるようになった。電気・電話も通じ、情報も入るようになり、移民によって豊かになったという典型である。

問 村の高齢化の度合いは

答 60歳以上4~50人、最高は84歳である。確かに高齢化は進んでいる。

問 衛生院の状態は

答 村の人で裸足の医者出身の医者が常駐している。

問 今後の村の方針は

答 村は非常に豊かになったが全国平均に比べてまだ低収入である。村は広いので、今後は養殖業(酪農)に力を入れ、トウモロコシの芯などを利用した飼料など考えられる。但し、現在は移住してきたばかりであるので、資金の余裕がなく、新しい計画に取りかかれないでいる。

問 技術面での訓練導入とは

答 訓練班を設け、村の人を養成している。1年間に3~4回。講師は外部から招聘し、養殖業などの話をして貰っている。

問 専門学校などで技術を学んだ者は村に帰ってくるのか。

答 農業や酪農を学んだ者は帰ってくるが、料理、デザインや装飾を学んだ者はなかなか帰ってこない。

問 村から出て行ってしまうのではなく、帰ってくるような対策はないのだろうか。

答 もち論戻ってきて貰いたい。その為には活躍する場を作らなければならないが、今の所方策は立っていない。

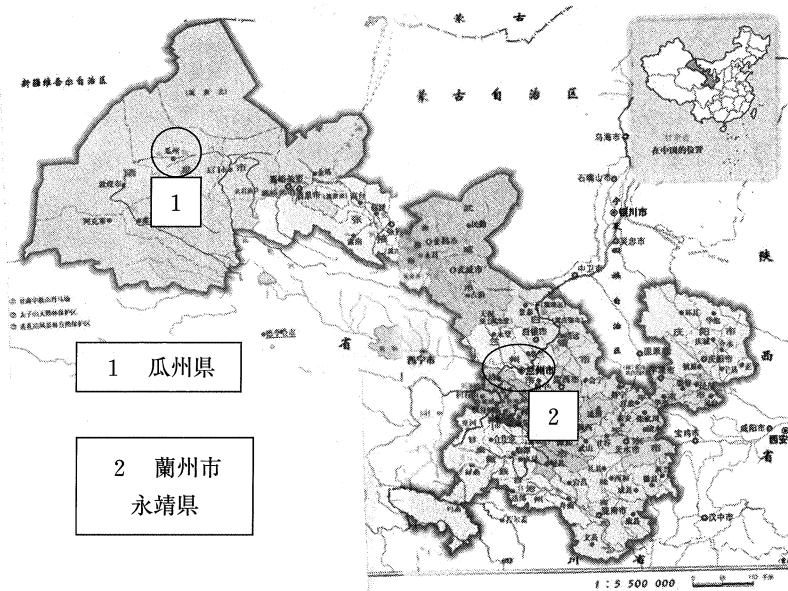
問 村は城関鎮の街中まで車でそれほどかからない。街中で働けるようにならないだろうか。そうなれば村の小学校の生徒も多くなり、賑やかになるのではないか。

答 今のところは農繁期に帰って来るのが精一杯で、今後に期待している。

以上

甘肅省酒泉市瓜州県・蘭州市生態等調査（9月7日～10日）

平成一九年度「中国内陸部における貧困対策に関する研究」



今年度、移民新村調査を甘肅省に設定したのは、遠距離移民の実例を探ることと、これまで陝北地方に焦点を絞っていた調査を、さらに気候条件の悪い砂漠地帯を含んで、人々は何の様にそれを克服しようとしているか、またどの様な理由で移民移転しようとしたのか、各種類の移民に扶貧がどの様に絡まるか、また、新農村運動により移民した後にどの様な村造りをしようとするのか、これらもろもろの事情をつぶさに調査したいと考えたからである。幸い、今年度は甘肅省社会科学院社会学研究所包曉霞所長による調査に関する諸官庁の許可・承諾、調査地立ち入りの手配など全面的な支援を得て、実現を見たものである。われわれが利用した航空会社の都合で、一方的にダイヤが変更され、瓜州県調査では、一部にスケジュール変更を迫られ、思わぬ超ハードな行程となったが、調査予定地は全て訪問することが出来た。これも事前に周到な準備をされた包所長の手配によるものであった。

今回の調査で、感激的な出逢いは、臨河回族自治州・永靖県からはるばる千キロ余も超え、瓜州県に扶貧移民した王尕三老人である。当時、苛酷な生活を強いられていた王一家が、どの様にして移民問題に取り組んだか、1995年1月、NHKが取材して日本全国に放映されたのであるが、われわれの訪問によって一家が健在であることが判明した。このことは、包曉霞氏が別項記事を寄せているので参照されたい。

酒泉市瓜州県調査（9月7日～8日）

朝靄が籠もる中、8時に敦煌を出発、国道313号線を一直線に瓜州県を目指す。清朝康熙帝末年以来の県名安西が、2006年2月、漢代以来唐代にも地名とされた現在の瓜州県に変更された。文字通り甘くおいしい蜜瓜（黄河瓜）が食べられる。瓜州県は面積24万平方キロメートル。広大な面積の割に人口は僅かに9万人である。敦煌郊外の沿道は暫くグリーンベルトが続き、野菜畑や綿畑が見られたが、すぐに広大なゴビが続く。沿道には駱駝草やタマリスクがはえる。有名な河西回廊

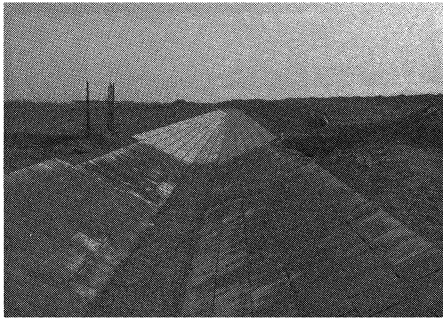
三三七



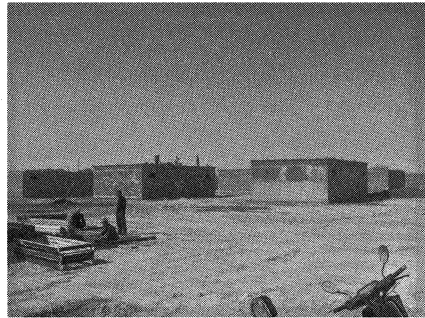
上であって、遠くに祁連山脈を望む。年間降雨量は土地によるが、最も苛酷な地は40～60ミリメートル。気温は年平均8.8°、1日の高低差が大きく、日によって、-9°から27°に、また夏は26°から38°までになるという。大型の電力用風車が風の通り道に数列に並んで回っているが、一望砂漠の中では飛ぶ鳥以外の障害はなさそうである。

走行して2時間ほどで瓜州県内に入る。とは言えまだ県城は遠く、無人の地が多く、時々道路沿いに墓石がならぶ。国道から折れて暫くして、10時過ぎに瓜州白旗堡移民地に達し、張才善主任に迎えられる。

### 1 九旬峡プロジェクト白旗堡移民新村（9月7日）



(1)



(2)

コンクリート造り、浅い掘り割りの水路（写真1）がまっすぐ続き、やがてその傍らに大きな看板と共に、瓜州白旗堡移民地が現れた。今、盛んに独立家屋群（写真2）の工事が進められている。ここは、甘肅省東南部を黄河に流れ込む洮河流域の農業総合開発による、水利事業およびダム建設に伴う、大規模な開発移民である。甘南自治州および定西市の卓尼、臨潭、岷県の3県7郷23個の行政村から、2,936戸、13,216人（調整減員2,113戸10,400人）を移転させる。移転費用は政府が支出するもので、第1期は1,424戸、6,420人で、10月1日から入居させるための最終工事に入っているところである。

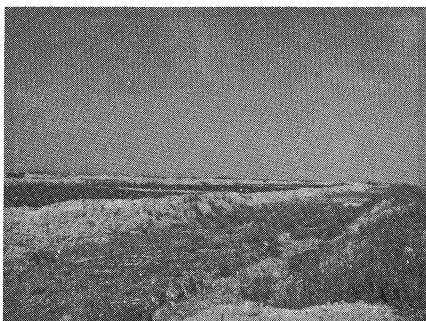
所在地は国道312号から25キロメートル入った移民専用道路を疏勒河・南干渠に沿った地域で、東西9キロメートル、南北15キロメートル、開墾土地4.66万ムー（135平方キロメートル）、専用用水路（輸水渠）40.182キロメートル、支水路（支渠）27.41キロメートル、引き込み水路（斗渠）10.074キロメートル、灌漑用引き込み水路（農渠）398キロメートル、道路16.593キロメートル、架設電線35KV20.8キロメートル、10KV23.9キロメートル、水供給用貯水塔6個、機械揚水井戸6、総投資額1億6千万円である。洮河の発電は11月からの予定であるため、第1期は10月1日から移転が開始される。1人耕地は3ムーの供給はすでに決定し、主に綿花畑であるが、今は住まいの完成が急がれている。

われわれが訪問した数日前9月3日現在7つのプロジェクトが建設されており、投資額1億3,332万元、道路16.5キロメートル、双塔ダムからの専用幹線水路毎秒2.7立方メートルで36キロメートル、支線24キロメートル、灌漑用水路48キロメートルで、今年3月15日工事開始し、9月20日開通式を行った。アルカリ性土壌を改良する工事3.15万ムー、用水路から移住者農業用地引き込み水路173キロメートルは6月22日工事開始し、9月下旬完成予定で460戸に利用される。その脇の道路72.5キロメートル。移民住宅用土地整地3,756.6ムー。大家族用家屋は160平方メートル、小家族（2～1人）用は47.5平方メートル、1平方メートル当り598元、井戸は深さ130メートル6本。7

プロジェクトの計画投資額は2,916.41万元であるが、ほかに給水工事、電線配線工事、村内・村と村への道路工事、テレビ・電話工事、村小学校建設工事、8月25日完成案内板工事などは続々完成（9月末完成予定）している。ただ、周辺防風林工事（7千ムー）、土地整地、灌漑水路建設物は資金問題が解決せず、暫く着工出来ない。村委員会、村病院、郷政府の建物は今年は着工しない。

以上のような背景のもと、ゴビの砂嵐が時々襲う中で、家屋建築は急ピッチで進められていた。

## 2 西湖郷安康村向陽移民新村（9月7日）



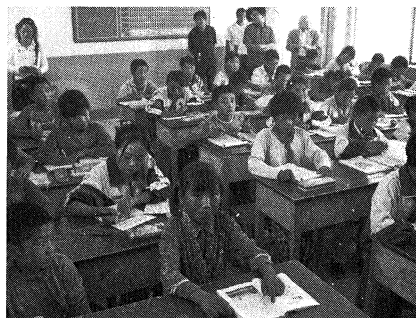
(3)



(4)



(5)



(6)



(7)



(8)

今回の移民新村調査は、疏勒河沿いの様々な新村を調査することにある。広大なゴビの中で、祁連山から流れる疏勒河は、古来からオアシスとなり、街を作り、道行く旅人を渡してきた。時に廃屋が砂に埋もれており、川の流れによって街が盛衰する様を、今でものぞき見ることが出来る。しかも現代は、ダムを造り、コンクリートの河渠を通し、大規模な人工の集落が出来る。

九旬峡プロジェクト訪問を終わり、一旦宿舎である瓜州賓館に入り、高建平県長助理を表敬、休憩の後、車で40分ほど移動し、西湖郷安康村にはいる。村をひと当たり観察した後、委員会を訪ね、座談会を開催し、村幹部から現状の説明を受け、質疑応答を行った。その後で畑地、用水路等の調査に出掛けた。

#### (一) 安康村向陽移民地開発の現状についての座談会



瓜州県・安康村出席者

県長助理	高建平
県総治弁主任	師軍
県移民局長	何占軍
西湖郷郷長	呉龍 ほか

##### (1) 安康村向陽移民地現状

呉郷長および幹部から向陽移民地の実情について次のような紹介があった。

この地の移民は全て甘肅省東部石積山系からの全村移民移転者である。1992年以後の疏勒河プロジェクトによる、主に1996～2000年にかけて実施された。その為、1992年以後の農家の建物や設備はすでに古くなっている。全戸数は342戸、人口は1,650人。6小組に分けられている。全村開墾荒地7,684ムーで耕地6,100ムーである。土壌はアルカリ性で、痩せており（写真3）、生活は豊かではない。

小学校は1個所、病院が1個所。幹部は4人（写真上）である。

##### (2) 質疑応答

問 灌漑用水はどこからか

答 双塔水庫からと1部は井戸からである。

問 村民の年平均収入は幾らか。

答 年平均一人当たり500元である。

問 作物は主に何か。

答 主に綿花で、1人当り3.5ムーである。

問 綿花の背が低いが。

答 本来は高くのびるが、低くすると花が多くつくので、薬品で低くしている。

問 どの様な移住であったのか。

答 もと、石積山区からバラバラに移り住み、新しい村を作った。この土地の人は協力してお互いにより関係にある。事故があったときは互いに助け合い、病気になればみんなで自動的にお金を出し合ってカヴァーしている。

この村の北は疏勒河で人は住んでいない。東、南、西の全部の住民は元もとの安西に住んでいた人々で、普段の交際は無いが、移転時灌漑水のことでも交渉はあった。東の方安西から嫁いできた人はいる。

1996年、1650人、その後2年間は、人口は安定しなかった。1年間生活して他の土地に移住した者もあり、戸籍が一定しなかった。従ってどのくらいの人口が移住したのか正確には不明である。現在は2000年の人口調査数によっているが、新たに調査中である。

問 ここに移住する前のこの土地は原野であったのか。

答 全くのゴビの原野であり、移転後疏勒河プロジェクトで開墾、綿畑とした。

問 民族構成は

答 漢族95% 藏族・土族5%である。

問 移民前と移転後の生活は。

答 移転以前は、雨が降らなければ作物の収入はないという土地柄で、移転後は灌漑農法で生活は改善された。但し、このあたりの灌漑用水路は古くなり、漏水がひどくなっている。その為灌漑用コストが高くなっており、1ムー当たり120～130元になっている。特に、一番困っているのは、灌漑問題である。綿花は植えてから少なくとも4回の注水が必要である。用水路の水分配分の構築物は古くなっており、灌漑用水維持の電気設備も古くなり、交換が必要であるが資金がない。以前から住んでいる周囲の農家は4回の灌漑を行っているが、ここでは3回も困難である。

この村周囲はまだインフラが完備していない。道路も舗装されていないので、タクシーを呼ぶときは、アスファルトのある所まで出てくるようにと言われ不便である。村と村間、村から町へも砂利道である。

文化面では、この村に1996年小学校を作った。2002年全面的に改修した(写真4～5)。中学校は遠方である。

生活面で、以前は小麦やジャガイモを作っていて機械を使うことはなかったが、移転以後、綿花生産に機械を使うようになった。ただし、親戚同士で持ち合うなど、全所帯が持っているわけではない。また、井戸水を使うこともなかったが、ここでは自然に使うようになった。しかし、原住の農家の方が生産が上がっている。

問 灌漑用水は現住者が4回出来、この移民者が3回というのは？

答 川の水はコストが高い。井戸水を使うしかない。しかも用水路は(水路の破損があり)漏水などで水量が足りない。水の価格は、0.9角である。周りの農家は水路を修理して使っており、それに比べ割高であるのは、移民時は新しく作ったが、この疏勒河プロジェクトがすでに終了しているため、政府からの資金が出ないので修理が出来ず、漏水がひどいのである。

問 住民同士で組合を作り水利を管理できないのか。

答 各村毎に水路管理はある。専用用水路(輸水渠)支水路(支渠)、引き込み水路(斗渠)、灌漑用引き込み水路(農渠)、各使用農家(毛)、それぞれに管理者が上から下まで異なっている。

問 移民後10年たつが、村全体はどう考えているか。

答 全体は満足している。その例に元の居住地から女性が来て結婚している。96年から2年間戸籍が出来なかったときより次第に安定してきている。ただし、生活用水は水質が悪く、120メートル掘らなければ出ず、それも苦い水である。なれない人はおなかを壊す。

問 小学校の教育は、

答 教師は7人。280人である。(参考)安康小学校見学时(写真4～6)、党校長から聴取した学年別生徒数は、6年49名、5年42名、4年52名、3年46名、2年31名、1年31名、である。中学校に通う学生40～50名、高校に通う者も数名出てきたが、殆どは出稼ぎに出る。

問 若い者が出稼ぎに出ていて、綿花の取り入れに支障はないか。

答 季節的労務者が主であり、瓜州を中心の近くにおいて、農繁期には戻ってくる。

問 年収が500元という事であるが、以前からの農民はどうか。

答 3,000～4,000元である。その差は、元から住んでいる農民の土地は良い土地で、綿以外の野菜など他の作物が取れる。また同じ出稼ぎにしても、オートバイを持っていて(われわれの家に

はないので、季節労働者にならざるを得ないが)、日帰りできるので有利である。

問 出稼ぎのための職業訓練は

答 訓練はしていない。

以上

座談会終了後、再び、農地・用水路などを視察。農家は各所で綿花の取り入れに励んでいたが、直接農民の意見を聞くことは出来なかった。畑の土は確かにアルカリ性が強く、少しでも放置すれば、すぐ塩分が吹き出てきそうであった。村の幹部が心配する用水路もあちこちに漏水する荒れた水路となり、分水するコンクリート柵は亀裂がひどく、大事な水を効率的に各自の綿畑に送るには可成りの修繕が必要と見られた。しかも、それをじっと堪え忍びながら、綿摘みをする一家が遅しく、そして長閑に見えるのも不思議な光景であった。砂埃が立たず穏やかな日であったからであろうか。村の小学校は丁度4年級の授業を見学、小さめの教室と机に、いっぱい教材を広げ、目を輝かせて学習をしていた(写真6)。

### 3 瓜州県七墩回族東郷族郷移民新村(9月8日)

年間降雨量が50~60ミリメートルというのに、朝から小雨である。祁連山脈終末か火炎山か、遠くに煙ぶるように見える。瓜州賓館を早朝出発。312号公路から3140号へ、七墩郷へ、疏勒河に沿って双塔水湖、布隆吉を経て瓜州県東部玉門市との境界近くまで車は走る。時々新しい集落で、まだ細いナツメ、ポプラの防砂林、古い集落には、遅しい太いポプラの緑色街道が現れる。退耕還草林の看板も見える。道路には綿花を満載したトラクター、時に単車、自転車が走る。集落の外れの角にはタマネギを積み上げ、出荷基地となっているところ(写真9)もしばしば見受けられた。出発して2時間半、漸く目的地に到着する。郷委員会弁事所に入り、党委王立海書記ほか関係者に挨拶、直ちに座談会に入った。



(9)



(10)



(11)



(12)



(13)



(14)



(15)



(16)

この郷は2001年に初めて建てられ、世界銀行借款による甘肅河西走廊（疏勒河）移民安置のための土地開発総合プロジェクトによるものである。このプロジェクトの総合企画では、七墩郷の開墾に適す荒地9.77万ムーと計画上配分された3.85万ムーを設計し、甘肅省東部の貧困地区から2,150戸、11,000人を移民させる計画である。プロジェクト建設が終わり、疏勒河プロジェクトによる中期、後期の調整が終わり、2005年11月に至り、プロジェクト建設が完成して移民整備が地方管理に移され、七墩プロジェクト区において自己志望の移民1,467戸、7,106人を実際に配置した。その内、漢族1,011戸、4,847人、少数民族456戸、7,106人。少数民族人口が民族郷設立の標準を超えた（32%）ので、瓜州県政府を経て、省民生庁に報告・批准され、「七墩回族東郷族郷」が成立したのである。しかし2006年初め、境界の分割により、この郷から玉門市に向けて、移民618戸、3,036人を移し、現在に至っている。

### 七墩回族東郷族郷移民新村座談会

瓜州県・七墩回族東郷族郷出席者

党委書記	王立海	
党委副書記	湯軍	
郷政府副郷長	任名彦	
郷政府副郷長	常応溪	
三墩村支部書記	袁虎	
三墩村三組組長	冉想忠	
滙源村党支部書記	鄭明輝	回族
滙源村主任	馬進明	回族
滙源村文書	趙奴海	回族



## (1) 七墩回族東郷族郷移民地現状

王党委書記を中心に村の現状が報告された

### 1. 移民移住基本状況

この郷は三墩、錦華、滙源の三つの村、16の村民小組からなっていて、安康村よりはやや遅く2001年立村された。民族は漢族、東郷族、回族である。現在は849戸、4,067人で、漢族390戸1,805人、回族264戸、1,395人、東郷族192戸、864人、東郷族と回族で30%（郷設立条件）を超えている。

### 2. 土地政策状況

この郷の移民定住工作は2003年に始まる。移民に際し配分された土地は15,762ムー、1人当たり3.5ムー（請負い地1人平均2ムー、借地1人当たり1ムー）、合計14,234.5ムーである。1戸平均の宅地配分0.8ムーで、合計679.2ムーであり、庭面積は1戸平均1ムー、合計849ムーである。その生活は一部で豊かになり一部で貧しい。

生産物は小麦粉と綿花である。水は祁連山脈から流れ出る灌漑用水で、一部は井戸を使っている。祁連山の水が足りないとき10%分の井戸水を使う。

この郷の前名は七墩郷回族東郷族郷である。土地は30平方キロメートル、年間降水量60ミリメートル。海拔1,300メートル。瓜州の東端にあり、市内から遠く、風が強く吹き、風の倉庫と云われ、乾燥している。経済作物は主に小麦で1ムー345斤（1斤500グラム）の収穫であったが2006年は354-370斤であり、1人当たり年平均収入は512元である。若者は殆ど蘭州に出稼ぎ、主に建築などに携わる。中には安西＝瓜州県で臨時労働するものもいる。村の道路は砂利道であり、市内から遠く離れているので、インフラが悪い。

### 3. 移民補助政策状況

疏勒河プロジェクトに基づく移民管理政策に照らして、国家は移民に対し直接標準定住費を補助した。

1,300元（住居用建材費は600元、生産補助各人90元、簡易農具費各人60元、燃料補助費100元、水道家庭引き込み費60元、照明取り付け費40元、移民移転費350元、計7項目で合計1人当たり標準補助費1,300元）である。

全郷の学校と病院は2006年5月瓜州州政府組織の専門技術員配置により開始された。その内、完全小学校1個所、教学所1個、1-5級7個の教学班がある。学生は全部で246名、その内郷小学生214名、男子134名、女子80名、中学生32名、（全部三道溝中学進学）。現在教員は11名。その内漢族10名、回族1名、男性教師5名、女性教師6名、教師の学歴は100%標準に達した国家公務員である。

病院は中心衛生院1個所、村の問診所1個所、医療員は6名、その内医師4名、看護師2名である。衛生院には100ミリレントゲン、心電図計測器、その他簡易医療器を備え、年間約2,000人を診察しており、良くある病気や流行性の病気などの治療や予防など保健衛生に貢献している。

村の生活において貧窮の為の低収入保障戸14戸60人があり、1人当たり1月22-25元、最高28元を支給している。少数民族の村が2つあるが、わが国の優遇政策は漢族と同等である。ただ、少数民族はモスクの建設を望んでいるが、幹部には資力がない。蘭州政府の決定・許可があるかに関わっている。

### 4. 農業発展状況。

(1) 農作物 移民した2004年以來の農業においては、土地状況が複雑で、地下水位が低く、流動或いは反流動の砂丘が多く、土地はアルカリ性で、地方の植生が低く、自然環境が劣悪で、歴史上も瓜州県と玉門市の風砂地の一つであった。主要作物は食糧作物（大麦・小麦）が主であるが、移民農民の技術が後れていて、収穫量と収益が非常に低かった。2007年の全郷耕種土地は6,413ムー、

その内、食糧作物61,105ムー、試験性経済作物308ムー（甘草、紅花を主とする）であり、本年の食糧収穫量は1ムー当り175キログラムであるが、自然条件劣悪により、4年来この郷の移民群衆の食糧の平均は1ムー当り、125キログラムほどである。

## (2) 植樹・造林

この土地の自然条件が劣悪であり、生存状況が厳しい現実を、徹底的に改変するため、2001年のプロジェクト開始以来、風砂を治め、植樹造林することは全郷にとって重要なことである。近年来、上級のプロジェクト建設と、県委および県政府の苦心を込めた計画的配置により、群衆2万人を動員し、各種類の防風林帯368条、125.21キロメートルを植栽し、その内、緑色道路45条、38.5キロメートル、群衆義務植樹は6,184.4ムーである。防風林は緑化と生活を支え、これがなければ作物に大きな支障を与える事になる。

以上、2001年成立から6年、未だ建設中の移民移住に対し、2006年3月郷党政府成立により、新農村建設の方針に従って、あらゆる方面において市委、市政府、県委、県政府は努力を傾け、各方面で改善しており、今後群衆の生活環境が改造され、急速に発展できるか、蘭州からも注目されている。

## (2) 質疑応答

問 郷所属の各村の実態を具体的に知りたい。

答 （少数民族）（滙源村・回族）2003年以前は臨夏回族自治州に居り、そこは山ばかり、道狭く、交通不便であったが、ここは平地であり、ほぼ満足している。不満は堀が破損し、修理が必要なことである。

答 水路の一部はすでに修理しており、更に修理を続けている。

今年度も政府の防砂対策に50万元を得ている。

答 もともとこの土地の人口は194戸あり、実際120戸ある。95%は出稼ぎに出ており、主な収入はこれによっている。主な作物は紅花、甘草、小麦粉、家畜は羊、牛、ロバであり、各自で飼育し、売ってもある。

答 （漢族）（三墩村村長）甘肅臨夏回族自治州から移転してきた。移転当初、当地の政府幹部やリーダーに助けて貰い、感謝している。その頃は七墩郷には道が無く、緑もなかった。今は緑も増え、道も出来ている。もとのふるさとは緑も道もあったが、雨が降らなければ収穫がなかった。ただ、一部の人は豊かに、一部の人は貧しく、貧富の差が多い。自分の願いは、政府の関係者が村の状態をもっと重視してくれれば、もっと豊かになると思う。

問 1人あたり1,300元の補助の内容は。

答 950元は現物（日用品など）支給であり、350元は移転費用で移民者の手には入らない。

問 居住者の数と戸籍について

答 「なじめるかどうか試みて、なじめないなら2年以内にふるさとに帰ることが出来る」ということで、移民者は2年間の農耕生活をしてみて、2年後に定住して落ち着いた者には皆統一して戸籍を作り、身分証明書が発効される。194戸の移民の内、120戸と云うことは、今現在74戸が行ったり来たりしていると云う事である。

問 市内でアルバイトと言うことは

答 例えばタマネギ集荷で10人のうち、7、8人は友達同士の手伝いで、1日30～40元ほどである。

問 トラクターはどのくらい保有しているか。

答 30%の家にトラクターがある。村には10台ある。

問 何故富んだ人と貧しい人が生まれるのか。



答 移転時の経済力に比較的差があり、移転以後の生産面への投資力に差が出たこと、また家族の労働力の差が、出稼ぎに行けるかどうかで（収入に）差が出たことなどである。

以上の座談会終了後、三墩村、滙源村、錦華村の3村を視察した。七墩回族東郷族郷の衛生院（写真14）と小学校（写真15・16）を訪ね、元気な生徒児童に接した。生徒は昼には家に帰り、午後また通ってくる。村では漢族張春元さんの家を訪ねた（写真12・13、家は増築中であった。四人家族で14ムーを耕すという）。錦華村においてゴビの中方格固砂方式で、まず草を生えさせる方法（3か村で5,153ムー）また麦わら30～40センチメートルを砂中30～40センチメートルに埋め込み、50センチ方格に編んだ網をかぶせ、転圧して流砂を固める方法、労働者1万人、トラクター200台、麦わら20余万キログラム、250余万元で囲み周囲4個所20.23キロメートル、囲い面積4,352.5ムーという、途方もない努力を重ね、砂漠の耕地化に立ち向かっている。（写真11）

#### 4 瓜州県腰站子郷移民新村（9月8日）

腰站子郷は瓜州県城から東へ104km、午前中に調査した七墩回族東郷族郷からは、車で約1時間も離れていた。到着後、直ちに党委員会会議室に入り座談会を開催。漢族、東郷族らの陪席者を含め27名が現地参加者であり、われわれ一行8名を加えると全員35名に上った。



(17)



(18)



(19)



(20)



(21)



(22)

### 腰站子郷移民新村座談会

瓜州県・腰站子郷出席者（写真17、18）

党委書記	李天明
郷政府郷長	呉学文
郷人代主席	趙生栄
郷党委副書記	蔣軍
郷政府副郷長	馬麗琮
郷武装部長	王彦峰

#### (1) 腰站子郷移民地現状

李天明書記からこの郷の成立と現状について以下のように報告があった。

この郷は1986年から省委・省政府の確定により、「陝西」移民基地として建設が始まった。甘肅省永靖・東郷・石積山・庄浪・通渭・定西等8県から1,536戸、7,229人が移民してきた。但し2年間は移住者の都合により現地の生活に馴染めなかった者がもとの故郷に帰ることも許されていた。その為、移民者8,972名中3,000名は故郷に帰った。1996年正式に郷政府が成立した。

移民者は「三西」プロジェクトによる河西、定西、寧夏・西海固からであるが、現在この郷は6村、43小組から成り立っている。人口は1,517戸、7,292人であり、2006年9月、疏勒河移民区から、東郷族が517戸、2,992人を移民させた。移民の全部は甘肅省東部の乾燥地からであり、少数民族が37.6%を占めており、その内東郷族が98%を占めている。郷の民族数は5である。本年8月1日から東郷族村が成立した。

この腰站子の名前の由来は、古来よりシルクロードの要衝であり、行き来するキャラバンが長旅の疲れを癒すため腰を掛けた所という意味である。

この郷の漢民族の平均1人当り年収は、2,715元、少数民族は1人当り700元である。腰站子郷の全ての平均収入は1人当り2,013元である。主な収入は次の通り。

- 1 主要経済作物 綿花
- 2 特色作物 甘草、ニンニク（紫皮大蒜）、紅花
- 3 養殖産業 羊、牛、鶏、豚
- 4 労務輸出 打工（アルバイト）、出稼ぎ（主な現金収入先）

この郷の施設は、

小学校 1個所 ほかに（分教所）3個所

中学校 1個所

生徒数小・中併せて 1,232人（少数民族の学生 251人）

教師 62人

病院 規模・施設完備1個所 衛生院クラス3個所

この郷が一番困っていることは、耕地面積が少ない事である。1人当り2.5ムーであり、土壤の水分少なく、アルカリ性である。現金収入に乏しいため、投資資金に欠乏している。その為防風林など基本インフラが出来ていない。また、少数民族の70~80%はいわゆる文盲であり、新しい技術の獲得に難点がある。イスラム教のモスクは13個所あり、郷としても4個所ある。

土地の人の願いは、養殖業をもっと増やしたいと希望している。特色作物の甘草、ニンニク、紅花の畑をもっと増やしたいと望んでいる。また多くの若者が出稼ぎできるならもっと収入を増やすことが出来る。

## (2) 質疑応答

問 農民の収入について漢族と少数民族の差が大きい理由は

答 少数民族の人は安康村から来ている。ここに移ってから10年になるが、農業技術（工作方法、種植方法など）に詳しくない。土壤もアルカリ性で収穫が少ない。

収穫の高い漢民族は、移民以来21年経つ。もともとの漢民族は1人2.5ムーであるが、工作の技術や肥料などについて詳しい。少数民族は一人3.5ムーであるが、技術力が不足し、肥料も少ない。少数民族は本来の（牧畜）生活から転換して移民してきているため、土地になれていない。

問 日本で言えば農業指導員というような専門家の指導があるが。

答 この郷でも春、秋農業技術の講座を開いているが、漢語で講義するので少数民族には通せず、理解が難しい。改善策として少数民族の言語も使う必要があるが、政府の補助資金もなくこれからの問題である。

問 農民の主な収入源は

答 甘草は1ムー1,800~2,000元の収入がある。この甘草畑に大きな企業が契約で借り上げ、同時に農民を雇い、自社の種を使って栽培、収穫する。アルバイトになる。この他、2008年になるが、トマト栽培について、大きい企業が、先ず農民と契約し、中玉のトマトを生産し、さらに加工工場を建て、ジュース・ジャムに加工する計画である。トマトの市場値段500グラム0.3元に対し、市場が値上がりしたら、農民にも利益を還元する。市場が0.2角以下に下がったら、0.2角まで保証する。保証する為に企業から専門の監督者を派遣する。このような動きがある。

問 土地を貸すという事は、自営農民が小作農になるのと同じではないか。

答 中国の農地の扱いであるから、農民は土地を有償で貸し、その上で、その土地で働けばその分の収入もある。契約でそうするがこれには2つの方法がある。

①集約農法の一つとして企業が先ず土地を借り上げる。農民は別個に雇い入れる。②これからの方法であるが、農家に対し、企業が契約栽培する方法。

問 荒地が乾燥しているためか、なっている実が小さい。改良の工夫がないのか。

答 タマネギ、トウモロコシも確かに丈が低く実が小さい。新しい肥料を工夫する。

問 もっと灌漑を多くし、水分が回るようにすれば収穫が増えるのではないか。

答 可能性はある。資金、その他（水源、水量、流域の配分問題等）の問題があるが、3~5年で実現できるようにする。この村の人々は疏勒河の中上流にあたり、他の村より恵まれている。灌漑量は1ムー当り800立方メートルである。

座談会終了直前、この章冒頭に記した王尢三氏が唐墩村から駆けつけた。郷委員会の呼び出しで何事かご夫婦で会場に入ってこられた。用事があったのはわれわれ調査団からの要望が有ったの

ことである。

われわれは劇的な対面を果たしたことになるが(写真21、22)、今は裕福になったという王夫婦はどんな感慨をもたれたか。この項は改めて包曉霞氏の別項報告を見ることとしたい。

### 甘肅省蘭州市・永靖県等生態調査(9月9日～10日)

扶貧移民新村調査は、このテーマを設定したときから課題であったが、移民が移転した土地の調査ばかりでなく、移転以前に居住していた土地との関わりも明らかにしたいと願っていた。しかし、そこは交通の便も含めて、非常に遠隔の地であったり、退去した村にはいて、今はいなくなった住民の生活事情を調査することは、現在、地方政府の許可が厳しくなっている現状から、関係者に歓迎されない事情にあった。やむなく、出来るだけ近辺にまで近づき、周囲の環境調査を主として実施してきたのである。

今回の蘭州調査についても、目的は劉家峡ダム周辺の臨夏回族自治州・永靖県を目指していた。それは、すでに瓜州県腰站子郷の報告に記した、同県出身王尢三氏に会見できる機会に、その郷里が今日どの様な変化を遂げているか実地を見たいと考えていた。しかし、限られた調査時間では、現地到着に相当の時間を費やし(写真26、遙か丘陵の彼方の山地が王氏一家出身地である)、また事前の手続きなどの関係で、今回は十分な調査に至ら無いため、永靖県周辺の生態調査に留まった。

#### 蘭州市および近郊生態調査——扶貧移民に関して

##### 1 蘭州市

西部大開発の前線本部が西安とすれば、蘭州市は大前進基地である。新疆から送られる豊富な石油と天然ガスなど、エネルギー源豊富であり、石油精製、石油化学、鉄鋼など、一大工業都市が形成されている。市内中心まで43キロあるという、中国で最も遠い空港を出て、市内にはいるまで、両側に黄土土地が連なる。しかし、陝西方面の黄土台地と異なり、紅褐色の台地に黄土が降り積もって山塊が形成された、西藏高原の末端が押し寄せている風景である。その土質を利用してレンガ工場が並び、製品が盛んに運び出されている。建築ブームで需要が多いのであろうが、焼成に石炭を使っており、公害にも影響があるようである(写真25)。

今年は市内20キロを割って東西に流れる黄河の水量が多い。黄河の源流を囲む五千メートル級雪山からの雪解け水が、最近、温暖化の影響で大量に流れ出しているという報告もある。甘肅は東西が1,600キロメートルもあるため、各種の生態系に富んでいるが、甘南の森林地帯を除けば、概して半早ないし乾燥地帯である。高度5,000～3,000メートルの高山から水源を仰ぎながら、その山麓は年間を通じて70～50ミリメートルの降水量しかない。従って多くの山地農民が、水不足に追われ、困窮し、他の土地に移転せざるを得なくなっている。



(23)



(24)



(25)



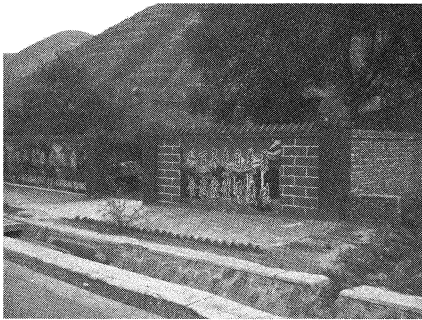
(26)



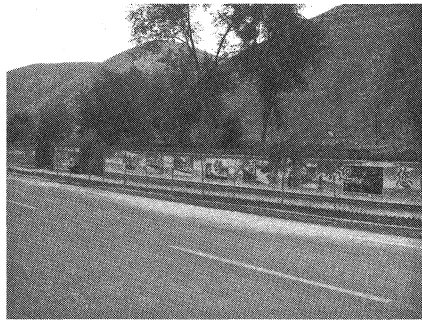
(27)



(28)



(29)



(30)

## 2 扶貧と生態を結合させた移民移住政策

2006年9月5日の「甘肅政府網（新華網摘自）」によれば、基本的な生活条件に欠ける試験地区の農村貧困人口を対象とする必要な扶貧移民は2006年度中国全体で24万人、予算は12.9億元かかると伝えている。

一方、同9月12日同網は甘肅東郷族自治県のここ10年来の移民状況を伝え、「有水走水路、無水走旱路、水旱路都不通、別探出路」により、疏勒河など移民基地の16個所に8,379戸4.08万人が移民したと伝える。永靖県を含む臨夏回族自治州が如何に多くの生存条件に欠けている地区があるかを物語っている。

われわれは、永靖県のほんの一部の地域に入り込んだだけであるが、それにしても明らかに土地に手を入れることが困難な荒地が目につく（写真26、27）。黄河流域の劉家峡・塩鍋峡・八盤峡のいわゆる黄河三峡を含む広大な永靖県であるから、所によって平地もあり、豊かな穀物が実っている様子も見られるが、しかし両側の山が迫り川幅が狭く平地の面積に乏しい（写真28）。その為、貧困地域の移民を、従来は遠く疏勒河などの灌漑可能な地域に移民させてきたが、2007年、移民に変わりはないが、同じ永靖県内に移民しようと努力している事が報じられた。

永靖県の従来の移民方式は異地移民であったが、これを易地（替え地）移民としようとするものである。「新華網」が伝え、それをもとに「甘肅政府網」が2007年4月12日「永靖易地扶貧搬遷工程成效顯著」と題して報じた記事を紹介したい。

「今年1,535.8万元を投資して、426戸、1,948名の山区群衆貧困群衆に対し、易地（替え地）扶貧転居を実施した。工事の設計では、住宅426戸23,571.86平方メートル、基本農田1,212.7ムー、農1級公共道路4.7キロメートル、水利灌漑工事6個所、人の飲み水工事5個所、家畜用暖房柵16所、日光温室83所、10立方メートルのメタンガス槽227個所、30立方メートルの水貯め116個所、石積み灌漑用水路16.6キロメートルを敷き、10キロボルト農業用電線1.9キロメートル、0.4キロボルト農業用電線7.8キロメートル、50キロボルトアンペア変換器据え付け6台、家庭入線426戸。永靖県西部山区は典型的な集中連続する貧困地区に属し、大部分の貧困群衆の生活は辺遠にあり、寒さがひどく、干旱欠水し、生存環境は劣悪で、山地災害が頻発する地区で、生産生活条件はひどく困難で、生存環境は極めて劣悪である。貧困群衆の根本的な貧困を脱し、富裕に向かう早道を求めるため、永靖県は組織を上げて、真剣に易地により移民移転を実施する道を求めた。2005年、永靖県は1,614.95万元を投資して、塬頭、尕中嘴、大地坪の3個の移民居住地点を開き、扶貧と生態建設を結合させるという原則の下に、人をもって本となす・群衆が自ら志願・統一した手配・政策が保証するという原則の下に、先に開発、後から移住を結びつけることを堅く守ることを原則とし、1,600ムーを開発し223戸を建設、群衆を安全に移住させる「移転で出られ、安全に住んで、よく富をもたらす」を更に一步、県域経済の発展を平行促進することを確保した。」

以上、長い引用になったが、扶貧と生態を結合する移民は、陝西省や山西省などの退耕還林を利用した移民があるが、比較的近距离の県内、遠くも省内に限られる場合が多かった。

永靖県の場合、先ず生存を確保するという緊急性がある。農民は先祖以来の土地に執着し、移転先に対する不安もあり、円滑に移転することはなかなか困難である。しかも、甘肅東南部のこれまでの移民は、疏勒河流域など、遠隔で、しかも平地の灌漑農業という、未知の生活に転換しなければならなかった。こうした異郷の土地から、県内で移転できるという事は、農民にとっては魅力的であろう。但し、移民の要因は日常的な水不足であり、気候条件は平地において僅かな平均気温上昇がみられるとしても、降雨量が格段に増加するわけではないであろう。水の確保は引き続き大きな負担になるのではないか。

### 3 扶貧政策と農民—新農村政策の一こま「文化齋」と「遮羞齋」

永靖県に関し、2007年4月17日の「新華網」記事（以下「 」内記事）は興味あるニュースを伝えていた。それは同県の徐項・陳井・三条峴三郷の国道に面した農家の前面に、藍色を主体に色取りし、中には看板風に絵や文字を書き込んだ高さ2メートルほどのレンガ壁が9箇所、2キロメートルに渡って現れ、当地の政府はこれを「文化壁」と呼び、住民は「恥じ塞ぎ壁」と呼んでいるという。実はわれわれもこの調査行の帰途、陳井郷仁和村九社に立ち寄り、この壁面を見学したのである。

連続した藍色のレンガ壁の上部は瑠璃色の瓦で縁取りされており、壁面には明らかに広告の為の商業用ポスターが張り付けられ、当初報道より、壁面宣伝が更に派手になっているようである。（写真29、30）。

この「文化壁」が何故問題なのか、それは永靖県の貧しさによる。「新華網」は、永靖県の実情と農民の意見を伝えている。

永靖県は「国家重点扶貧県であり、全県貧困面10%、個別郷鎮の貧困面は70%以上を超える。」とし、仁和村九社の農民について「仁和村は日照りの山区であり、村民は基本的に天を頼みに飯を食う状況で、彼の家の11ムーの土地は連続してここ数年基本的に収穫がなく、去年は毎月100斤余の小麦粉を買って、5人の腹を満たしてきた。現在一家の生活は彼の出稼ぎの収入によっている。記者がある村民の家の炊事場に行くと僅かに5キログラムの小麦粉があるだけであった。」と報じ、更に仁和村九社村長は「27戸あるが、多くの家は食糧が無く、壮年の労働力のない家もあり、生活は更に困難になっている」と言い、またある村民は「数年前、九社に通じる水路の堀が損壊したが、政府はこの2キロの水路をただ修理できないというだけであり、村民は自己負担で堀をさらい、灌漑の水を引いた。但し、この堀は石底でなく、水流は地面に至らず、全部地下に浸透してしまう。彼らは紹介するが、九社の絶対多数の荒地には灌漑する方法が無く、一部の農家はすでに耕作を放棄している。村民の飲み水は9キロも離れた九社村七社まで行って運んでくる」と切々と貧困状況とその原因まで訴えている。

そうした中で、「陳井鎮政府提供の資料では、この鎮の総人口は1.2万人で、2005年末には、625元以下が4,580人あり、総人口の3割以上である、と。当地の幹部が明かしたところでは、1メートルの「恥じ塞ぎ壁」を建てる毎の材料・建造費100元位であるという。三条峴郷のある指導者はこの郷で400メートル余の壁を建て、材料に4万元近くを投入したと記者に告げている」とあり、では県は何故豪華な「文化壁」を作ったのかと言えば、「数年来、永靖県は県内の劉家峽・塩鍋峽・八盤峽の三ダムの位置を利用して、大いに「黄河三峡」の旅遊資源を開発し、旅遊業を發展させてきており、蘭劉公路は永靖を通る主要道路であり、永靖県での長さは45キロメートル、永靖県は緊急にこの道路沿線に緑化と美化を進行させることを加えたのである」と報じ、「壁を作るのは“新農村建設”の“新しいやり方”だと政府は弁解している」と伝えている。

なぜ「恥じ塞ぎ壁」というのか。それはここまで「新華網」の紹介してきた記事で分る通り、この道路沿いの農民は貧しく、古い家は壊れたままで修繕する費用もなく、家畜小屋も壊れて飼料の草がむき出しで積まれたままの家並みもある。そうした「美化」を妨げる屋敷は、藍色の壁で塞げば「緑化」に変ずる。再び「新華網」の最後の記事は「永靖県扶貧弁のある文献に、2006年永靖県新農村建設時に当年“新たに文化長廊1,200メートルを建てる”と県に上程しているとし、県扶貧弁副主任は、この文化長廊とは蘭劉公路の壁であるといっている。」と伝えている。折角の美観であるが、住民にとっては面はゆい反面、出入りに不便であるとか、折角観光客が増えてきたので、通りに飲食の店を出したいと思っていたら上からの命令で、壁に囲まれてしまったとぼやいている農民もいるようである。

（以上平成19年度調査報告文責 飯塚勝重）

## 第二部 調査総括

### 1 「移民新村」政策の多様性と変容

—2007年現地調査を終えて—

阿 部 照 男

#### 1 経済成長至上主義から格差解消を目指す「和諧社会」へ

今、中国は大きな岐路にさしかかっている。一つの道は、競争原理の赴くまま、経済成長至上主義をひた走る道であり、もう一つは、調和のとれた社会を目指し、地域格差、所得格差を無くす道である。今、中国は、この後者の道を歩み始めたように見える。去る10月21日、第17回中国共産党大会が閉幕し、今後5年間にわたる胡錦濤政権第2期目の陣容と政策方向が明確になった。これによって、鄧小平から江沢民政権まで続いてきた経済成長至上主義の路線が明確に転換されたように見える。それを象徴するキーワードが、新たに打ち出された「科学的発展観」なる言葉である。この言葉が意味するものは、従来から使われてきた「和諧社会」なる言葉と相俟って、中国政府が貧困と格差の解消・是正を今後の長期的国家戦略として位置づけようとしている、ということであろう。

2003年に、われわれが「中国『西部大開発』と地域社会の変容」と題する研究プロジェクトを立ち上げてから、今年で5年が経過した。その間、われわれの研究の焦点も、単なる地域開発研究から、貧困、格差問題へと絞られてきた。まさにこのわれわれの動きと軌を一にして、中国政府の国家戦略も貧困と格差の解消へと照準を合わせ始めたのである。しかし、今回の調査で、私は、中国現地での問題の焦点は、貧困問題から格差問題に移りつつあると感じた。

#### 2 「移民新村」政策の多様性

今回の調査で、明らかになったことの一つは、「移民新村」政策がそれぞれの地域の自然条件や社会的・文化的状況を反映して、多様な形をとっている、ということである。われわれのこれまでの調査地域は、陝西省中部を中心にした地域に限られており、黄土高原という自然的・地理的特殊性を反映して、耕地の形状が等高線状になっている。この地形では、灌漑が不可能であるため、自然の降雨を最大限に利用できるような形作られている。治山治水と退耕還林とが有機的に結合されて、「移民新村」政策をサポートしているのである。

移民新村における住宅の作り方を見ても、限られた平地に対応して、全体に集合住宅つまり長屋風の形をとっている。一戸当たりの敷地面積も比較的狭い。しかし、例えば、陝西省銅川市宜君県丁家溝村で見た移民新村のように、単なる扶貧政策としてではなく、ダム造成のための集団移転という補償を伴った場合には、財力の大きさを反映して、住宅の作り方は、長屋風ではなく、戸建てで、それぞれの家族の状況に合わせて、間取りや広さが異なっており、一見すると、「移民新村」であることを感じさせない。



これに対して、甘肅省瓜州県における移民新村は、砂漠に近い広い荒野に作られていて、敷地にゆとりが感じられる。また、耕地の造成も、降雨がほとんど期待できないため、灌漑水利が必須の条件である。灌漑は、遠く離れた山地のダムから延々と水路を作って水が流れてくる。しかし、その水路は、速成的に作られていて、年月とともに、痛みがひどくなり、水漏れが各所で発生するという状況である。われわれは、瓜州県で、九旬峡ダム造成に伴う移民新村の建設現場とそこ至る灌漑用水路の建設現場を視察したが、水路の作り方はいかにもインスタントで、荒野を掘ってただU字溝を置いただけのものである。実際、同じ瓜州県腰 stations 郷で視察した棉花栽培の耕地は、20年の年月を経て、水路が至るところで破損しており、農民達は水漏れを防ぐために、薄いビニールシートを貼っていた。農民達の行政に対する要望の第一は、水路の修繕だということであった。しかし、修繕はなかなか行われず、農民達は、棉花の育て方を、丈を切り詰めて水分を節約するという工夫をしていた。今後、「砂漠の農業」といかに取り組むのかということが、大きな課題であろう。

### 3 曲がり角に来た「移民新村」政策

今回の調査は、貧困対策としての「移民新村」政策についての我々の視野を広げさせてくれるものであった。それは、一つには、3年ぶりに訪問した宜川県高柏郷の現状を見て、この政策の理想と現実の隔たりを確認できたことであり、二つ目は、甘肅省瓜州県腰 stations 郷でおよそ20年前に行われた移民新村のその後の状況を確認することができたこと、三つ目は、黄土高原の移民新村の状況と砂漠地域における移民新村との違いを確かめることができたことである。

宜川県高柏郷に2004年に訪れたときに、まだ足場の残る建築中であった「大通りの商店街」は、今回訪れてみると、2階建ての長屋風の建物が道の両側に連なり、広い歩道や電柱が立ち並ぶ立派な「目抜き通り」として完成していた。しかし、道には人通りはなく、ほとんどの店にはシャッターがおりていて、開いている店はほんの数軒であった。小売店を意味する「〇〇門市部」という看板を掲げた店が軒並み並んでいるがほとんどがシャッターを下ろしている。シャッターの開いている「海竜総合門市部」という看板の店に入って聞き取り調査をした。昔の日本で「よろずや」と呼ばれるタイプの店で、奥さんが店番をしていた。夫や子供達は出稼ぎに行っている。他の店でシャッターが下りている店では、皆出稼ぎに行っているのだという。確かに、この人口まばらな地域で、軒並み「よろずや」をやっても成り立つはずはない。「移民新村」政策のねらいの一つは、農民を「脱農」させて、過剰な農業人口圧力を下げる、ということであり、その手だての一つが小商店経営への移行ということであるが、これは、やはり、思惑通りにはっていないようだ。われわれは理想と現実の隔たりを見た。

この商店街からほど近いところに、2004年調査時に建築中であった新村では、移住してきた農民達の生活が始まっていた。ある老夫婦と息子夫婦が生活している一家を訪問し、聞き取りをした。門柱には「沼気戸」の標札がかり、燃料にバイオガスを使っていることがわかる。40代の息子は、農業と所有する三輪トラックを使って若干の副業を営み、子供達は、今、宜川の中学で寮生活をしている。老夫婦と息子の受け答えからは、彼らが現状の生活に満足している様子がうかがえた。

壺口瀑布からさほど離れていない街道沿いに、かつて下放された青年達が生活していたというヤオトン数棟があり、今は譲り受けた袁氏が「袁家農家楽」という民宿を経営していて、2004年の調査時には、ここで昼食を摂った。その時、街道の反対側でも別のヤオトンが新たに掘られていて、農家楽を始めるということであった。既にある3棟では農民一家が生活していて、新たに6棟のヤオトンが掘削中であった。今回そこを訪れると、立派に完成していて、「黄土情農家楽」という看板を掲げた民宿になっていた。黄土を削ったままになっていた広い前庭は、植栽されたり、舗装されたりして整えられていた。われわれは、そこで昼食を摂った。この農家楽の隣の一段低い土地に

は、これからヤオトンを掘るための準備が行われていた。黄土を垂直に削った壁には、アーチ型に溝を刻み、そこに煉瓦を積んで、ヤオトンの入り口が作られていた。いつでも掘削が始められる体勢である。その数10棟以上。前庭には、煉瓦が山のように積まれている。この光景は、この農家楽が順調にあって、経営規模を拡大するほどであることを、如実に語っていた。この農家楽は、農民が脱農して、観光業に転身した成功例と言えるだろう。

しかし、高柏郷の「観光道路」沿いに新たに建設中の移民新村には、農家楽経営を見込んだ家屋がたくさん作られており、将来ここが農家楽街として成功するとは思われない。ここに移り住むであろう農民達は、十分な農地は与えられず、結局、出稼ぎで生計を立てるしか手立てはないであろう。

甘肅省瓜州県腰站子郷では、およそ20前に行われた移民新村のその後を確認することができた。村の生業は、棉花、タマネギ、紅花、トウモロコシなどの農業であり、子弟の多くは出稼ぎに行っている。われわれは、この調査に出発する前に、20年前日本で放送された中国の移民新村のビデオを見ていた。そこでは、蘭州市永靖県の山奥から老母の反対を説き伏せて、はるばる腰站子に移民してきた王孛三氏夫妻の移民にいたるまでの経過が記録されていた。その王夫妻にわれわれは会って、いろいろと現在の暮らしや移住しての評価を聞くことができた。王さんは、今は、トラクターやオートバイを所有して、満足できる生活をしていると語った。実際、われわれのところに来るのに、新しいバイクの後ろに奥さんを乗せて、得意そうにやってきた。

このように見てくると、「移民新村」政策は、貧困対策としては、最小限の役割を果たしたと評価していいであろうが、しかし、決して優等生は出ていない。つまり、「移民新村」政策は、農民を小商店経営者として脱農させたり、観光と結びつけた特産物農業の経営というその理想を実現できてはいないのである。

今や「移民新村」政策は、脱貧困という一応の目的は達成して、曲がり角に来ていると言えるだろう。

#### 4 「移民新村」の歴史的役割

論理的なレベルで「移民新村」政策をとらえると、その歴史的役割は、「農民分解」のスタートラインを作った、ということであろう。ここで、移民新村に移住するためには、自己負担という自助努力が求められる、ということが重要な意味をもってくる。つまり、向上心のある、やる気のある農民と、その他の農民とが篩に掛けられ、移民新村には、やる気のある農民が揃うことになる。それは、脱農への動きを確実にする。あるいは、農業経営そのものの変革につながる。

移民新村の農民の中から、小商店経営者となる農民が出るだろう。また、出稼ぎを契機として都市の労働者として定着し脱農する農民も出るだろう。あるいは、観光と結びつけて、民宿・レストランの経営者となる農民も出るだろう。また、観光みやげとして、ナツメ、リンゴなどの特産物栽培や加工に特化する農民も出るだろう。

「移民新村」政策によって、一定の資力と気力を持った農民が揃うことになり、ここから次なるステップが踏み出されることになる。

だが、これによって、取り残されることになる、自己負担に耐えない、向上心に欠けた農民が、真の貧困層として、社会の底辺に沈着することになり、このことは新しい、しかし見えにくい貧困として問題になるであろう。

#### 5 「移民新村」から「新農村」へ

このように、中国における貧困対策は、一応当面の目的を達成して、その焦点は、格差是正に移

りつつあると言えるだろう。つまり、農村・農業におけるデッドウエイトを解消させて、次のターゲットは、総体としての農村の底上げを進めることである。それは従来から言われてきた「三農問題」そのものである。それを象徴する言葉が「新農村」のスローガンである。われわれが既に見た「新農村」のイメージは、きれいに整えられたモデルハウスの集まりであり、いささか現実離れた感があったが、もちろん「新農村」とは、それだけのものではなく、農業技術の近代化をテコにして、農業構造の近代化を実現し、ひいては農民の所得水準を上昇させ、工業や都市部との格差を是正するものでなければならない。「新農村」建設は、まだスタートしたばかりであり、具体的な全体像はまだはっきり見えてこないが、論理的には、「農民分解」を推進し、「大農経営」を生み出すことによって、工業発展とのバランスを保つという方向で動いていくことになるだろう。その場合に、戦後の日本の農業政策が教訓として生かされるべきであろう。戦後日本の農業政策は、農地改革によって「独立自営農民」（自作農民）を創出したところまでは良かったが、その効果の後戻りさせないために、農地の流動化を厳しく制限し続けた。そのため、「大農経営」が育たず、日本農業の生産力は伸び悩み、発展していく工業とのアンバランスを拡大させ、国際競争力を強めることができなかった。このことは、日本の食糧自給率を危機的に低い水準に押し下げることになった。

中国は、日本の農業政策の愚を繰り返してはならないであろう。「新農村」の建設を通じて、農民分解を促進し、大農経営を創出し、農業の生産性を上げ、食糧自給率の適正水準を確保するよう努める必要がある。そのためには、農地の利用権の流動化を促す政策が不可避であり、同時に、発生するであろう農業賃労働者へのサポートをきめ細かに行う必要がある。

工業の発展にともなって、宿命的に遅れがちな農業の発展をどう支えていくのが国家の重要な責務である。日本では失敗した農業政策を、これからの中国政府がどのように行っていくのか、注目していかなければならない。

## 2 「移民新村」政策の諸問題

—07年調査と視察の概報—

針 生 清 人

中国の経済発展は著しい。世界の目はその著しい発展の一点にのみ目を向けるだけである。確かに経済の発展は事実であり、それに伴って巨万の富を手にした人も数多く生まれている。彼らの生活が変貌し上昇し続けるのと同様に、都市も変貌している。豪華な高層マンションが林立し、市民の生活環境も整備され、生活意識も益々上昇志向を示している。しかし一歩裏町に入ったり、郊外に向かうと、下水道もない劣悪な生活環境は相変わらずであり、裸電球1個の暗闇の生活がある。竹箒一本を手にして一日中道路の清掃をし、工事現場の傍らで天幕暮らしをする民工がいる。経済の躍進が展開すればするほど、その発展の恩恵に浴せぬものとの「格差」が問題となっている。それは中国全土を覆う問題であって、単なる都市内の問題ではない。その格差が最も顕著に現れるのは、沿海都市部と内陸辺境の山区・農区の格差であり、株式市場が生み出す富裕と絶対貧困との格差である。年収625元以下の絶対貧困者の多くは辺境の山区・農区に居住する農民である。経済の飛躍の発展から突き放された辺境山区の農民は、劣悪な自然環境の自然村に分散、孤立し、旧来の生活を墨守していっただけであった。貧しさや遠距離悪路のため子供を通学させ得ず、文盲は文盲を再生産し、貧困は貧困を再生産するという状況が続いてきた。

中国経済の発展は、中国の貧困問題を深刻化させ、農村問題を政治問題の一つとしている。われわれの研究グループは、現在中国で行っている農村の貧困問題に着目して調査研究を行ってきた。調査研究を開始した2003年当時の中国の対農村・農民政策は「西部大開発」であり、「退耕還林(草)」であった。その後は、さらに、「移民新村」「労働(労務)輸出」「三農問題」「扶貧扶農」「自主、自立、自助」「農工商結合」「一村一品」「温飽問題」「和諧社会」「社会主義新农村」等々のスローガンが用いられている。それらのスローガンが目指すところは何れにしても農村の貧困撲滅にあり、農民、特に絶対貧困農民の生活環境の改善、それに必要とする収入増加を促すことにある。沿海都市部に展開される経済は、いわゆる「市場原理」にさらされるが、農村は政府主導の「社会主義農村」建設が標榜される。

「西部大開発」の基本構想は、辺境部にも高速道路以下各級道路を開通させ、地方の諸都市を結合する。地方都市は各々が一つの核となって県、郷、鎮を支線道路によって結合する。各郷村も村々道路で結合する。それは言うならば、核となる地方都市と県、郷、鎮が放射線状に連絡することになり、各地方都市は高速道路によって全国に連絡することになる。それはいかなる僻地をも一つの巨大な道路網に組み入れることを意味する。それを妨げるのは分散、孤立する自然村の存在である。その対策が「集中移民」である。通電、通信も一つのネットワークに組み入れる必要があり、自然村に対して設置される諸々のインフラストラクチュアに比して、「集中搬遷」はコストも安い。これらのネットワークは海港、空港を端末として海外へ連絡するという構想である。それは後述するように移民新村の建設に当っては、道路建設が最重要視されていることが理解される。辺境山間部の生産物を海外市場へと連絡することによって、この山間農村も経済市場に参入することが、将来、可能となり経済発展の恩恵に浴させようとするものである。

「退耕還林・草」もまた辺境農村の改革を目指すと共に、環境改善を図るものである。中国辺境部は殆ど山岳地帯、砂漠地帯と言って良く、特に我々の調査地である陝西省の黄土高原、甘肅省のゴビ砂漠地帯は降水量が少なく、水分の蒸発量も多い乾燥地帯であり、地下水層も深い。しかも収穫時、畑を掘り起こすとき降る雨は土砂の大量流出を招く。日常的に行われる放牧、伐採、薪拾い等も土砂流出の原因である。特に羊は草の根までも食い尽くすので砂地を露出させるので大敵である。それ故、人の入山を禁じ、農業・牧畜を止め（退耕）、自然林・自然草に返す（還林・還草）というものである。それは黄砂流出を防止することが直接の目的であるが、入山を禁ぜられた自然村の農民を山からおろし、新しい生活環境を与えなければならない。分散している山区農民を「集中」して下山させ、新村を作る。これが「移民新村」建設の趣旨である。これに連動して、天然林の保護を進める「保護林工作」、平原緑化、緑色道路、自然保護区の建設等の生態環境建設へと進めるのである。しかし、自然林、自然草の繁茂はより深いところの地下水を吸い上げるので、黄土高原は一層乾燥して流砂を多くするだろうと、退耕還林政策に危惧を抱く農学者もいることを記憶に留めたい。それほどに「土砂流出」の問題は深刻である。

一昨年（2005年）、調査した折りにみたのは深い峡谷の中腹にへばりついた農家の前面2メートル先は崖であり、家屋の裏は壁まで迫っている土砂の堆積であった。戸数は3軒、典型的な自然村農家であり、近く移民するという状況であった。

そのような自然村を多数抱える県は「国家貧困県」の指定を受けて、各県は「移民新村」建設を開始するが、各郷鎮と道路（村々道路）で結合し、さらに県政府所在地を結合する。かつて自然村に散在していた各農家全体に水利、通電等のインフラを設備することは困難であったが、「移民新村」は高原の中腹以下に建設され、住居も「共建房」（共同住宅）なので通電も可能となり、井戸或いは給水塔によって各戸への配水も可能となっている。最低限のインフラ設置であるが、建設費も可成り節減できるものと思われる。

たとえば、2005年に調査した宜川県高柏郷はその後どうなっているかを見るために今年も訪れた。同新村の主要部分は道路に面しており、家屋は5戸一棟造りの2階建ての共建房からなる。その棟の裏には平屋作りの共建房が続いている。道路に面した各戸は商売や飲食店の営業が可能である。その2階建ての裏口に回ると、レンガの屏で囲われて一つの「院」をなしており、その内部の空き地には牛、羊、豚の舎育を可能とするスペースがあり、バイオガスの発生装置が将来設置されるという。道路から引込んだところに建てられた家屋は専業農家である。2005年当時は入居者も疎らであって生活実態を伺い得なかったが、今年2007年にはほぼ入居も終わっており、雑貨小売店、飯店を営んでいるものもある。半商半農から何れは専業商家へと移行するものと思われる。大部分の家は「出稼ぎ」で留守であり、施錠されており、恰も日本各地で見られる「シャッター通り」を思わせるものがあつた。雑貨店内には様々なものが雑然と並べられ、隣室には自家用の小麦粉の袋が積み、机の下には自家製だというトマト・ジュースのペットボトルが10数本並んでいた。店内の照明は裸電球1個である。しかし、都市の裏町でよく見られるように、商店の前で洗濯をしている風景も見られ、家庭用水が可成り自由に使用可能となっているように見えた。

「労働（勞務）輸出」とはいわゆる「出稼ぎ」のことである。出稼ぎは農家にとって重要な収入源であるので、「移民新村」では積極的に奨励されている。出稼ぎに出るものは、一般に「農民工」或いは単に「民工」と呼ばれ、土木工事、建築工事、道路工事、手車や荷車・天秤棒での運搬等の力仕事に従事し、女性は家事、道路清掃、飲食店等で働くのである。小・中学校を卒業したばかりの少女たちも出稼ぎに出ている。近年では人件費も上昇しているので可成りの金額を親元に送金し家計を助けているのである。十年ほど前、知人宅を訪れた際、夫婦共稼ぎなので子守りに山区農民の子女を雇っていたが、食と住付きで月額10元ほどだと聞いて驚いたことがある。現在ではそれ

ほどでないにしても職種によっては昔のような「口減らし」と言うこともあるのだろう。しかし、県政府は「出稼ぎ収入」を重視しており、労務輸出を活発にするため各種の「培訓」（訓練）を行っている。「一回の訓練は終身の受益、1人の出稼ぎで全家の脱貧」がスローガンである。

「生態環境」建設は、国家が実施する西部大開発戦略の重点の一つであり、陝西省はその「主戦場」だとされている。荒山・荒水・荒灘を克服し、農村、農民の生活環境を安定させ、ゆくゆくは大型農業企業と一体化させようとするものと言われる。その基底に「移民新村」が据えられており、可成りの成果を上げていたが、2006年以降には、それと並んで「扶貧扶農」、「搬遷」、「脱貧致富」の語が多く見られるようになった。それらのスローガンは農村問題を単に農民を荒山・荒地から引き離すことに限定するのではなく、県以下各級政府の主導に依って農家の収入を増加させると共に、「自主、自立、自助」のスローガンが示すように、農民自らの脱貧意識に目覚めさせ、自ら移民を希望する（「自願」）ように導き教育する方法に移行していると思われる。これらのことによつて「移民新村」政策に変化が見られるのである。

宜川県の「沿黄貧困開発工作報告」（2007年9月2日）によれば、山区に分散している貧困農民は搬送地を自ら選択し、農民は生存環境の劣悪な地区から、村境5キロメートル以内に搬遷されるものとしている。そこは道路の起点をなす郷、鎮の中心に近く、村への出入りは便利である。郷、鎮の中心とは郷、鎮政府の所在地或いは幹線道路沿線付近であり、産業帯を建設し得る場所である。しかもそこには教育（学校）、衛生院、科学技術等の社会公益事業等の施設も建設されるように、生存、生活条件もほぼ良好である。搬遷農家はそのような好環境に住宅を持つことを可能にしたと云うことである。

銅川市宜君県では、陝扶弁発（2002）31号「移民扶貧異地開発工作の強化に関する通知」により、他の諸県と同様に、山区等の生産、生活条件の悪いところに居住する貧農の「搬遷異地開発」を開始した（宜君県搬遷位置開発工作報告）。それによると、宜君県は居住分散、交通不便、郵便不良、自然災害頻発、教育・科技・文化遅滞等々によって、2002年省政府により「国家貧困県」に指定された。宜君県では、水、電気、林、田、道、村を一体とする「遷入地移民開発計画」を初め、各種インフラ建設を進める計画を立て、「移民搬遷」を実施した。特に考慮されたのは、住居房と畜舎（牛、豚、羊、鶏）とメタンガス発生装置を同時に設備する、可成り広い敷地を有する農家の建設である。

「扶貧扶農」のスローガンは端的に「貧困克服」に主目的をおいていると思われる。宜君県では良好な成果が得られるに従い、計画が更に進展していくようである。スローガンは「脱貧致富」に変わり、「脱貧」問題は「温飽」（温かい食事）問題へと進み、農家の持続的発展を目指す方向に移っていくように思われる。それは人間と自然環境が共存共融するという生態思想を樹立し、それによつて扶貧活動を指導しようというものである。人間と自然の「和諧」、調和の取れた発展を目指すのである。それを具体的に示すものは、「林中村」の建設である。いうならば、林の中に村を作り、人は林の中に住居を造るというもので、「緑色家園」、「生態家園」の構築を意味している（「沿黄扶貧開発工作」）。それは見方を変えれば、畜舎、バイオガス（メタン）発生装置を設置した住居は一個の独立した農家経済の単位であり、「庭院経済」の建設を企図している（2007年「宜君県搬遷任務の完成状況」）。

移民政策の変化は、農民自身の「脱貧」意識を強めることに向かっていると思われる。宜川県では、貧農の「自己発展能力の増強」をはかり、貧農の脱貧への信念と能力を高めるというものである。県政府は「治窮は先ず治愚にあり、扶貧は先ず扶志にある」とする。「智力扶貧」の路線が強調されている。それは具体的には、農村義務教育管理体制を確立して普通教育9年の完全化を行ない、児童生徒の全面発展を保証し、それによつて農村の未来を考えるという極めて長期的な展望に

立つという農村政策をとったということである。また、農家、農民に対しては科学技術訓練に力を入れ、果樹業、畜羊業等の專業農家の現場指導を展開、特産品であるリンゴについては、日本のフジを導入するなどの品種改良に努めると共に、貧困戸に対し延4万人以上に技術訓練を施した、という。

「移民新村」は確かに生活環境を改善したが、農業、果樹業、畜羊等では直ちに経済収入を上昇させることは困難であり、緩慢な成長をするしかない。沿海都市部との「格差」解消など望むべくもない。さし当たって、農村、農民に収入増加をもたらす得るのは何であろうか。

農業以外では増収に道を開くのは、現在の所、前にも述べたように「労務輸出」しかないというのが、各県の認識であり各県とも一致している。飲食店従業員、保安要員、土木・建築作業員、家政等のサービス提供に対する社会・市場の需要は大きい。各県は「技能培訓」（訓練）を農民に施し、社会・市場の需要に応じ、各都市に労務輸出を仲介する組織を作り、農民に就業を保証している。

沿黄郷鎮の最近の労務輸出は延1.1万余人、労務収入は8,000万元以上に上っている。宜君県でも各種の技能訓練を230回、延18,400人に実施している。

「移民新村」建設に関しては、県・郷・鎮の各政府の主導、管理の下で行われるが、移民する農民の側は如何なる手続きを要するのか。宜君県では新村建設に投入した資金は550万であった（2007年、「宜君県移民搬遷任務の完成状況」）。農民負担分は住居の購入費である。搬遷戸226戸、搬地遷病76戸、計302戸であるから貧困農民と呼ばれる農家にとって、1戸当たり1.8万元は高いのか安いのか。蓄えのない農家は不足分を出稼ぎや、新村建設工事に従事して支払いに充てるのである。宜川県では一院移民搬遷房（4間）で、現在では4万元以上するといわれる。農民の経済的負担は可成り大きいといわざるを得ない。経済的負担が大きければ、県政府主導による移民は強制的とみなされ、農民の不満は高まるであろう。それ故、「移民新村」こそが農民に将来の希望を与える唯一の手段であることを、農民に具体的に示さなければならない。各移民新村にモデル農家を作り、農民に具体的に将来の生活をイメージさせるのである。我々が現地調査した各移民新村では、完全に移民、入居を完了していない場合でも、必ず2、3個の農家が入居しており、日常生活を送ったり、商売に従事している。それがモデル農家であり、我々が案内される農家である。また、昨年訪れた榆林市靖辺県の郊外には、「社会主義新農村」という近未来の農村の姿を示すモデル村が作られていた。道路を挟んだ向かい側には資料館があり、近くの観光地や歴史を示すTVと共に、中国農村の未来像を上映していた。また近くには可成り大きな酒店もあったところからすれば、陝西省の各地の農民が見学に来る観光スポットになっていることが伺える。モデルは農民全てに自分たちの未来を具体的に示すのである。それによって農民は「脱貧致富」の意識を生起させ、移民に自主的、積極的に参加させる方策をとっているのである。

ダム建設のような場合、全村挙げて移民をせざるを得ない。そのような場合でなく、貧困戸に対して移民搬遷を行う場合、貧困戸の移民の確定は如何にして行われるのであるか。

搬遷を希望する貧困戸の当主は、村委員会の評議を求める申請書類を提出する。これを受けて村委員会は評議をし、搬遷希望者名を掲示、公表する。異議がなければ、鎮、郷、県の上級政府が審査を行う。郷鎮政府は審査対象戸をとりまとめる。県扶貧弁公室と派出所は各戸を訪れ照合する。最後に、県扶貧開発リーダー小組の内部決定と同時に厳しく検査する。農民の入居後は管理を容易にし、当該村は移民新村であることを知らしめるため「一村一碑、一戸一牌」を実施する。すなわち、新村毎に建設の行程、戸数、全戸の配置、近隣の景観等を図示するパネル板を設置し、また各戸の門柱には、直径3センチくらいの金属プレートが貼られ、当戸は扶貧政策によるものである旨を明示している。また、ほぼ完成し一ヶ月後には入居が始まるという新村は、赤レンガ造りの平屋

が屏で接続し整然と建設されている。さながら日本の団地を思わせるものである。新村の直前を走る幹線道路は砂利道であり、その道路の両側に面した共建の前は将来の店舗を考えてのことかスレートの石畳であるが、数日前に降った雨が運んだ砂の跡が波打って残っている。道路と歩道の間には1メートルほどの側溝があり、それを渡って新村の内部に入る横道の両側には側溝がある。その横道の側溝も雨で激しく削り取られた跡が残っている。路上は凹凸であり、大きな岩石がゴロゴロしている。雨による道路の被害は今後も続くのであろうか。その道を辿って案内された住居には未だ入居者がいないにも拘わらず、庭の奥には、入居予定者が作ったのであろうか、小さな畑に野菜が育っていた。隣の住居では1人の農民が内庭にかけてセメント打ちをしていた。その住居内の敷地には三室、バイオガス発生装置、便所があるだけだが、将来、飯店経営が出来るように客室用、厨房を建て増しできる分のスペースがある。庭先でセメント打ちをしていた農民はこの住居への入居予定者で、セメント打ちの技術は「出稼ぎ」をしているうちに習得した技術だということである。入居前から余暇を利用して居住環境を整備しているとのことである。このことは自分たちの住居に対して愛着心を持って行動していると興味深く思ったところである。これが県政府の期待する農民の主体性の表れであろう。

甘肅省瓜州県七墩回族東郷族郷は、2001年からゴビ砂漠の荒地の開墾から始まり、当初の計画では2,150戸、11,100人の搬遷であったが、2005年11月に生態移民を完了している。自ら希望しての移民は1,467戸、7,106人（うち、漢族1,011戸、4,847人。少数民族＝回族456戸、2,259人）であった。2006年、境界区分によって当該村の玉門市に移属した移民は618戸、3,036人。現在849戸、4,067人。うち漢族390戸、1,805人。回族264戸1,395人。東郷族192戸、864人）。腰站子郷も、人口7,229人（少数民族は郷人口の41%）。

この瓜州県の両新村の最大の特色は、ゴビ砂漠の荒地を開墾して建設された新村であること、漢族と少数民族の融合新村であること、荒地の中に建設された新村であるが故に、両村とも水利と植林に力を入れていることにある。両村で行われた植林は主にポプラであり、そのポプラ並木の植樹数、距離は「素晴らしい」の一語に尽き、成功しているといえる

融合新村を構成する東郷族、回族は元来、牧羊業を専らにしており、農業についての知識も技術も乏しいとは言え、現在の所農業を専らにして来た漢族と農業になれぬ回族農民の収入には大きな格差があるようである。

これらの移民新村では、搬遷農民に対して二年間に限って戸籍を与えないという。それは搬遷農民が新村での農業生活になじめず、原村に帰ることを望んだり、原村と新村の比較をなお続けている者、原村に戻る者がいるので、何れに定着するかを選択させるためだという。ここにも移民の自主性が重視されていることが伺える。漢族と回族の融合は「和諧社会」のシンボルでもある。すでに移民のある者は収入を増加させ、オートバイ、自動三輪の運搬車を所有したり、雑貨商、製粉業を営む者もいる。七墩回族東郷族郷から腰站子への移動する途中、行き交うオートバイ、収穫物を満載したオート三輪車が多数見受けられた。ロバ荷車も見られたが、それらは道路が平坦だからであり、山道の多い陝西省では見られぬ風景であった。確かに、そのような車両等の所有者にまで達した農民は現在の所、未だ少数であるにしても、何れは全村農家に及ぶと思われる活気を感じたところである。

移民新村建設に当っては莫大な資金を以てインフラ整備を行なっているが、その状況はどうなっているのか。各級政府の関係者による新村の状況について説明を受けるとき、必ず第一に道路建設、水利工事、電気工事の数量が上げられる。例えば「瓜州県九旬峡移民安置項目建設簡介」によると次の通りである。

「飲料用井戸堀6井、水塔6座修理、専用輸水渠40.182キロメートル、支渠26.694、大渠72.42キ



ロメートル、農渠447キロメートル、対外道路16.593キロメートル、35KV送電線20.8キロメートルの架設、10KV送電線23.9キロメートル」という具合である。また、砂利道路、アスファルト道路、コンクリート道路というように道路の種類も詳しく説明される。当初、道路工事については余り深く考えず、単なる道路建設のデータに過ぎぬと思っていた。2006年、3戸からなる自然村農家が移民予定だというので、その実態を見るために出向いたことがある。途中、車を捨てざるを得ぬほどの険路であり、車も入らぬほどの細道で急勾配が続いている。その道は雨水によってえぐられた跡が到るところにある。これが従来の山区の道路の実情である。また、別の自然村に出掛けたときも事情は同じであり、急勾配を数百メートル下って谷底に至り、車を捨て対岸の崖を登って自然村にはいるのである。車を捨てざるを無かったのは急勾配の凹凸道を下る途中で同行車の車軸を破損するということが関わっている。道路の路肩には黄砂の堆積が至るところにあり、踝までの深さがある。丁度、饅頭の皮のように表面は乾燥しているが、中はサラサラである。雨が降ればそれが流れ出すのであろう。その自然村では水は谷から汲み、担ぎ上げるのである。移民新村が建設される地区も殆ど事情は変わらぬので、道路、用水の問題解決は不可欠であると思われる。

また、今年の宜君県の調査の折には、朝から雨が降ったが、その為予定していた調査地の「新村」に入れぬという。道路の悪化のためである。その予定を変更したが、その時には、何と大げさなと思っていた。午後、雨が上がったので急拠、別の新村に出掛けることになったが、それに至る道路は砂利道である。山頂近くまで来たとき、前方にトラックと観光バスが立ち往生していた。午前中の雨で黄土の流砂が泥濘となっており、両車ともダッチロールをする、滑るという有様である。我々の車や先導する四輪駆動車も同様の状況に陥ったが、案内に当たっていた県政府関係者の指示によって、道路端で休んでいた道路工事中の民工が砂利を投げ入れてくれたのでやっと前進することが出来た。目的地の新村に向かって支線道路の坂道（砂利道）を下るが、雨で泥濘化しており、周囲には霧が立ちこめており、車は徐行せざるを得ない。村内の道路は可成りしっかりした砂利道で側溝が設けられていた。調査した農家は敷地も広がったが、水はけは悪かった。また、小学校を視察したが、出席していた生徒は2名であり、他の生徒は雨のため欠席したとのことであり、村内の道路の大部分の事情は悪いのであろうと思われた。陝西省の新村の道路の問題は、雨による流砂、それの泥濘化、時には村への出入りが困難となり孤立させられることもあるということである。

これに対して、甘粛省瓜州県の新村はゴビを開墾して建設されるため、道路問題は風による流動砂の克服にあると言える。新村にはいる支線道路から見える風景の一つは、丁度、柴垣のように麦藁を立てた柵があちこちに見える。それが砂の流動を止め、砂を固定化するのである。その後、転がっている大石を砕き、畑地を開墾していくのである。それを突っ切る道路の両側には側溝、用水路、取水口等が設置され、側溝の外側には50センチおきにポプラが植えられ、その間隙を埋めるように更に外側にポプラが植えられて二重のポプラ並木となっている。この二重のポプラ並木が村中の道路、住居、時には畑の中にまで存している。

また、瓜州県は年間降雨量50~60ミリメートル、蒸発量3,000ミリメートルであり、祁連山脈の雪解け水が頼りであり、高速道路沿いのゴビ砂漠に巨大な人造水庫（ダム）が幾つか作られている。七墩回族東郷族郷では劣悪な自然条件を克服するため、徹底的な「治理風砂」（風砂対策）と植樹造林工作を行なったという。動員数が延2万余人、各種防風林帯368条、125.21キロメートル、緑色通道45条、38.3キロメートルを建設している。村民に義務づけられた植樹は、6,184.4キロメートル（農田防護林）である。

七墩回族東郷族郷は、綿、紅花、甘草等が主産品であるが、調査時は玉葱の10数人が共同して収穫にあたったっていたが、そのような農繁期には出稼ぎに出ている家族も帰宅して作業を行なう。人手不足の時には近所の者に手伝いを頼み、時には人を雇うことも多いという。

村内は漢族と回族とは住み分けているようであった。住居は、宜君県に比して可成り狭いと思われる。案内された回族の住居は入居したばかりで左右の住居はまだ入居していない。狭い庭には、燃料となる枯れ枝が積み上げられていた。漢族の住居は入居して数年を経ているので、それなりに住居に気を配り、家の前には柳や竹が植えられ美化をはかっている。狭い庭の中央には池が掘られ、今は青葱のような野菜が植えられていたが、案内者はそれを手折って食べて見せたりしていた。

新村建設には学校建設や医療施設建設が重要である。中国政府が普通教育九年の重視、教員の質量の充実を打ち出しているのを受けて、各県とも教育等に力を入れている。沿黄郷では教学棟（実験棟）7、衛生院9が改築拡張し、農村中・小学校の配置調整、農村義務教育管理体制の強化、医療衛生条件の改善を実施した。宜君県で見学した小学校は、日本の山間の分校のような小規模で、二階建てで一階に事務室、教室があり、二階には公安（警察署）、会議室が設置され、教員、事務員各1（共に女性）、がいる。

宜君県でも搬遷戸の子どもの通学、通院治療、TV・通信網の「三通」の重視を掲げている。

瓜州県の教育事情は次の通りである。完全小学校1、教育点1を開設し、1～5年級7教学班。全郷の小学生246名、（うち、小学生214名、男子生徒134名、女子生徒80名、中学生32名）。教師数11名（うち、漢族10名、回族1名）、男子教師5名、女子教師6名。教師の学歴、資格は100%充足（腰站子郷の例）。同郷の医院については、中心衛生院2、村問診所1を開設、医療人員6名、（医師4、看護師2）、レントゲン、心電図機、等の簡易医療設備を備え、年間受診者は延2,000人以上である。

九旬峽郷では初級中学6を開設、郷政府書簡の村診療所を開設。

移民新村は、中国にとっての初めての経験であり、その将来については、指導管理する各級政府（および関係者）にとっても、搬遷農民の側にとっても未知数である。特に異地搬遷についてはその感が深いのである。現代中国の都市部と農村の間で広がる経済格差をどこまで縮小し得るのか、誰一人として言明できる者はいないし、主に絶対貧農を対象とする搬遷移民の政策は各級政府関係者の情熱的な活動によって実施されているにしても、農村の貧困一般を解消しうるのか。また、移民新村の建設に当っては政府の補助、資金投下によって行なわれているが、現在でも各級政府は資金不足に悩んでいるとき、補助から自助へと政策が変わるにつけて補助等がいつまで継続されるのか、果たして自立は可能なのか、これも不明である。

移民新村の農業は「一村一品」政策を探り、経済的効果（収入増加）をはかっており、農工商の連結が企図されている。村の主産品がリンゴであれ、クルミであれ、ナツメであれ、生産量は余りにも膨大すぎる。新村の自然状況はなお厳しく機械化も困難である。

人民日報（2007.9.12）では、「新農村建設の有効形式を推進する」という論述で、「外出農民工返郷創業、工商企業帯同農村発展」を論じているが、論旨は賛成であるにしても、現地調査をした者からすれば、各新村の自然環境が全く異なるので、各新村の経験を集約し得ず、農村発展の方法を一般化しうるか否か、なお、問わざるを得ない。「外出農民返郷」についても、「月刊中国 NEWS」は都市部での人手不足を「労働不足は最早工場や建設業者にとって脅威となっている」状況を伝え、各地に広がっていると述べている。どこまで「返郷」が可能なのか。また伝えられる「集約農園」方式はどこまで一般化しうるのか。我々は、今後も「移民新村」問題に注目し、問題を見続けなければならないのである。

搬遷移民の生活を支えるのは、現在のところ農業収入、各種の政府補助、出稼ぎ収入のようである。特に出稼ぎは手取り早く現金収入を得るので各県とも積極的に奨励している。都市部の経済的活況は「労働者不足」を起しているといわれる（「月刊中国 NEWS」07年10月号）。それによると、特に「手に職のない」女性労働者の需要が急増し、時給も5元から7元に上がっている。低所

得労働者不足が賃金コストの上昇をもたらし、例えば内装工事職人は日給80元、鉄筋関係の工賃はトン当たり240元に上昇している。それに伴って、かつては1,000元程度の「民工」の月給は2,500元に上昇している。都市部の人手不足は、農村の就業条件にも直接影響を及ぼしており技術を有する民工は有利であり、各県は労働輸出に関して「技術培訓」に力を入れている。それは農村内部にも変化をもたらし、農繁期の田植え手伝いの日給も15元から30元に上がり、農家が雇う者の平均月給は685元が上がっているといわれる。確かに、農村内部に変化が生じていることは確かであるが、都市部との格差を縮めるものではない。農村に小康をもたらす緒についたばかりといわざるを得ない。農民の一部にはその小康に甘ずる者も出て来ているようである。都市の生活は何かにつけて経済的負担が大きく苦しい。これに対して、「新農村建設」のため政府は様々な農村優遇政策（農業税廃止、1ムー当たり20.08元の食糧補償、10元の個人負担に対し国が40元の医療補助、大病の際の援助、義務教育費・雑費の無料化等）を実施しているためである。

「移民新村」では小学校の設置、07年より義務教育の無料化、教員は全て有資格者を配置し、無資格者の再教育（教師培訓）が定められた。新村の規模に応じて教室数、教員数も異なり、小学校高学年、中学校は数ヶ村に1校が設置される。甘粛省で、全生徒が移民する小学校（教員1、生徒6）の開校式の記録をTVで見たが、高度3,300mの山地小学校の教師は18才から45才の現在まで、一人で教育に当たってきた。今、自分も新村小学校に赴任するにしても、パソコンも使えない、と悩んでいる。このような無資格の民弁教師の培訓が各地で同様の問題をひき起していると思われる。甘粛省は回族（回教徒）が35%を占め、新村もこれに対応する比率を示しており、教室内でも男子は回教徒の印である白帽、女子はスカーフをかぶっている。教育内容は全く同一で、民族教育は行なわれない。しかし、七墩回族東郷族新村の回族移民はモスクの建設を希望しているが、今のところ建設されていない。村内移動中に見たモスク建設予定地は目下のところ集会場として使用されている。集中と融和の姿を移民新村に認めることが出来る。しかし、何れは相当数の児童が村を離れるとき、高齢化の進む新村の将来は、と思うことも大である。

### 3 調査データから見た「移民新村」政策の効果

#### ——延安市宜川県高柏郷移民新村の場合

郝 仁 平

今回の現地調査は3年ぶりに延安市宜川県高柏郷移民新村を訪れた。高柏郷は宜川県の東側に位置し、有名な壺口瀑布に近い。この地域は黄河沿い地域で、年間降水量が少なく、自然条件は延安市の中でも非常に厳しい地帯の一つである。そして、極めて劣悪な生産、生活条件や生態環境にあるこの地域の貧困層が、貧困から脱却し豊かになるための有効手段として、高柏郷移民新村計画が早い時期から県や郷の貧困扶助計画の中に取り込まれ、2004年に実施された。前回の2004年8月に訪ねた時はまだ建設途中だったこの移民新村は現在すでに移転を完了し、ヤオトンから移ってきた人たちが生活を始めていた。新村はほとんどは庭付き平屋一戸建てで、農家として作られており、庭には小さいが家畜小屋や納屋のスペースもあり、間取りは三間ほどである。村にはコンクリート道路が整備され、電気、水道などのインフラ施設も整えられている。大通り沿いには、商店として活用できる二階建ての長屋が並んでいる。移転する前より生活・住居環境は明らかに変わった(写真p12・p13を参照)。

我々が現地を訪ねる前の2007年7月に、調査業務を委託した西北大学陝西発展センターの葉道猛先生が十数名の調査員を率いて現地でアンケート調査を行った。この調査は昨年の予備調査を踏まえ、宜川、子長県および延川県の五つの移民新村を対象に、無作為抽出法でそれぞれ30～40世帯の農家を選出し(ただし、出稼ぎなどの原因で調査不能の場合、代替農家を調査する)、計175世帯を調査し約130通の有効調査票を得られた。また移民新村全体の状況を把握するため併せて村長調査も実施した。宜川県高柏郷移民新村もこの調査対象の一つであった。ここでは調査が行われた高柏郷移民新村の30世帯のデータの中から、いくつかの項目を取り上げて移民新村政策の効果と問題点を簡単に検証してみたい。なお、すべての調査データに関する詳細の分析は後日にする予定である。

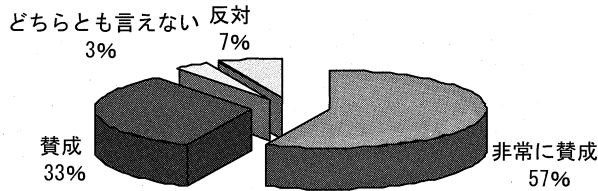
#### 移転の決定要因と過程

高柏郷移民新村は宜川県扶貧開発プロジェクトの一つで、黄河流域の遠隔山地に分散し、生存環境の劣悪なところにある桑蘭、驃騎、史家庄の三か村と四つの村民小組、233世帯、1,007人を郷政府の所在地である高柏村に集中的に移転させ、貧困からの脱出を計るものである。いわば「整村移転」のプロジェクトである。移民新村の建設は2004年4月に着工、同年の10月末に工事が完了し、同年の12月から住民が移住し始めた。調査対象の30世帯はすべて2005年度内に移住したものである。

移民新村政策はダム建設など強制的に移転させる開発移民とは違って、原則として農民たち自らの意思で申請し、郷村・県政府の審査を経て移住世帯を選定することとしている。移転がスムーズに行われ、また効果を挙げるには農家の賛同を得られるかどうかが鍵である。高柏郷移民新村の場合、「あなたは新村への移転を賛成しますか」(Q208)の質問に対して、非常に賛成および賛成の答えはそれぞれ17、10世帯で合計27世帯、9割を超えている。または反対している2世帯に対して、「なぜ最終的に移転に同意をしたか」と尋ねたところ、「ほかの人が移転をしたから」と回答をした。これは整村移転の場合、転居をしなくてもやむを得ず移転に賛成したケースもあることを示唆

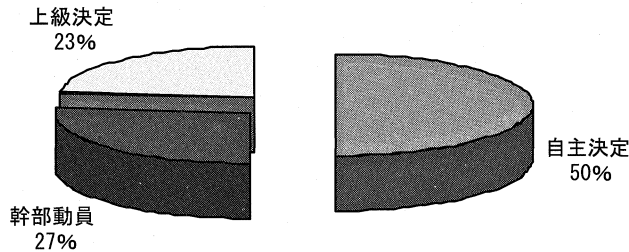
している。

図1 移転に賛成するか



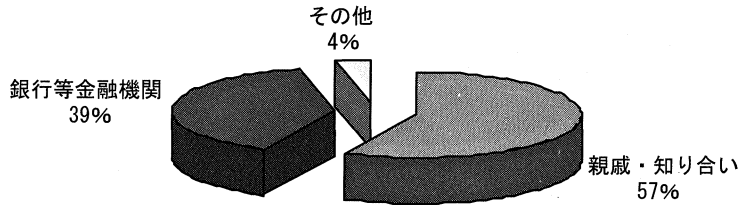
また移転の決定要因（Q204）について尋ねたところ、自らの意思で決めたと答えたのは半分の15世帯で、残った半分は幹部の説得（8世帯、27%）、上級の決定（7世帯、23%）によるものである。このようなことから、約半分位の農家の場合、政府行政部門あるいは村幹部により細かく説得工作が行われた上での自発的に移住になったものと言える。言い換えれば、移民新村への移転は結果的に農家が自主的に決めたものであるが、政府部門の主導で進められた一面も否定できない。

図2 移転の決定要因



一方、移転するに伴い、政府の補助金政策などに関しては殆どの農家に事前に周知されている。また移転費用については、政府補助金を除いた自己負担額は世帯人口、住居面積などによって金額のばらつきがあるが、平均にしておよそ12,000元である。そのうち2世帯を除く残りの28世帯が借金を持っていて、その金額は2,000元から10,000元までとなっている。そして「どこから借金をしたか」（Q210）の質問に対して、親類や友人からの借入は最も多く16世帯（57%）で、金融機関とその他からの借入はそれぞれ11世帯（39%）、1世帯（4%）となっている。内陸地域の宜川では、金融システムなど市場経済の発達度はまだ低く、地域での相互扶助的な貸し借りが存在し、資金の調達には伝統的なインフォーマルな借入に大きく依存していることが伺える。

図3 どこから借金をしているか

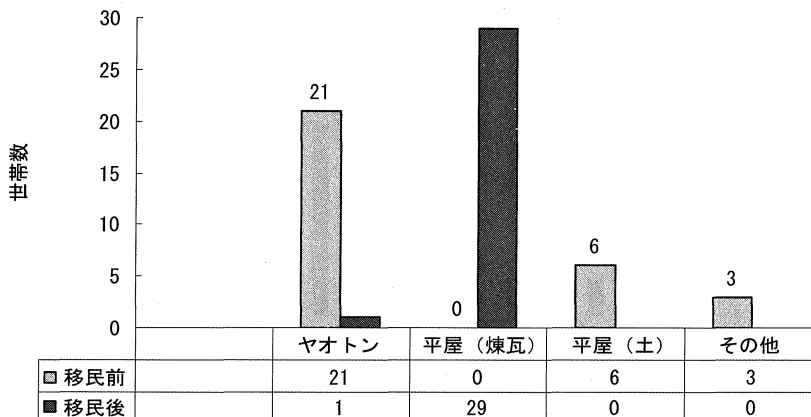


生活状況の変化

高柏郷移民新村の移住者は転居する前に、町や幹線道路から遠く離れ、情報が閉ざされた桑蘭、驃騎、史家庄の三か村と四つの村民小組（集落）に散在している。その殆どが山間部や急傾斜地、峡谷地帯の斜面に掘られたヤオトンに住み、生存空間が非常に狭く、生活環境が劣悪な状況にあった。

図4に示されたように、移民転居事業により、まず農家の住居条件が大幅に改善された。転居前に7割の21世帯が地割れや地すべりの危険があるヤオトンに住み、残りの3割（9世帯）が土で作られた平屋などの簡易住宅に住んでいたが、移転後1世帯を除いてすべての農家がより快適な丈夫な煉瓦で作られた平屋に変わった。ただし、住宅面積の変化（Q304）については、以前より広くなったと答えた世帯が約半分の16世帯で、逆に狭くなったと答えた農家が11世帯で4割近くを占めている。

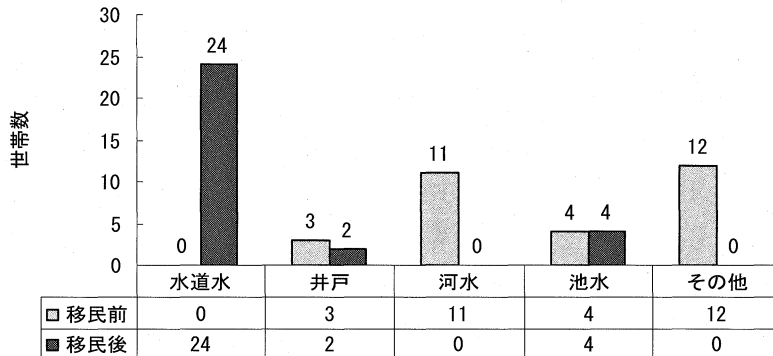
図4 住宅種類の変化



また、移転する前の地域には、道路、電気、水道などのインフラ条件が非常に遅れていた。とくに宜川県は黄土高原の乾燥地帯で、年間降水量が少なく水不足の問題が古くからの深刻な問題であった。飲用水を始め日常生活用水は限られた雨水や数百メートルも離れている河水に依存していた。

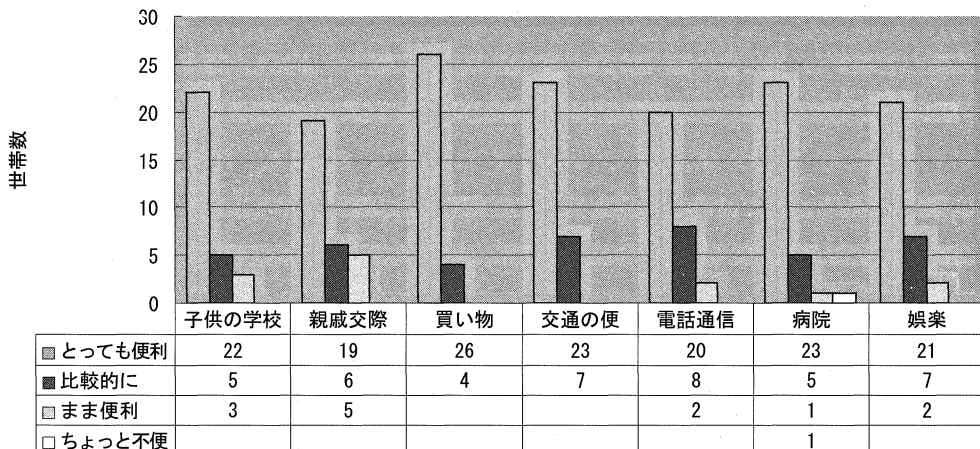
図5のように、移転前の農家は水道がなく、井戸水を利用しているのもわずか3世帯で、ほかの人々は河水や池水を利用していた。水運びは毎日に欠かせない重労働で衛生面にも問題があった。そして、移民新村に転居することによりインフラが比較的整備され、8割（24世帯）の農家が水道水を利用できるようになり、生活スタイルも変わり、「千年の難題」であった生活用水問題もようやく解決された。

図5 移民前後生活用水状況の変化



以上のように、住居や生活用水などの側面から見ると、移民新村への転居により農家の生活環境が大幅に改善されたと言える。そのほか、集中移転することによって、交通、教育、医療、通信などの条件もよくなり、都市部（鎮や県城）や市場へのアクセスが良くなった。そして、「以前の居住地と比べると生活が便利になったのか」の質問（Q417）に対して、すべての世帯から「非常に便利になった」、あるいは「便利になった」の回答が得られた。さらに生活環境に関する幾つかの主要項目について、移転前後の状況を比較してもらった（Q418）。その結果が図6に示されている。すべての項目については7割以上の世帯が「非常に便利になった」と回答しており、移転後の生活条件に対する人々の満足度合いの高さを物語っている。ただ、病院や学校、親戚交際に不便を感じている人もいる。

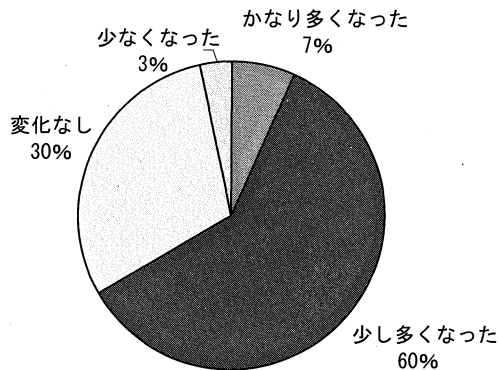
図6 移民前後生活環境の総合比較（複数回答）



## 経済状況の変化

「移転前後経済収入の変化」(Q401)について尋ねたところ、「やや多くなった」と回答したのが18世帯で全体の60%を占めているが、「変化なし」と答えたのが3割の9世帯でやや目だっている。全体的に生活環境の変化と比べて経済状況の変化が小さく、中には移転後収入が減少したと回答した世帯もある。これは転居してからまだ1年あまりで時間が短いこと、また移転時の借金返済がまだ完了していないことによる影響であると推測できる。

図7 移民後収入の変化



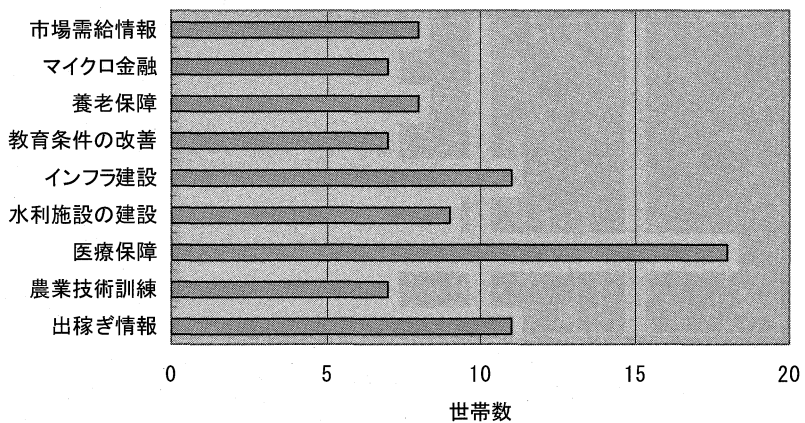
また農業生産・経営状況の変化を見てみると、殆どの世帯が移転前と変わらない(Q114)。高柏郷移民新村の場合、周辺5キロメートル以内にあった桑蘭、驃騎、史家庄の三か村から集中移転してきたので、農家の土地請負契約や面積が変更せず引き継がれた。生産・経営も少量の雑穀以外、主に林檎やナツメなどの果物である。これも経済収入が変化しなかった重要な原因であると考えられる。ただし、転居により交通や通信が便利になり、都市部(鎮や県城)や市場へのアクセスが良くなったことで、農家生産・経営の変化の兆しが現れ始めた。その一つが出稼ぎ労働者の増加である。高柏郷移民新村の書記朱金鋒氏のインタビューによると、年間6ヶ月以上出稼ぎに行った労働者は移転前の100人から200人に倍増した(村長調査票)。また調査対象の30世帯のうち、出稼ぎ労働者がいるのは25世帯で8割以上である。出稼ぎ労働者数も29人から38人に増えた(Q112、Q119)。今後出稼ぎ労働者の増加に伴い、農家の生産・経営構造も徐々に変化し、収入も増えると予想される。

## 総括

移民新村政策は劣悪な生産、生活条件にある地域の貧困層が、貧困から脱却し豊かになるための手段として、その最終目標は「移住ができる、安定した生活ができる、豊かになれる」ことである。以上の調査データに基づいて幾つかの側面から検証した結果、移転後農民たちの生活状況が明らかに改善された。その意味で移民新村プロジェクトが大きな成果を挙げたといえる。しかし、農家の生産構造の変化および農家の所得水準の向上といった面から見ると現時点ではまだ顕著な効果があったとはいえない。農民たちが最終的に貧困から脱却し「豊かになれる」ためには、彼らの意識改革をはじめとする自助努力が必要であるが、図8に示されたように、政府(とくに地方政府)による様々なサポートも不可欠である。



図8 政府に提供してほしいサービス（複数回答）



## 4 変容する退耕還林・還草政策

### —「新農村」政策を巡って—

飯塚 勝重

改革開放に基づく中国の経済発展は東部沿岸地域に突出し、中部・西部の格差が大きくクローズアップされた。特に1990年代後半の長江流域を中心とする大水害は、この地域のインフラ不足、生態環境の悪化を露呈し、地域格差を際立たせた。このことにより、中央政府はかねてからの検討事項を急遽実現すべく、西部大開発事業を中心に、中国全体の格差是正を目標とし、また悪化した自然環境回復の一面である、森林拡大策として中国六大林業事業を展開、特に中国式徳政令と称する退耕還林・還草事業を1999年以降実施・発足させた。

しかし、こうした政府の積極策にもかかわらず、東部と中西部との格差は相変わらず縮まらず、とりわけ全国農村に様々な問題が噴出した。いわゆる三農問題であり、政府の大規模な農村補助政策が次々と措置され、農業税の撤廃、各農戸直接補助、義務教育無料化、農業技術教育・指導など多岐にわたる。しかし、なお都市と農村の格差は正は縮小せず、農民の現金収入は労務輸出（出稼ぎ）に頼り、医療保険、養老・年金問題は漸く地域的な実験段階に過ぎない。かかる情勢からこれら山積する諸問題を総合的に解決する「社会主義新農村建設運動」が2006年から展開されるようになった。

「新農村建設」運動は、総合的多角的な農村開発運動である。ただし、今回調査した各地域の実情からすれば、われわれの研究テーマに関しては、根本的な農民極貧層を救済して、農民自体の格差是正を目指す対策と見られていたものが、「新農村建設」運動に吸収され、地方政府の力量不足、或いは新規政策対策費に資金が取られるからか、本来の扶貧対策とは異なる生態（或いは整体）移民が実施されているようである。本来、山間僻地に散在する極貧層を救済して、生活上便利な人里に、或いは生産上有利な地域に移転居住させる全村的或いは全集落的移民が「扶貧移民新村」の目的であろうが、今回訪問した各県政府の方針を聴取した限りでは、基本農田（または基本口糧田）確保の困難性、省・県政府の移転補助費の限界により、多額の移転費用を自弁できる希望者（自己）のみの新村移転が見られる。もしも此が最近の傾向とすれば、本来の極貧層を救済する、または、余りの遠隔地にいる農民、高齢者のみの家族など生活困窮者を救済する目的から大いに逸脱している事になるのではないかと懸念されるのである。

西部大開発事業の展開によるインフラ整備により、先ず国道的幹線の高速度道路化が次々と実現し、現在は郷対郷の舗装道路化、郷対村、村対村段階の通道化が進んでおり、黄土地帯の起伏の激しさはやむを得ないとしても、可成り深奥にまで調査地をのぼす事が出来るようになった。今回も目的地に達するまでには、相当の悪路に難渋しながら、車で一日500km以上を移動した日もあり、効率よい調査が可能になった。しかし、一方では、折角の調査地に到着しても、訪問する新村の住民の多くが殆ど出稼ぎに出ており、先般西北大学に委託して各戸調査済であるデータを検証する作業が僅少となる集落も存在した。特に今年は、「8年の憂い」として懸念されていた退耕還林・草事業について、国務院から更にもう一期延長決定が公表されており、その喜びを聞きたかったが、残された主婦や老人からは余り具体的な声を聞き取ることは出来なかった。とりわけ、陝北地方の還林

農戸で、新村移民した例えば、宜川県高柏郷においては、移住地で日本の民宿に当たる「農家楽」を経営していても依然退耕還林地を保持しており、その補助金が継続する間は、「農家楽」が軌道に乗るまで打工に出て、別途に現金収入を得ることも可能であろう。但し、補助金の継続とは言え、最大8年間であり、その間、地場産業を活かし（例えば、高柏郷では街道筋による「農家楽」経営に必要な通過客の足止め策として、リンゴ・梨など園芸作物のブランド化と土産品としての陳列化）モータープール、給油所の設備、児童などの遊戯施設設置を図るなど、更に設備投資が必要ではないか。もともと「農家楽」は、郷・村に居住していた農民が、近距離に転出して城鎮（小都市）化したために、かつての生活を懐かしむため、時々訪れる旧農民の保養施設と考えられていたものであるが、現在では、日本の民宿に相当する一般旅行客用（農家院ともいう）であり、将来はモーターにも通じる要素があり、必要な観光施設を計画的に整えていく必要があるのではないか。

甘粛・瓜州県各地の移民新村では、大規模水庫（ダム）建設のための移民、遠隔高地からの移民、少数民族地からの移民、政府補助金が限られ、可成りの額を都合した自己移民、など扶貧移民との境界がやや曖昧であるが、現状としてやむを得ない現実的な各種の移民の状態を見ることが出来た。

本稿付記「8年の憂い」として、中国国民が注目していた退耕還林・草国家補助は、本年6月以来の國務院の決定により、更に一期延長されることになった。扶貧活動を順調に進めるために、多くの関係者が安堵していることであろう。

中国国家林業局による「国家生態網」は2007年10月11日「中国緑色時報」を引き、退耕還林農家への補助金一期継続決定後の政策の重点に付き、国家林業局副局長李育材の発言を取材している。李育材は、9年の退耕還林成果はめざましいが、しかし、「部分的に農民の生計は困難である。退耕還林農民の生計は3種の状況にある」とし、第1は64%の農民が自然条件にも合い、その他安定した収入状況にあり、補助に頼らずとも、比較的影響を受けない。その第2は26%位の農民が大いに収入が不安定で補助金への依頼度が高い。その第3は10%位の農民の基本口糧田が不足し、増収の道に欠け、その生計は嚴重な困難に遭うだろうと分析した。その上で、李育材は、今後の農民の脱貧と補助金問題は嚴重な注意を要する問題であるとし、更に今後は基本口糧田、生態移民、後続産業発展、封山禁牧舍飼 農村農源建設等「5個結合」が重要であると説くと共に、今後は25度以上の急傾斜の退耕還林、森林に適する荒地・荒山の植林を重視するとしている。

また一方で、李育材は、退耕還林実施の間、不適當な地域を許可なく実施・拡大したケース、退耕は15度以上の斜面となっているのに、緩い斜面や平地まで還林してしまったケース、科学的規律によらず、植生回復が不可能となったケース、生態林80%・經濟林20%の國家基礎の制限比率が無視されたケース、林間の農作物禁止をあまりに厳しくしたため、農民の經濟効益を損ねたケース、地方により退耕還林面積の虚偽報告が見られたことなどを指摘している。問題は多岐にわたり、國家としても今後の退耕還林には慎重に対応せざるを得ないが、生態環境の強化も現在の中国にはまだまだ余裕がせに出来ない重要事である。

本稿に関わる退耕還林政策については、本誌別稿「中国の緑化政策—退耕還林・還草政策を中心に(3)」を参照されたい。

## 第三部 西北大学委託調査

### 「移民新村」政策 西北大学委託調査

扶貧「移民新村」政策研究の基礎資料となる新村移民者の実態調査を、今年度から本格的に展開するため、西北大学陝西省發展研究センターにその調査を委託した。8月中には、実地での戸口調査も終わり、一定の整理も完了していた。われわれが陝北調査を終わり、甘肅調査に向かう間を縫って、データ受領と調査上の問題点、今後検討を加えるべき項目などを研究するため、西安市内で検討会を開催した。調査員を指導した同センター葉道猛教授から総括報告を受け、実際に調査に当たった調査員の貴重な意見を聴取した。予定した調査地には、軒並み、戸主や若者が出稼ぎに出て留守が多く、何度も同一農家を訪れることになり、なかなか能率が上がらなかった。また調査項目が多岐にわたっていた反面、折角訪問できた農家には、老夫婦や女性で、調査項目に答える正確に回答を用意できない農家も相当数あった。



実際、われわれが高柏郷村で実感したとおり、まだ、移転したばかりで村容を整えている最中だからと言う事もあるが、家計を守るという実際の必要からであろう、出稼ぎの多い表通りは、日本で言うシャッター街である。

受領した調査データは今後慎重に分析・判断して活用したいと考えている。とりわけ、「扶貧移民移転」政策と「新農村」建設政策による扶貧の内実が調査の上にもどの様に現れてくるか興味深いものがある。

## 第四部 平成19年度中国陝北・甘肅省地区移民新村研究調査日記

平成一九年度「中国内陸部における貧困対策に関する研究」

### 陝西省陝北調査

- 9月1日(土) 午後11時半西安・咸陽空港着 西安驪苑大飯店泊
- 9月2日(日) 13時05分 延安市宜川県到着(銅川・黄陵・洛川・富県経由) 任県長と会談  
15時30分 宜川県幹部と座談会 ~18時40分 宜川賓館泊
- 9月3日(月) 11時30分 壺口瀑布を経て高柏郷到着(驟雨あり)。移民新村・曹家庄村、史家庄村農家楽調査。 17時10分 宜君県到着 亀山生態区公園見学。県幹部と懇談  
鑫忻酒店泊
- 9月4日(火) 8時30分 朝方やや強めの降雨あり。県政府幹部と座談会開催。 11時15分 丁家溝移民新村調査 政府委員と座談会 13時宜君県出発15時30分西安着  
西安驪苑大飯店泊
- 9月5日(水) 10時20分 咸陽師範大学訪問 学長雷依群教授等と懇談  
13時50分 咸陽空港発 16時10分 敦煌空港着 飛天大酒店泊
- 9月6日(木) 敦煌市内見学 包教授と合流 瓜州県調査事前打ち合わせ 飛天大酒店泊

### 甘肅省瓜州県・蘭州近郊調査

- 9月7日(金) 8時 瓜州県へ出発 10時10分 九旬峡プロジェクト瓜州白旗堡移民地各村訪問・調査  
12時 瓜州賓館着 15時 西湖郷安康村移民地訪問・調査 瓜州博物館見学  
18時 瓜州賓館着 瓜州賓館泊
- 9月8日(土) 8時30分 七墩回族東郷族郷訪問・調査に向かう。 11時到着 郷委、村民代表等と座談会 民家、学校等訪問。 15時15分 腰站子村訪問・調査。郷政府、村民代表等と座談会。  
18時 9日飛行便の都合で敦煌へ戻る 21時45分 敦煌着 飛天大酒店泊
- 9月9日(日) 7時10分 敦煌空港発 8時40分 蘭州空港着 11時30分  
蘭州大学常務副院長賀徳衍教授と座談会 14時 蘭州市博物館・市内施設等参観  
西蘭国際大酒店泊
- 9月10日(月) 8時 黄河上流・劉家峡水庫周辺生態林観察 15時永靖県九社・陳井郷柏林子仁和村新農村整村調査 19時45分 宿舎帰着  
20時 調査総括方針検討会~22時 西蘭国際大酒店泊
- 9月11日(火) 9時 白塔山道観見学 14時10分 蘭州空港へ  
17時40分 蘭州発 19時30 北京空港着 紫玉荘泊
- 9月12日(水) 10時 北京空港へ ~11時50分着 13時30分 北京発上海経由20時30分成田着  
帰国

三〇八

## 第六部 収集資料

### 1 沿黄扶貧開発工作汇报 中共宜川县委・宜川县人民政府

(2007年9月2日)

#### 1 沿黄扶貧開発プロジェクト報告

中国共産党宜川县委

宜川县人民政府

##### 一. 県の概況

宜川県は黄河沿岸にあり、延安市東南部に位置し、5鎮7郷、1つの城区街道弁事処（市区役所出張所）、202の村委員会を管轄し、総人口は11.6万人である。総面積は2938.5平方キロメートル、人口密度39人／平方キロメートルである。陝北の黄土高原・丘陵・溪谷区域に属し、地形は複雑で、最高海拔1710.5メートル、最低海拔388.8メートルである。県内の森林被覆率は59.9%である。宜川は国家扶貧開発プロジェクトの重点県であり、2005年、県の一人当たりのGDPは3746元、全国平均レベルの22.7%、全省平均レベルの30.88%、全市一人当たり平均レベルの17.36%、財政収入は2010万元、農民一人当たりの純収入は2001元、絶対貧困人口は4776人である。

##### 二. 近年の沿黄扶貧プロジェクトの成果

扶貧開発プロジェクトが新たな段階に入ってから、われわれは「集中的に移住させ、総合的に編成配置し、村の整備を推進し、貧困からややゆとりのある生活レベル（小康）へ歴史的飛躍を実現する」という沿黄扶貧開発戦略を堅持している。「扶貧道路を建設し、移民村を建設し、産業地帯を建設し、貧困戸を金持ちにする」構想をめぐって、「5つの統一」を行い、「4つの機能管理」の質を向上させ、「3つの項目」の負担軽減措置を行い、移民新村建設をコンテンツとし、重点をしほり、難関を攻略し、優位点を付加し、主導産業を支えに、基地を強化し、特色を創り、効益性を高め、貧困人口の衣食問題解決に立脚して、貧困人口の増収、貧困地区の生産生活条件の改善を行い、産業開発、インフラ施設建設、教育による貧困扶助（智力扶貧）、旧村の再開墾、生態系の整備、出稼ぎ労働という6大案件を最優先で実施し、扶貧開発プロジェクトを着実に推進し、段階的に成果を得た。三年来、累計で13805.21万元の資金を投入し、14の移民新村を新たに建設し、合計1600棟の住宅（ヤオトン）、5146室（孔）を建設し、81の村組を安定配置し、1600戸7629人を移転させた。上水施設38カ所、水がめ658カ所、新しい道路681キロメートル、教学楼（実験楼）7棟を建設し、9つの衛生院を改築拡張し、農村用電、ラジオ・テレビ・ネットワークの各戸への架設率はそれぞれ100%に達した。2006年、全県のナシの生産量は10.9万トン、生産額1.85億元、沿黄7郷鎮の新たなナシ栽培面積は10280ムー、ホワジャオ（花椒）2700ムー、クルミ920ムーである。畜舎飼いの羊は6028匹増え、農業体験民宿（農家楽）が13軒開業した。基本農地8419ムーが新たに整備された。農村労働力の輸出（出稼ぎ労働者）のべ1.1万人、労働収入8000余万元を達成した。2006年、全県の農民一人当たりの純収入は2001元、2001年と比較して745元純増、37%の増加であった。黄河沿岸の農民の一人当たりの純収入は1282元で、2001年と比べ447元、35%増である。

### 三. 具体的方法

われわれの具体的方法は：

#### (一) 適地適作、科学的計画で、貧困層に金持ちになる青写真を示す

数年来、われわれは「専門家の論証、政府の指導、大衆参加、科学的な政策決定」の原則をずっと堅持し、「扶貧道路の整備、移民村の建設、産業地帯の拡大、貧困戸の富裕化」の基本構想に基づいて、その土地の事情に合わせて貧困扶助と持続可能な発展を結合させた長期計画を制定し、その年に計画を実施してきた。1、「適地適作、合理的配置、科学的計画、項目別指導」の原則に基づいて、農業、林業、水利、牧畜、交通等の専門技術員を集めて配置し、現地における広範な調査研究に力を入れ、村レベルの計画を制定するためによりどころとなるものを提供した。2、大衆を組織指導し貧困の原因を分析させ、今後の発展の方針を探らせて、参加型貧困扶助開発のモデルに基づいて、村民大会を組織開催し、村の状況に応じて、人々の増収、生産生活条件の改善、産業構造の調整、科学技術教育、医療衛生、社会公益事業の発展等について討論を行い、多くの人々が自らプロジェクトの選択、計画制定に参加した。3、関係部門と技術人員を組織し、村民が選んだプロジェクトに対して評価、論証を行い、扶貧プロジェクトを確定し、科学的系統的な扶貧開発計画を制定し、現地の実状に適した科学的発展と富裕化への道をしっかり選んだ。4、「政府組織、大衆参加、一年計画、年内分割実施」の原則に基づき、辺鄙な山岳地区の分散している貧困層が自ら移転地を選択し、生存環境の劣悪なところから、村の境界から5キロメートル以内の出入りに便利で、郷鎮を中心とし、国、省、県、郷の道路を基点とした産業地帯をよりどころとする郷鎮政府所在地か公道沿線付近で、生存環境の条件がよいところ、産業発展に優位な場所、移転する人々の積極性と自発性を十分呼び起こす場所に移転させた。

#### (二) 厳格な管理、質の向上により、貧困戸に発展資本を蓄えさせる

質と効果と利益は沿黄扶貧開発プロジェクトの命脈であり、直接扶貧攻撃の勝敗を決める。プロジェクト実施中、われわれは終始、党と政府の首脳とプロジェクトの法人が全責任をもち、主要幹部が全体を把握し、担当幹部が重点を把握し、扶貧財政監督が管理し、関連部門が協力して役割を果たし、上と下が心をつなぐ業務機能をこなし、しっかり、力を合わせた。1、制度保障を強化した。移民新村建設中、われわれは広範な調査研究によって、『宜川県黄河沿岸扶貧開発プロジェクト資金管理法』、『宜川県黄河沿岸扶貧開発プロジェクト実施法案』、『宜川県黄河沿岸扶貧開発プロジェクト責任追究考査方法』等の一連の制度措置を制定実施し、扶貧開発の順調な進行を保証した。2、プロジェクトの質を厳しくチェックした。具体的な作業において、「5つの統一」を堅持して建設を行い、「4つの機能管理」で出来を把握し、「3つの措置」で負担軽減を保証した。「5つの統一」とは：計画の統一、入札の統一、標準の統一、建設の統一、検収の統一である。城市（都市）建設部門が「経済的実用性、美観、総合的配置を考慮し、一気呵成に」の方針に基づいて、丈夫で実用的で、周囲の環境と調和のとれた、20年後も大丈夫なものをつくるとともに、大衆の願望と経済的耐久力を考え、新村に整備される水、電気、道路等のインフラ施設、教育、衛生、科学技術等の社会公益事業をあわせて設計し、一括実施し、一つの基準と一つのものさしで、移民新村に対し統一的計画を実施し、高水準の、機能が完備された、効果の高いものになるよう努力した。3、資金のタイアップを行い、投資効果を引き上げた。資金を得るのは容易ではなく、扶貧資金の使用において、われわれは終始「ルートを乱さず、用途を変えず、タイアップし、それぞれの機能を記録する」という原則を堅持し、部門、案件、人材の有利な点を整理統合し、できるだけ水、電気、道路、ラジオ・テレビ、学校、衛生等の各種資金をすべて全体の計画に組み入れ、全面的に考え、村の整備プロジェクトをいくつかに分けてまとめ、実施にあたっては順次照合して、集中的に投資し、最大の効果が得られるようにした。

### (三) 総合的な配置を行い、村の整備を推進し、貧困人口の自己発展能力と持続可能な発展力を高める

集中移住の目的は貧困人口が安定的に貧困から脱却することである。移民新村の経済と社会の各事業の発展を加速させるため、「移転し、安住して、豊かになる」の目標にそって、われわれは移民新村の建設と農村のインフラ施設建設、主導産業の開発、農村文化、教育、衛生等の各社会事業発展を統一的な計画のわくに入れ、総合的に組合せ、全面的に推進し、産業開発、インフラ施設建設、教育による扶貧、旧村の再開墾、生態環境改善、出稼ぎ労働の6大案件を最優先に実施し、無知、貧困、医療難の問題を統一的計画内で結びつけ、大衆の交通、用水、通学、医療問題の解決に力を注いだ。移転戸は居るところ、耕すところ、頼るべき財産を得た。

このため、次のことを行った。

#### 1. 産業開発を強化し、貧困村の人々が着実に貧困から脱却するために有効なコンテンツを築く。

特色のある主導産業を発展成長させることは貧困戸が永久に貧困から抜け出し、金持ちになる基礎を築く重要な柱である。沿黄扶貧開発において、われわれは十分現地の資源と主導産業の優位性を発揮させ、「発展の大規模化、生産の規格化、経営の産業化」の構想に基づいて、産業構造を積極的に調整し、貧困農民がその土地に合った特色ある栽培、養殖、加工等の増収項目を発展できるようにした。リング栽培を盛んにし、草畜業を発展させ、第二次、第三次産業を発展させ大幅に貧困層の収入を増やし、貧困戸の活性力強化に努め、「移転し、豊かになり、貧困に戻らない」を確かなものとした。二年来、7つの郷鎮移住ポイントでナシ10280ムーを新たに栽培し、累計すると99114ムーに達し、ホワジャオ2700ムー、クルミ920ムーを新たに栽培し、それぞれ累計で97290ムーと2681ムーになった。畜舎飼いの羊は6028匹増え、農業体験民宿は13軒創業し、貧困層に安定した増収コンテンツができた。

#### 2. インフラ施設整備に力を入れ、貧困村の大衆が着実に貧困から脱却する飛躍の場をつくる。

農民の安定的増収の問題を解決する持続的効果のあるしくみづくりを目指して、道路、水、電気、基本農地等の農業インフラ建設を強力に推進し、根本的に貧困郷村の生産生活条件を改善し、沿黄の人々が着実に貧困から脱却する飛躍の舞台をつくった。われわれは道路建設の重点を移転地と移転計画地をつなぐ道路に置き、2年間で、全県に郷に通じるアスファルト道路5本117キロメートル、標準外の砂利道4本23キロメートル、4級砂利道12本323キロメートルを建設した。そのうち、孟依路は3郷鎮35村23000人の貧困人口に派生的に利益をもたらし、人の流れ、物流、情報の流れをスムーズにし、直接、沿線農村の主導産業の発展成長を促した。500余万元を投資した閣樓鎮殿頭は集中的給水プロジェクトにより、閣樓鎮16ヵ村8530人の飲料水問題と8500ムーの主産物のリング生産用水の問題を解決した。一人当たり2.5ムーの基本農地という目標実現のため、川地や台地をならし、水平段丘と泥の堆積地を再利用することを主に、新たに基本農地8419ムーを整備した。

#### 3. 教育による扶貧を強化し、貧困層の自信と能力を高める。貧困解決には無知を解消し、貧困扶助には志を支援する。

われわれは「九年制義務教育の普及」攻略と、小中学校の配置調整を結びつけて、地方政府が責任をもって、等級をつけて管理し、県を主体とする農村義務教育管理体制を真剣に遂行し、農村教育への投資に大いに力を注ぎ、安定した経済投資の保障メカニズムを徐々に整備し、農村の学校運営条件を改善した。移民新村サービスのために閣樓、高柏、集義、秋林等中心となる小学校に304万元投資し、規模を拡張し、面目を一新し、また、「2免除1補助」施策を真剣に実施し、教育資源と教員の人材配置を向上させ、学生の全面的な発展を保証した。沿黄の医療衛生条件を絶えず改善し、64万元投資して、高柏、閣樓等の4つの衛生院を相次いで拡張し、現在すべて利用が始まっている。同時に、貧困地区の人々の科学技術レベルが劣り、生産技術が低い状況に対して、われわ



れは「具体的、効率的、実用的」という原則に従い、科学技術研修訓練に力を入れ、主導産業をめぐり、果樹、牧畜等の専門家を組織し末端機関で現場指導を展開し、移民新村のために各種研修班を20余期実施した。とりわけ、リンゴの4大技術研修は貧困戸40000余人が直接受講し、科学技術資料5000余部を配布し、一人の農民が一つの貧困戸を導くという目標を達成した。

#### 4. 旧村の再開墾を強化し、貧困層が産業を発展させるための基盤を築く。

2年来、集中移住を実施した51の旧村に対し再開墾整備を行い、土地面積が1162.8ムー新たに増えた。8つの移民新村の土地472.5ムーと比較すると、耕地面積は690.3ムー増加し、移民新村建設は耕地を減らさないばかりか、耕地面積を新たに増やした。

#### 5. 生態系整備に力を入れ、貧困区域の持続可能な発展継続力を増強する。

人と自然の調和発展を統一的に計画に組み込み、人と環境が共存し調和するエコロジーを打ち立て、循環型経済と持続可能発展の新しい理念で沿黄扶貧開発を指導し、秋林高柏の移住ポイントでは2360ムーの生態良好な退耕還林地をよりどころとし、「林中村」を建設し、「村を林の中に建設し、人は林の中に住む」エコ家園を積極的に建てた。旧村にはもともと傾斜25度以上の耕地をすべて退耕還林（草原）したところがあり、退耕還林の進捗が速いうえに、農民の増収の新しい強みとなっている。移民区の統一計画実施において、農村の資源利用と果樹園建設、草生栽培と養畜、エネルギー施設建設を連携し、政策的支援及び金融支援を強化し、農村の内部構造を調整し、「果物、養畜、メタンガス（沼）、ヤオトン（窖）、種草」の五位一体のエコ建設の道を歩み、貧困地区の生態植皮を徐々に回復し、貧困地区の持続可能な発展継続力を強化し、「自然の園（緑色家園）」を創建する。

#### 6. 労働力の輸出に力を入れ、貧困層の増収の道を開く。

貧困戸の労働力の出稼ぎ研修を展開し、積極的に貧困村の労働力を組織して順次送り出すことは、貧困農民の増収の最も現実的で最も有効な道であり、貧困から脱却し豊かになる基本的活路でもある。われわれは市場の需要に基づき、職業中学の訓練基地を足場に、飲食業、保安、家政サービス等需要の大きな職場の技能訓練に力を入れ、また積極的に雇用者、大中都市の労働仲介組織と連絡を取り、雇用契約を結び、オーダーによる訓練、専門的訓練、オリエンテーション等の育成訓練方式をとり、農村労働力の移送を速め、「行くことも、留まることもできる」ようにし、「一回の訓練で、終身受益、一人の出稼ぎで、家族全員が貧困から抜け出す」という目標を達成し、訓練を経た貧困戸の労働力が十分就業できることを保証した。近年来、沿黄郷鎮が送り出した労働力は1.1万余人で、労働収入8000余万元を実現した。

### 四. プロジェクトにおける経験

#### われわれの経験：

##### 第一、集中移住と町の建設を結合し、町と郷の一体化建設推進を有利にした。

高柏、集義移民新村は観光環状道路と郷政府所在地を選び、数百人の小さな郷鎮でしかなかったのがにわかに1400人と3300人に増え、それぞれ総人口の5分の1と5分の2以上を占めるようになった。2ヵ所の移民新村はインフラ施設が完備され、サービス機能は万全である。集義西坡新村は2640平方キロメートルの自由市場1ヵ所を新設し、現代的息吹に満ちた農村小鎮がほぼできあがった。新市河、集義、閣楼北庄移民新村は孟依路沿線（今年アスファルト舗装）に建設され、秋林鎮大子、高樹、壺口椿曲の3つの移民新村は鐘壺路脇に建設され、2本の道路は25000余人の人口増をもたらした。

##### 第二、集中移住と産業構造の調整を結びつけて、農民収入の安定的増加を有利にした。

集中移転は、土地資源を増やし、主導産業の規模を拡大し、農業生産条件を変え、交通条件を改

善し、農産物の品質と効益を高めた。集団居住も自由市場の形成を促進し、続けて一部の農民の果物とドライフルーツの経営販売、観光サービス業を主とする第三次産業への投資を促し、貧困人口の収入を増やした。高柏新村は観光環状道路沿いにある現実に即して、農家のサービス業参入を促し、営業用店舗152戸を新設し、「農業体験民宿」飲食スポット8軒を新たに開業させ、地元経済の発展を導き、産業開発を促進し、さらに農民の新しい増収の道を切り開いた。

**第三、集中移転とインフラ施設建設を結合し、貧困戸の発展のための資本蓄積と自信強化を有利にした。**

移民新村の貧困人口をもとのヤオトンから平屋建ての家に転居させ、もとの1000元にも値しない固定資産を3万元に増やした。この30倍近い増加で、貧困戸の貧困脱却の基礎を築いた。もともと少額融資300元～500元は5戸の相互保証を必要とした。現在は信用で5000元～10000元の貸付を保証し、貧困戸の借入れ難の問題を解決した。運転資金ができて、貧困戸は産業を発展させる自信と決意と資本の蓄えをもった。社会公益事業の発展を通じて、貧困人口の生産生活環境は改善され、貧困人口は都市の住民並の生活をおくるようになり、資質に大きな変化が現れ、貧困人口がゆとりある生活へ邁進する歩みを加速した。

**第四、集中移住と文教、衛生、科学技術、社会保障事業の発展を結合し、農村文化の建設推進を有利にした。**

集中移住、村の整備推進でより重要なことは貧民戸の資質と能力を向上させることである。資源を整理統合し、集中移住と集中投資をタイアップし、貧困地区の社会公益事業発展の歩みを速め、農村文化、教育、衛生、科学技術事業の全体レベルを向上させた。扶貧プロジェクト実施の根本は大衆であり、農村の最低生活保障制度と有機的に結合させ、各種の矛盾と不安定要素を有効的に取り除いた。

**第五、集中移住と農村末端組織建設を結びつけて、党の執政能力強化を有利に行った。**

移住と共産党員の先進的教育活動の発展継続を結びつけて、新村に党支部、村委員会活動室と一緒に建設し、農村の末端組織の活動の場をつくった。改めて党組織を設置した後、人員は相対的に集まり、党員の教育管理研修に便利になり、同時に農村の末端幹部の人材の再編成が行われ、エリート中のエリートを選び、末端指導グループの戦闘力を高め、新村建設において率先垂範の役割を果たした。移住を通じて、党と政策に対する人民の心の中のイメージが高まり、末端組織の結束力と求心力を強めた。

## 五．主要課題と意見

1. 扶貧補助金の基準が極めて低い。わが県は国家扶貧開発プロジェクトの重点県であるが、7つの郷鎮は黄河沿岸にあり、2つの郷鎮は西部の低木林区に位置し、年間財政収入はわずか2000万元、農民の一人当たりの純収入は2001元、貧困人口の収入は1000元に満たない人もおり、現在建設されている移民の移住用住宅（4間）には少なくとも4万元以上必要で、貧困戸は3万余元の自己負担分をまったく調達できず、水、電気、道路等のインフラ整備関連の資金は含まれていないので、いきおい移住するのは金持ちで、しないのは貧乏人という現象が起り、はなはだしいのは移住で貧困に逆戻りする。

2. インフラ施設整備関連の資金が足りない。扶貧開発は体系的な総合プロジェクトであるが、わが省が実施している扶貧政策では住宅建設に5+1の補助金しかなく、移民新村建設の土地収用、土地付随物（収用される土地の地上地下にすでにある各種合法建築物、構築物、樹木）補償、地盤整備、坑道硬化、緑化、美化、給水汚水排出、農村用電の各戸配電、護岸整備・土留め、文化教育、医療衛生等必要なインフラ施設整備の相応な関連資金がない。たとえ移転できても、安住するのは

難しく、まして金持ちになれるとは言えない。新農村建設、調和社会の建設との距離はかなり遠い。

3. 産業支援力を強めなければならない。産業開発は貧困層が着実に貧困から抜け出す唯一の支えであり、ここ数年全力を傾注してきた開発によって、わが県は累計で果樹園が32万ムー増え、そのうちナシは23.4万ムーで、農民一人当たり2.5ムーとなり、基本的に規模拡張は完了した。昨年来、新第一期県委員会、県政府がおりよく「果畜沼草網」五位一体の果畜複合型生態循環農業の建設構想を提案し、全力を注いで推進したが、土地が痩せ人民が貧しいわが県では、思うにまかせず、各項目の投資のやりくりが難しく、省が主導産業の支援政策を打ち出すことを願っている。特に果樹栽培サービスシステム建設、果物貯蔵加工、リーダー企業の育成、果実の袋掛けに対する補助金、果物農家に対する技術研修、養豚、メタンガス施設建設、果樹園の草の間作、防電ネット架設等の面で補助金の支援が得られ、主導産業をできるだけはやく発展成長させ、安定的貧困脱却を確保したいと願っている。

4. プロジェクト、資金に対する支援を向けてもらえるよう力を注ぐ。わが県は黄河沿岸にあり、10年のうち9年も干ばつで、凍害、雹害等自然災害が多く、脆弱で低水準のインフラ施設は自然災害に対抗する能力が極めて低い。省市が水利、交通、防電等のインフラ施設建設プロジェクトに大きな支援と優先度を与えて、農業経済発展の「ネック」制約となっている問題を解決してくれることを願う。

5. 扶貧融資参入の敷居を低くする。金融機関の扶貧補償貸付業務は、要求が多く、基準が高く、金額が小さい。貧困戸は大抵みな古い借金を負っていて、補償貸付指標があっても、ため息をつくしかなく、しばしば投資と始動資金の不足で天候に頼って農業を行っている。

6. 相互協力の扶貧メカニズムの創設を提案する。わが県の財政収入は2000万元だが、年平均支出は2億元余に達し、収支の矛盾は非常に際立っている。省市がさらに移転給付金を増やすことを希望する。また同時に、南北県区に合致した扶貧メカニズムを立ち上げ、友好都市をつくり、調和発展を推進することを希望する。  
(訳 高木晶子)

## 2 腰站子基本情况簡介

### 2 腰站子郷の基本状況

腰站子郷は瓜州県東部の東104キロメートルに位置し、疏勒河中・上流にあり、東は三道溝鎮、西は扎花営移民基地、北は河東郷と接しており、南高北低の地形、平均海拔は1410メートル、年平均気温7.6～8.2℃、年平均降水量58.2～75.3mm、無霜期135日である。

腰站子は、隋唐時代ここに三道溝小街から双塔堡に通じる中間の宿駅として名を知られている。1986年省委員会、省政府が「陝西」移民基地として、建設計画を実行に移し、1996年9月正式に郷政府を開設し、瓜州県の管理下に入った。2003年、河東養豚場が腰站子郷に移管され、2006年、省の疏勒河整備委員会（疏建委）が安定配置した扎花移民ポイントが腰站子郷に移管された。現在郷全体で6つの行政村、41の村民小組と河東養豚場を管理しており、総面積は51.37平方キロメートル、人口7229人、耕地面積26049ムーである。少数民族人口は全郷総人口の41%（東郷族が少数民族人口の98%を占めている）。2006年全郷の農村経済総収入は2715.4万元、郷財政収入は54万元に達し、農民一人当たりの純収入は2683元に達した。扎花基地の経済総収入は263.6万元に達し、一人当たりの純収入は1050元、農民一人当たりの純収入は700元であった。腰站子は、建国から80年

代中期まで輝銅山、蘭州軍区、省軍区等の国有企業と部隊の兵站生活基地であった。ここは交通の便がよく、蘭新鉄道が郷に沿って通っており、郷政府から河東駅まで4キロメートル、三道溝駅まで13キロメートル、県・郷・村道路の流れはスムーズである。

腰站子郷内は気候温暖で、太陽、水土（気候風土）資源はとても豊かで、各種の農作物の成長に適しており、域内で栽培されている農作物は主に、小麦、トウモロコシ、綿花、ゴマ、アブラナ、ニンニク、孜然（別名安息茴香）、ウイキョウ、バンランコン、カンゾウ、工芸用瓢箪が少量栽培から小規模栽培、全域栽培に発展し、2007年全郷で実施している特産作物の栽培面積は6600ムー以上、特産物栽培はすでに農民の増収の新しい強みとなっている。養殖業が副業から主産業へ、放飼いが柵飼いに、単一が多角化へ転換し始め、養殖業の総生産量は大幅に増加し、牛と羊の飼育数は2006年で2.3万頭・匹であったうえに、2007年5000頭匹以上が新たに増える見込みで、種草養畜業の収入が農民一人当たりの純収入の20%以上を占めることを努力目標としている。

近年、郷党委員会、政府は積極的に「両西」プロジェクト政策と資金援助を勝ち取り、絶えず郷内のインフラ施設整備力を増強し、現在までに、全郷で完成したインフラ施設建設プロジェクトは62件、開削敷設された用水路は49キロメートルである。2006年、57万元を投資して8キロメートルの用水路整備を完了し、そのうち輝銅村は5キロメートル、草湖溝村は3キロメートルで、腰站子村と輝銅村には温室畜舎建設モデル農家50戸を建設した。2007年「両西」プロジェクトの投資を勝ち取り、用水路4キロメートルの開削敷設、温室畜舎建設モデル農家50戸を完成させる計画である。目下、用水路工事は開削作業が進行中で、温室畜舎建設はメイン工事がすでに完了し、7月末には使用開始の予定である。省の「両西」プロジェクトの多大な支援によって、腰站子郷では農業用水路整備が毎年実施される見込みで、大部分の用水路が老朽化し修理を怠った結果、農地灌漑に困難が生じ、人々の負担が過重になっていた問題は徐々に解決されるだろう。また同時に、温室養殖モデル拠点の建設が我が郷の養殖業の発展を率先して導く役割をはたし、さらに全郷で全面的に放牧を禁止して、生態系を回復し、農民収入を増やし、牧畜業の基礎を固めるために大いに力を入れる。

（訳 高木晶子）

### 3 宜君県移民搬遷異地開発工作的匯報

### 4 建設 生態宜君・富裕宜君・和諧宜君 理論と実践〔主編熊暉〕（中共宜君県委・宜君県人民政府2007年7月）

### 5 宜君風情（宜君人民政府）

### 6 瓜州県九甸峡移民安置区項目建設簡介

### 7 瓜州県七墩回族東郷族郷基本情況

### 8 包曉霞・岳子存著『辺縁化与辺際性郷村社会』（蘭州大学出版社 2003年）

### 9 咸陽師範学院簡介

## 第七部 平成19年度研究活動

### 研究会合（平成19年12月迄）と主議題

- 4月28日（木） 15:00～17:00 第1回研究会議  
中国扶貧新村政策研究のための農戸調査質問項目確認
- 5月24日（木） 14:00～16:30 第2回研究会議  
夏期中国現地調査のコース・日程当確認  
瓜州県移民新村調査（郝仁平報告）（横川伸報告）
- 6月28日（木） 13:00～17:00 第3回研究会議  
平成19年度中国扶貧移民新村政策調査、重点地域選定  
陝北地区移民新村調査（委託）進行状況確認
- 8月2日（木） 11:00～14:00 第4回研究会議  
1 夏期調査日程・調査地および研究進行について確認のため  
2 平成20年度国際シンポジウム（中国）開催についての検討
- 9月28日（金） 13:00～17:00 第5回研究会議  
1 夏期調査総括 2 調査報告書作成について  
3 H20年度延安シンポジウム開催について
- 11月1日（木） 13:00～17:00 第6回研究会議  
1 夏期調査総括Ⅱ 2 調査報告書編集について  
3 延安国際シンポジウム開催について
- 11月29日（木） 15:00～17:00 第7回研究会議  
1 延安国際シンポジウム開催について
- 1月24日（木） 13:00～17:00 第8回研究会議  
1 延安国際シンポジウム開催について

### 公開講演会

- 8月2日（木） 14:00～16:30 5号館5階大学院研究室  
講演 袁 鋼明氏（中国社会科学院経済研究所研究員・アジア経済研究所客員研究員）  
演題 「西部地域の新農村建設—陝西省戸県と甘肅省永靖県のケース」  
概要 中国における2006年初頭から開始した新農村建設政策に基づき、西部低開発地域農村における現状、困難、進展などについて、特に農民所得問題に焦点をあてて、講演者が行なった調査事例を紹介、各方面から分析を行なった。

### 研究発表

- 6月28日（木） 13:00～14:00 アジア文化研究所室  
横川伸「甘肅・永靖県からの移民について—NHK映像との関連において」
- 11月17日（土） 15:00～18:10 アジア文化研究所室  
飯塚勝重「中国緑化政策—退耕還林・還草工程（その3）継続する退耕還林政策」

1月25日（金）13:00 アジア文化研究所2007年度研究大集会（白山スカイホール）  
郝仁平「中国内陸部における貧困対策に関する研究—「移民新村」政策を中心として」

平成一九年度「中国内陸部における貧困対策に関する研究」

#### 研究調査

9月1日（土）から9月12日（水）まで、中国陝北地区・甘肅省瓜州県・蘭州中心に農村扶貧政策の現状について調査。本稿報告書を参照。

#### 移民新村戸口調査委託

中国西北大学陝西発展センターに委嘱して陝北地区「移民新村」政策に関わる総合的農戸戸口調査を7月から8月末にかけて実施。研究班の中国調査の際、データ等資料を受領。本稿第三部を参照。